

宇高書房 目次

小麦さん、ここにあり。	三代目ぴこ彦	2～10
What should I do?	新道知樹	11～45
ざ・ぼーず	ホウカゴノテイオー	47～59
学生Aの小話集	日高呑	60～70
夏の暑い日	白黒燐寸	71～74
解き放たれた矢の主	八汰烏	75～81
グローリア	喜多宮枕	82～102
そして世界が減びるまでは	小金井ささら	103～107
奥付		108

小麦さん、ここにあり。

三代目びこ彦

この学校が波に飲まれてから三カ月がたった。

まもなく第二波がやってきて現在の一階どころか建物を全て飲み込んでしまう「大沈没」が起ころうしいがこの町の住人は大して気にしていない。

溺れるのも人生。浮くのも人生。

なんてポジティブシンキング。

放課後二階にある自習室から中庭を眺めると手すりの端まで水面が上がってきていた。どこか家からか逃げた金魚が浮かび上がってきて呼吸をしてもまた戻っていった。この調子なら「大沈没」は案外近いかもしれない。

ふと反対側の窓を見るとガジュマルの木が夕日を浴びて枝を振るっていた。そのきらめく枝先に頭の中で鍍金の歯車が回りだして遠い記憶を呼び起こす。



小麦さんと昼休みに屋上に生えたガジュマルを見に行ったことがある。ガジュマルといえば沖縄に生えている妖怪みたいな木で、枝がだんだん地面に向かって伸びただけでひとつの森を構成するように見える代物である。だからそこには妖怪キジムナーが棲んでいるという。夏休みのうちに生物部の誰かが植えたんだと小麦さんが教えてくれた。あつというまにガジュマルは信じられない速度で成長して屋根を貫きやがて旧校舎を飲み込んだ。今でも日に日に成長し続けているらしい。それに興味を示した彼女は初めての逢瀬の場所をそこに指定した。その初めての逢瀬が学校内というのも奇妙なものだ。しかも昼休み。

「でっかいねえ」

「でかいよお」

「うわあでかい」

彼女は極端に語彙が貧弱だったのかもしれない。ガジュマルの根っこを手のひらで触り腰掛けた。吹きすさぶ風に彼女のショートカットが揺れる。僕はそのとき何をしてたのかどうしても思い出せない。写真を撮ってあげていたかもしれないし一緒に木に頼ずりしていたかもしれない。まさか。僕はそんなキヤラクタじゃない。とにかく小麦さんはガジュマルの木の中心で僕に笑いかけたのだ。

「来年もまた見にこられるといいね」

でもそれは叶わぬ願いだった。そう。小麦さんと僕は実質的に一カ月ぐらいしか一緒に手をつないでいなかったから。

ガジュマルを見た数日後にまた同じ場所に僕は呼び出されたのだ。今日みたいな放課後、夕焼けの空のした彼女の透き通るような肌が輝いている。校庭を見ていた小麦さんは振り返らずに口を開いた。

「私の体のことを知っているよね」

「もちろん」

十年前ならまだしも彼女みたいな体質の人間は爆発的に増えてるからもちろん知っていた。ならいいや、と彼女はいう。

「なんだかしらないけど私の体は男でも女でもないの。相手によつて都合よく性別を変えられるんだ」

「かたつむりみたいだよね」

「まあ私の先祖はカタツムリだし」

そういわれてみれば彼女はいつも渦巻状の殻を背負っていた。マイマイ種の人間の典型的な特徴だ。

もちろん性別が変わるといっても劇的に容姿が変わることは無い。もともと彼女は中性的な顔立ちだったしどちらの性別でも不思議ではなかった。ただあんまり長く同じ性別を続けているとだんだん性別が固定されてきてくるから定

期的に性別を変えなきゃいけないの。でも今までこの学校に入ってからもう二十回以上性別を変えてるけどそれを指摘できる人はいなかったね、と自慢げに笑う小麦さん。彼女いわく性別を変えたいときは鼓膜の奥にたまった空気をイメージしてそれを皮膚で撫でるようにイメージすればいいらしい。するとポン、と耳の奥がスパークするそう。とっても便利な体。

で。イ組に今月神戸から転校してきた女の子がいる。話したことは無かったけどたとえるならば美術館に収蔵されているマイセン磁器の婦人みたいに不気味なぐらい整った顔をしていた。彼女は一通りその子を的確にほめた。恋する人間の口調だった。まあそういうことなのだ。

「それじゃ仕方ないわな」

一週間前もどこかの誰かに僕のことをこんな熱心に語っていたのかと思うと心の底に黒々しい穴が開いたような気がした。ともかく彼女は今日にでも耳の奥をスパークさせる。彼女で無くなる。その事実だけが虚空に浮かぶ。

「あはは。〇〇くんには悪いことをしたと思ってる。でも男には興味は無いでしょ」

振り返ってぺたんとして僕の頭をたたく。

「残念ながら。これでお別れだ」

「うんうん。一週間楽しかった」

そんなわけでその日の二十三時五十九分五十九秒、「彼女」は「彼」になり僕は独り身に戻った。

寂しいわけではない。悲しいわけでもない。僕は平気だ。でも彼女にまた会える日があるというのなら僕は宇宙の命運を賭けることも辞さない。

■

彼女（もしくは彼）はどこにいるのか考えた。最近校舎の中を歩いていても

まったく見かけないのだ。

ときどき教室の机に走り書きのメモだけが置いてあって

「めっきり暑くなりましたね」とか

「ガジュマルの木は大きくなりましたか」とか

「そろそろでんでん祭りの時期ですが太鼓はもう買いましたか」とか

実にどうでもいい私信が綴られているのだが本当に神出鬼没に置かれているので彼女の足取りをつかむ手がかりにはならないのだ。

もしかすると男になったのを機に容貌も変えてしまったのかもしれない。そういえば彼女の髪の毛の栗色だって染めていたのだ。いるとすれば三年ホ組の一番後ろのジメジメした席、図書室の奥の奥のそのまた奥の持ち出し禁止書架、螺旋廊下の中腹。ガジュマルの木のとっぺん。でも結局どこを探してもいなかった。あと可能性があるのは軽音部。軽音部。そう軽音部。小麦さんは軽音部だった。

入ったとき二人いた先輩と無闇にハードボイルドなスリーピースバンドの真似事をしたそうだけどそんな先輩方も既に卒業してしまい軽音部は彼女だけの単窟となった。ガジュマルの木に呼ばれた次の日、軽音部が活動する放送室内の防音ブースで彼女が演奏するギターを聞いていた。弾き語りだった。

へーいやんぐーあーゆーあーぼおらべああ、いええすばとしいーいずぼーらべあーとうー。のんのん。しいーいずあえすかるごうう。おうまいがと。ぼーらべあーいーつあろつろおぶえすかるごお。あろつろおぶえすかるごお。あろつろおぶ、あろつろおぶ。

(My My Polabear / by THE Cherry Bozu 20xx)

弾き終わってから彼女はつぶやく。

「さすがの私でも一人でバンドはできないなあ」

「ぺよん、とギターが変な音を出した。」

というわけで小麦さんはメモ帳に乱れ切りの如く歌詞を書き殴りつつスカウト活動を始めた。自分のバンド「チェリーボーズ」にふさわしい人材を集めるのだ。やっぱりメンバー選びにはこだわりたいよね、という。一日かけて校舎の隅から隅まで回り他のバンドで活動中の人間はもとより「ダイヤの原石」というわけで音楽未経験者も尋ねて回った。でも結局「私の演奏に見合う人間がいなかった」そう。ちなみに僕は早々に戦力外通告されていた。なんたる恥辱。けつきよく苦難の黙考の末最初につれてきたのはアヌムスさんというインドネシアの青年。続いてスクラップ場から持ってきたのはハスキーボイスの介護用アンドロイド。最後はハイビジョン特集に登場したホッキョクグマをスカウトすることに決定した。

「ホッキョクグマの力強い腕でドラムを叩いたらかつこよくない？」
「かつこよくない。」

でも彼女は自慢の行動力で白熊の檻まで用意していた。来月あたりはシーズンだから出かけようかな。虫取り網を肩にのせた彼女は笑う。
そのあと僕たちは二人で宇宙を感じた。

今頃小麦さんは飛行機で北極までひとつとびしているんだろうか。飛行機でひとつとび。上昇気流でひとつとび。まあ彼女が夢を追っているならばそれも悪くないではないか。悪くないではないか。

遠くの時計塔が五時の鐘を鳴らした。



ふらふらとした足取りで放送室に入るとそこにホッキョクグマさまが鎮座ましましていた。突然の展開にのけぞる僕。彼は長い望遠レンズのついた一眼レフを大事そうに磨いている。

「あれ、もうクマは日本に来てたの」

「もうってなんだ、お前は。俺はもう三カ月近くこの部屋にいる」
ふてぶてしく呟くクマ。

「じゃあ小麦さんは」

「知らんね」

心臓を打ち抜くような声が響く。彼女はこのホッキョクグマを放送室にぶちこむとそのままだこかへ行ってしまったと教えてくれた。実に自由自在。再び彼女の足取りは途絶えてしまった。仕方ないので埃っぽい放送室の床に腰を下ろす。それにしてもこのクマはこんな殺風景な部屋で三ヶ月も過ごしているんだろうか。

「んなわけないだろう」

クマは暇つぶしに渡されたお古の一眼レフカメラを片手に時々ぶらぶら外に出て歩いているといった。胸に抱えたカメラを見せられる。大きくてよそよそしいそのカメラもホッキョクグマに抱かれてはやたら小さく見えるのだ。こんなクマがカメラで何を写すのか。「鮭でも撮るの」と聞いたら右アッパーが飛んできた。

「最近ハマってるのはこれだな」

ホッキョクグマが手渡したのは現像から仕上がったばかりの一枚の写真。草むらの中をにんじん色のディーゼルカーが走っていた。たぶん学校近くの駅だろう。

「ホッキョクグマなのに鉄なのか」

「鉄で悪いかよ」

そのディーゼルカーが好きなんだけどそれを撮って以来一度も見かけないんだよな。当たり前だろう。ディーゼル機関が浸水したら使い物にならないだろうし。かろうじて流されなかった電車が防水加工の蓄電池を積んで走っているんだよという話をした。

「詳しいな」

「まあな。ところで熊、熊の名前はなんていうんだ」

「名前なんてどうでもいいじゃねえか」

「ふうん。そうか。じゃあテツでどうだ」

「お前のセンスに脱帽だよ」

熊の口から自分のセンスをなじられることになろうとはよもや思っていなかった。まあ自分でも自分のセンスに失意を隠せなくなってきたところあいだったから別によかったんだけど。しかし悪くねえな、といった彼の賛同を得たので彼の名前はテツになった。実に単純明快。
ところで。

「小麦さんはどこいったんだよ」

「知らんね。彼女さんと今頃よろしくやってるんじゃないのかい。私の夢は夜開く、なんていつてたぞ。あいつ」

そんなのウソにきまってるうに。彼女（もしくは彼）特有の見栄っ張りだ。こんな狭い部屋でこれ以上テツと話していると気が滅入りそうだったので立ち上がった。

「もしかしてお前はあれか。小麦を追いかけてるのか」

僕が取っ手に手をかけたとき後ろから貫くような声が飛んできた。黙っていると彼ははんはんと頷く。

「やっかいな男だね」

「クマにいわれてたまるか」

図星をつかれてつたっていると後ろから肩を叩かれた。駅に行くんだろ、俺もついてくよ。背後から覆いかぶさるようなテツの影が伸びる。特に断る理由も無いから黙って歩く。ナトリウムの床に一步一步彼の足音が刻まれる。途中すれ違った生徒会役員がテツに挨拶した。彼の存在を知らぬは我ばかりだったということか。

「ところでお前はなんで駅に行くんだ。放送室で暮らしてるんだろ。電車に乗って帰る必要もあるまいに」

僕が聞くとふん、と彼は鼻を鳴らした。

「狩にいくのさ」

「狩？」

「今日こそにんじん色のあいつをしとめる」

ああ。線路の傍にたどり着くと盛り土の上に彼は上り三脚を設置してカメラを乗せた。螺子を回してしっかりと固定。露出を調整。試し撮りも上々。因縁の相手に復讐する準備は整った。秋風の下、彼は満足げに微笑む。

「いつでもこい」

どれくらい待っていただろう。

地平線の向こうから夕日を浴びながらそいつが駆けてきた。地面を踏み鳴らすような轟音を立てて。うなり声が高らかに響く中、ハンターは一人静かに草むらにいた。黒光りする砲身を獲物の鼻先に固定。やつは速い。汗が肌を伝っていくことを感じながらそれをぬぐうのも惜しい様子でただひたすら彼は息を潜める。きらめくそいつの目が見えた。草むらのハンターに目をふることなくそいつはただまっすぐ前を向いて突進していた。そんな直情的な彼を隠れてしかも横から狙うという行為にハンターは一抹の卑怯さを感じていた。男なら正々堂々正面から打ち抜くべきではないか。それこそ好敵手として最大の敬意になるだろう。決意を固めた彼は堂々と立ち上がった。砲身を持ってそいつの正面にひらりと走りこむ。それに気づいたそいつは目をさらに光らせて雄たけびをあげた。

「まだまだだ」

ハンターはぎりぎりまでそいつをひきつけてから打ち抜くつもりだった。あまりの彼の気迫にそいつが突進するスピードを緩める。

「いまだっ」

鼻先ぎりぎりのところで彼は引き金を引いた。

閃光。

■

閃光の中、僕は三カ月前に吹っ飛ばされていた。

目の前のトロリーバスの停留所の横に置き忘れられたような電話ボックスが転がっている。とうの昔に電話線は切れてところどころ錆が浮いているそれは僕と小麦さんをつなぐ唯一の連絡手段だった。その頃まだ携帯電話なんて誰も持っていなかったし当然といえば当然。だいたいその頃から彼女は学校に出席しているのかどうかさえ怪しかったので顔を合わせるのすら困難だったから。中の公衆電話は壊れていてダイヤルすら満足に回らないのに小麦さんからの電話があったときだけ思い出したようにベルが鳴った。

ちようどそこに学生服姿の少年が駆けてくる。三ヶ月前の僕だった。ほどなくしてベルが鳴る。

「公衆電話に電話ってかけられるんだ」

「うん」

そういつて彼女は鼻息荒く説明し始めた。

この町の電話線は綿密に構築された渦巻になっていて町の中心に行くにしたがつてだんだん背が高くなってるの。ベーゴマにひもをまいていくみたいな感じだね。そこを七色のかたつむりが高速で滑っている。

それが今物理の時間に習っている「基本マイマイ通信論Ⅱ」の概論というわけだ。で、そんな大きい構造体を構築するんだから多少のほころびが生じる。そしてそのほころびが私のところと君のところの電話ボックスというわけ。どう

わかった？

「ふうん」とだけ返事しておいた。

「じゃあ問題」「なに」

「電話線の渦巻きの軸、つまりてっぺんはどこでしょうか」

電話線の向こうで彼女の声が弾んだ。くるくると頭の中に町の地図を広げて渦巻きを描く。ああ。

「ガジュマルか」

「ご名答」

ガジュマルが生えたからそこを中心に電話線が展開したのか電話線が展開していたからガジュマルが生えたのか。どちらにしろそれはごく自然なことに思えた。

「ほら。右ねじの法則ってあったじゃない。ちようど私の殻のうす巻きも右巻き。電話線も右巻き。右巻きで力が上のほうにぴゅーんって飛びぬけるからガジュマルもあんなににきよにきよ生えた。超理論的。」

そういえば小麦さんは理系進学クラスだった。「ぴゅーん」で「にきよにきよな「理論」を完成させてしまう彼女は科学界期待の新星と成りうる……はずもないか。とりあえず僕は背伸びする。世界の終わりの日みたいなあくびが出た。

「いまさら気づいたんだけどさあ」

「なに」

「もしかしてあのガジュマルの木って」

「ガジュマルがどうしたの」

「植えた犯人は小麦さんのよーな気がする」

「よくわかったねえ」

彼女はカラカラと笑った。よくできました。

「そーだよ。私たちみたいなマイマイ種の亜人類が地上で生かしてもらえてい

るのはそのお仕事のせいだからね。そのお仕事っていうのは」

「マイマイ通信の構築だ」

「そう」

「それでその通信網の渦巻きを構築するときの軸にしようと思ってガジュマルを植えてみたんだけど。なかなか立派になったでしょ」

「たしかに」

ついでに彼女はガジュマルの木を植えることによってその木が徐々に町を覆っていく水を吸い上げてくれることを狙っていたらしい。なんでそんなことまでしてくれるんだ、と聞いたら

「私なりの愛ですよ」

とかなんとか戯言を平然と言つてのけたりしたので僕も「愛してます」とかなんとか阿呆なことを言つて「死にやがってください」と一刀両断されたりしていた。嗚呼なんと懐かしく甘酸っぱい思ひ出。

遠くから光が近づいてきた。

閃光。

■

閃光。

そしてハンターは間一髪で突進してくる獲物を避けた。彼が立っていたところをそのままそいつが駆け抜けていった。

「ふふふ」

彼は満足げに微笑んだ。「俺の勝ちだ」

モニターを眺めるとそこにはこちらを食らわんばかりに突進するにんじん色のディーゼルカーがしっかりと焼き付けられていた。

大の字になって地面に寝転がっていた。

今気づいたよ、寝転がったまま彼はつぶやいた。

「知ってるかい」

「何を」

「マグロっていうのは泳いでないと死ぬんだってさ」

「一箇所にとどまっていられない……どこかの誰かさんみたいだ」

僕も隣に寝転がってみた。

「俺が思うにねえそういうやつは臆病なんじゃないかな」

「臆病」

「腰を落ち着ける度胸がないんだろうなあ、マグロも小麦も」

気丈なふりをしてるだけだよ。ホッキョクグマにこんなことをいわれたことを知ったら彼女は怒るんだろう。とてつもなく怒るんだろう。「クマのくせに生意気な」なんて怒るんだろう。でも

「見る俺を。この堂の入り様を」

お前が異常なんだよ、と言おうとして口をつぐんだ。

小麦さんが軽々と宙を舞う地面の下でテツはどつしりとすわり、事を為した。

その違いはなんなのか。僕には答えが見つからない。

■

「どー立あんになん川小学校六年ハ組九番の小麦……です。私のしょうらいのゆめ、といつても取り立てて言うことはありません。だって私たちみたいなニンゲンモドキは生まれたときからしごとが決まっているのですから。えっへん。私のお父さんはりっぱなからをもったマイマイしゅの鏡でした。町から町をとび回ってマイマイっしんもうのこーちくに明けくれる日々。くみあいの中では一番のプロであることは一目りょーぜんでしたし日本全国からひっぱりだこでした。だから私はなんともなんとも転校したのです。やあ。や

あ。

その町の上空にじよじよにうず巻きが描かれているのを眺めながらいっぽうでこれが完成したらまた転校しなきゃいけないと心臓が締め付けられるのもすっぴかりなれてしまいました。ぼんぼん。

三十七番目の小学校ではなしです。私も転校から一カ月経ってだいたいクラスになじんでいました。その頃隣の席に座っていたのはオ……オト……オトヒメ？とかそんな感じの名前で呼ばれていた女の子でした。おやしきの中で育てられていたとかでも内気な子です。彼女は言うのです。

『こむぎちゃんはまちからまちへ飛びまわれるし、おとこにでもおんなにもなれる。とつてもじゆうじさい。うらやましいなあ』

自由自在、という言葉を教科書で読んだ彼女はほらしげに言いはなちました。それにしてもうらやましいなんて。彼女は私を大きくごかいしていたのです。彼女だけではありません。私はスキップで町から町を飛び回りながらただ面白おかしく生きていたわけではありません。腰を落ち着ける場所を探していたのです。どうしてもそれがわかってもらえないのです。

『私はあなたみたいにずっと同じところにすんでいられるのがうらやましいんだけど』

ずっとおなじところにすんでいられるのなら転校した先でなんども友達を作る必要ありません。いちいちマンションのまわりの道を覚える必要もありません。ひっこしのときにほんだなのほんをなんどもならべかえなくてもいいし。

そのころのたんにんの先生がいていた

『小麦さんは行動力があるけど落ち着きの無い子ですね』

というのもこういうせいかつかんきょにゆらいしているようなきがしてならないのです。

私に安住の地を。さもなくば死を。ぴこぴこ。」

放送室のロッカーの中にぶちこまれていた小学校卒業記念と書かれたタイムカプセルのダイヤルを適当に回していたら懐かしい声が刻まれたテープがまわりはじめた。

知ってはいけなことを知った気がして慌てて校舎から駆け出した。

ちやぶちやぶ。

水位がだんだん上がっている。

ちやぶちやぶ。

ちやぶちやぶ。

■

気がつくとかつて小麦さんと話した電話ボックスの前に立っていた。吸い寄せられるように狭い箱の中に身を滑り込ませる。黄緑色の電話に触れると鉄の冷たさが指先から走ってきた。こういうときは誰でもいいから電話したいのだ。

そんなことを考えていたら空のかなたからちようど十匹のカタツムリが飛んできた。XXXXXXXXXXXX.そいつらが電話機に吸い込まれるたびにダイヤル音が鳴り、しばらくしてよく知った声が流れ出した。

「〇〇か」

「小麦さんでしょ？久しぶり」

少し間が空いた。

「なんだ。小麦さんでいいのね。じゃあ小麦さんモードで」

「よろしく」

「水が上がっているでしょう」

「そうみたいだ」

既にひぎの高さにまで水は迫ってきていた。

「私の周りの人は水面が上がってるのなんか知らずにのんきな夕方だよ」

「そうかあ」

結局彼女のガジュマル作戦は実を結ばなかったということだ。実に残念。

「このまま沈んじゃうのも案外楽かもね」

物騒なことを小麦さんは平気で言うのだ。そんな気もさらさらなくせに。

「〇〇は逃げたい？それとも沈みたい？」

「小麦さんが逃げるんでしょう。だったら僕も逃げます」

ここで顔でも赤らめれば可愛げがあるだろうに彼女は素面で「沈めてやる」といった。愛嬌というものを知らないのだ。

「まあいいや」

彼女が意味ありげに電波の海の向こうで微笑むのがわかった。

出発進行。

その一言とともに大きく電話ボックスが揺れる。鈍く身震いしたあと灰色の煙を吐き出して電話ボックスは静かに道路を滑り出す。あわててバランスを整えてみたけど安定して走り出したのでようやく立ち上がることができた。よく見ると電話線によって引つ張られているみたいだった。はたしてこれからどうしたのか僕は考える。どうやら町の中央に向かってひっぱられている様子。

「走ってる」

「私のところも」

受話器の向こうから規則的に地面を叩く金属音が響いている。しばらく外の景色に見とれているとむこうの通りからも電話線に引きずられた電話ボックスが走ってきていた。交差点で火花を散らしてぶつかった二つの電話ボックスは列になってさらに先を目指す。

かたたんかたたんかたたん。

「なんでこんな面倒くさい芝居をやったかって」

かたたんかたたんかたたん。

「ちゃんと言ったじゃない」

かたたんかたたんかたたん。

「うろろろしない腰を据えた生活がしたかったんだよ。放浪癖がついちゃって
るからね」

かたたんかたたんかたたん。

「この町のマイマイ通信が完成しちゃったから私はそろそろ次の街に行かなきゃいけないんだ。だからタイムリミットまでちよつと落ち着いた生活がしたくてね」

かたたんかたたんかたたん。

そのまま踏切から線路に入る。前の電話ボックスの中のビジネスマンは会話に夢中で自分が置かれている状況がわかっていないようだった。

ちようど学校横の駅に差し掛かる。案の定今日もテツはいないようだなあなどとおもったら僕の乗った電話ボックスは学校のカーブを曲がりきれず宙に浮いた。とつさに電話にしがみついたものの飛び出した軌道のまま安定して空に上っていく。全身の力が抜けたまま校庭をひとつとび。

ふと前を見ると一直線の先にガジュマルの木が見えた。あれからもう何カ月もたっている。既にガジュマルの太い枝は旧校舎を食らいつくし体育館にまで食指を伸ばしている。その高さはすでに送電鉄塔を超えているかもしれない。

深い木の枝に電話線がらせん状に続いている。僕たちはあそこにひっぱりあげられていたようだ。月明かりに葉っぱが輝いている。あたりを見回せば町の四方八方から電話ボックスが連なって渦巻きを描きながらガジュマルに引き寄せられていく。向こうのボックスから手を振る人がいた。狭いボックスの中に白い毛がいつぱいいつぱいに詰まっている。テツ。ホッキョクグマ。放送室の住人。軽音部の住人。そう。

彼女はいつだってすぐそこにいるのだ。

背中に伸ばしたテツは控えめなジッパーを下に下ろした。背中が割れて中から

まず渦巻き、それから背中が現れる。彼女はショートヘアをかきあげて言った。

「やあ」

打ち抜くようなどすの利いた男の声。いやいや間違ったね、そういつてからぶつんとスパークする音が電話口から聞こえた。

「やあ」

「やあ」

今度は歌うような声。

小麦さん、ここにあり。

あとがき

完成した原稿の前に「三代目ピコ彦は唸った。

「いつもゴーストライターやつてくれるのはうれしいけどさ」

「なんですか」

「君の書くヒロインはなんかみんな似てるよね。これが君の好みなの」

愚問としか言いようが無い。俺が書くヒロインは女性としての好みではなく理想の自分像の投影であるということに今回気づいた。主人公に自分を投影しすぎると読んでいて実に気持ち悪いのだ。

このあたり、まだまだ改善の余地があると思う。

それにしてもそろそろピコ彦先生は自分で執筆するべきだと思う。

What should I do?

新道知樹

序章 くそれはもう一つの世界く

握っていたシャーペンを机に置き、ふと真後ろにある時計を見る。既に深夜の3時を過ぎていた。俺はあくびをしながらベッドに横たわる。

普通の人なら、一定の眠りに訪れる夢というものはあってもなくても気にしないであろう。時にファンタジーな夢、時に恐ろしいくらい現実を模した夢、時にそれが現実起こってしまう正夢、などどれも考えてみると興味深いものばかりだが、だからといってその夢を見ようと必死に思いながら寝る奴などそうはいない。

だが俺は違う。夢を見るのを楽しみにしているのだ。

現実逃避がご趣味ですか、と聞かれそうだが、そんな腑抜けた質問をする奴の頬にビンタするぐらいの理由はある。それは……

「悪い、待たせたな」

ここは夢の中、ではない。

「真人クン、今日は早く来てって何度も言ったじゃん！」

現実世界、でもない。

「すまんすまん、努力しないお前と違って勉強に励んでいたんだよ」

そう、ここは……

「はいはい妙に傷つく言動をどうもありがとう！」

ここは、俺たちだけのもう一つの世界――

――亜世界（あせかい）

……これが理由だ。

第一章 く非日常での日常く

亜世界に來た俺は数秒もしないうちに、ある知り合いに声をかけられた。が、そいつの言ったことがあまりにも予想外だったので、聞き返した。

「……で、なんて言ったんだ？」

俺が質問する。

「ん？ 缶けりしよう、って」

俺の同級生、加藤遊馬（かとうゆうま）が答える。

「ごめん、よく聞こえない」

「だから缶けりしようって」

「ごめんねえ、もう一回言ってくれないかなー」

「缶けりしようって言ってんじゃん！！」

「それが大学受験控えている奴が言うセリフかああああああああああああ

あ——」

俺は成村真人（なりむらまこと）十八歳、高校三年生。先ほどの通り、来年に大学受験という人生の登竜門を前にしている受験生だ。しかも受けるのはT大学という日本最難関校だから、あらゆる時間を割いてまでして勉強時間にまわしている。じゃないと合格が危うい。よってこの状況は亜世界といえどいささかまずいような気がする。そして加藤も俺と同じT大学を受けるはずなのだが……。

「お前さあ、ここは亜世界なんだから、今勉強すればかなりまわりと差をつけることができるんだぞ？　だから俺は基本的にいつもここで勉強しているんだよ。対して、お前ときたら毎日毎日子供と遊んでばかりだよな。いくら超天才といえど、このままだと成績落ちるんじゃないのか？　やはりお前の精神の成長はストップしたのか？」

「え、それって結構うれしいかも。若さの秘訣は子供特有の純粋な精神にあるってのがボクの自論だからね。うんうん。だからキミもこのボクのことを見習いな☆」

ホントうざいわこいつ。一体何なんだよ。きつと神様のミスで生まれてしまったに違いない。

「もおマジうぜえわお前……つとすまん、つい本音が」

「……」

「だまるなよお、バ加藤くん☆」

「てめえ全国の加藤さんに謝れ——」

「はい。申し訳ありませんでした（ヘコリ）。」

「……何故わざわざ後ろを向くんのだ？」

「だってお前が加藤さんの時点で全国の加藤さんに失礼なんだから俺がお前に謝る必要なんてないしそもそもおまえが全国の加藤さんに謝るべきなんだよというわけで跪け」

「はあ、面倒なやつだ」

ふう、すつきりした。ん？　お前もなかなかのウザさだって声が聞こえるが、気のせいだろう。

ちよつと遊馬が哀れなのでしょうがないから補足説明。ぶっちゃけ言うとコイツは全国共通模試とかいう試験で一位、つまり勉強において日本一の成績を誇っている超エリート君なのだ。だが、彼の容姿からはそんなことなど到底想像できないだろう。茶色に染め上がった長髪、人をムカつかせるような目つき、無駄に筋肉質な体、そしてファッションセンスゼロの服装。人は見た目によらないとはよく言うが、それはコイツのための言葉だろう。

「悪いが今日は勉強させてくれ。生憎俺はお前ほど頭が出来てないんでね」

「だろうな」

なんなんだコイツはっ！

「つれないねえ真人くんは。しょうがない、じゃボクだけで子供たちと缶けりするから。混ざりたかったらいつでも混ざれよ」

「はいよ」

それじゃあ、と遊馬は言うとすぐさま子供たちのところへ走っていた。いいなあ、天才は。そういうえば、俺がここに来たときもあんなだったよな。

そう、俺が始めてここに来たのは三年ほど前だった。折角なのでここまでの経緯を話そうと思う。まあ、当時も今も全く変わっていないということは最初に言っておく。

——随分とできた夢だな。

これが亜世界に來た俺の第一声だった。

この亜世界は場所だけ見ると公園だ。ところどころに植えてある木、砂場や鉄棒、滑り台、そして名称不明の独特な遊具。学校の校庭ほどの広さもあるの

で、公園として申し分ない場所だ。まあ、これだけならただの夢に過ぎないのだが。

俺はただぼーっと突っ立っていたが、すぐに普通の夢ではありえない違和感に気づいた。

（あれ、やけに意識がはっきりしているな。体も自分の意思で思い通りに動かせし。それに思考も現実にいるときと変わらないくらいできている。……どういうことだ？）

普通の夢の中なら、何かを考える以前にそんな気すら起きない。考えるという行為に近いことはしなくてもいいが、自分の意思でちゃんと思考しているとはいいたい状態だ。そもそも今の俺が感じている、本当に現実の中で生きているようなこの感覚は、果たして夢の中で感じられるものなのだろうか。

おかしい。

ひとまず周りを見てみる。大人の人たちが一緒に雑談している。おじいさんやおばあさんたちが仲良くゲートボールをしている。小学生ぐらいの子供たちが鬼ごっこをして遊んでいる。そしてそこに高校生らしき人物が混ざっている。よく見ると、その人物は茶色に染め上がった長髪で、人を嘲るような目つき、無駄に筋肉質な体、そしてファッションセンスゼロの服装……ってまさか！？

「ゆ、遊馬、遊馬なのか！？」

俺が大声で叫ぶと、その少年は一瞬、見たこともないくらい驚いた表情になった後、笑顔でこう返事してきた。

「真人くんじゃないかー。キミも一緒に遊ぼうよ！」

「ち、ちょっと待て。何でお前がいるんだ？　そもそも、ここは一体なんなんだ？　現実なのか？　それとも夢なのか？　それとも……」

「まあまあ落ち着いて。……おいみんなー、ちょっとボクは休憩してくるから、みんなだけで続けててねー！　……ふう。じゃ真人くん、こっちに来て。」
そう言われて、俺は遊馬の後について行った。近くにベンチがあり、そこに

遊馬が座ったので俺も腰を下ろした。

「さて、じゃあまず最初にこの世界について話そうか。」

あらかじめ言うておくけど、超天才のボクでも分からないことはあるから、それだけは頭に入れておいてね、と言って、遊馬はゆっくりと話し始めた。

「ここは一言で言うと、現実とは異なるもう一つの世界。まあ、ボクたちは『亜世界』って呼んでいるんだけどね。」

「亜世界……？」

「そ。亜世界は常に存在しているんだけど、現実世界にはあるかどうか分からない。確かめられないんだ。言葉で言い表せない場所にある、とでも言うか。そしてボクたちは眠っている時にこの亜世界に出現することができるんだ。」
「……随分とファンタジーなことばかり言うんだな」

「まあボクたちの経験論だから間違っている可能性もあるね。ただ、そんなことではないっていう自信もあるけどね」

「眠っているときって、だったら世界中の人間、いや、動物だって亜世界にいるはずだろ？　なのにここにいるのはせいぜい百人ぐらいの人間だけだ。……ってことは、出現するためには他に条件があるのか」

「いいところに気がついたね、ってこの程度なら誰でも気づくか。条件はあるよ。情報源は前にここにいた住人。それはズバリ、『一定の脳波』さ。これが亜世界とボクたちをリンクさせているんだ。だからこうやって話すことができるように、現実と同じように行動できる。ここで驚くべき事実が出てきたよね。亜世界にいる人たちは睡眠時の脳波がみんな同じなんだ。」

「そ、そんなのって、いくらなんでも偶然にしては出来すぎている。ありえないだろう？」

「実はそうでもないんだよ。確かに、亜世界への鍵となる脳波が、それも百人もの人々の脳波と同じだなんて天文学的確率にも程がある。でも、脳波がそれ

に近いってぐらいならあり得ないことはない。そこで一つの仮説ができる。亜世界とリンクしている誰かの脳波が、ボクたちの脳波、つまりその誰かと似ている脳波に影響し、それらが全部同じ一定の脳波になってしまった。……無理やりな理屈だけだね」

「……、」

本当に無理やりな理屈だ。だけど超天才の遊馬が言うのなら、きつと説明されていない根拠や確証があるのだろう。ならその理屈は正しいと考えてよい。俺はそう結論付けた。

けどまだ聞きたいことがある。

「その亜世界とリンクする脳波を持つ誰かって、ここにいるんだろう？ そいつ、又はさっきお前が言った、前にいた住人なら何か他にも亜世界について詳しく知っているんじゃないのか？」

だが遊馬の答えは聞き苦しいものだった。

「前者と後者は同一人物だよ。だけど今はいない。ボクを含めた数人が亜世界に来たとき、そいつ、コードネームは狂瀾怒涛（デイスターバー）だって自分

で名乗ったけど、中二病かつーの。その狂瀾怒涛（デイスターバー）って奴から、そいつが亜世

界の元の住人だったこと、ボクたちの内おそらくボクの脳波が狂瀾怒涛（デイスターバー）の脳波

と反発して、狂瀾怒涛（デイスターバー）が追い出されることになったこととかを聞き出した。本当

かとは分からないけど」

「……さっきよりも話の内容が胡散臭いんだけど。流石にそれは嘘だろう。

狂瀾怒涛（デイスターバー）？ そいつは中二病確定。脳波が反発？ 磁石なんですか？ いやい

よ話に整合性がとれなくなってきたな」

遊馬もついにフアンタジー野郎になってしまったか。そんなことを思っていたが、

「あのね真人クン、キミはボクが言ったことをよく考えもせず、整合性がとれなくなってきた、とか言ったけど、もしかしてこの世の全てを分かっているつもりなの？ ……理屈つてさ、ほぼ全ての事柄に通じる真理みたいなものだけど、ボクたちには当然『分からないこと』がまだたくさんあるよね。無知の知が足らないかな真人クンには。幽霊に然り、宇宙人に然り、神サマに然り。信じ難いことだけど、完全否定することはできない未確認な存在。それらには既存の理屈なんて通用しない。要するに……」

遊馬は一呼吸おいて、

「世の中、何が起きても不思議じゃないんだよ。この論理はT大受験生の真人クンなら分かるよね」

「考えれば誰だって分かる」

「まあね。さっきの話だけど、真偽がどうあれ真人クンには関係ないから忘れて結構。……とまあ、ここまで話せばもう十分か……いや、悪い。一つ言うのを忘れていた。亜世界から帰る方法だけど、二つある。一つは現実の自分が起きることだけど、これは分かるよね。そして肝心のもう一つは、亜世界、つまりこの公園みたいなどころの敷地の外に出ること。周りを見てみて。正方形みたく白線で囲まれているでしょ。あれが境界線だよ」

確かに、よく学校の校庭で見かける石灰のような真っ白な線が亜世界を四角く切り取っている。

「あそこを一步でも踏み越えたら現実世界に戻る、つまり夢から覚めるんだ。面白いでしょ。だからここにいたい奴は現実世界の自分が起きるまでここを出ようとしなんだ。……あく疲れた。もうめんどいから説明終わりー。というわけでこの亜世界を思いっきり楽しんでくださーい！」

「うわ適當……まあ、分からないことはあるけど、最初の疑問は解決したことだし、自由にやらせてもらおうか」

というわけで散策でもしようかと思ったが、

「おっとその前に。ここにいる人たちが全員に挨拶回りしてきてね。おそらく死ぬまで一緒に過ごすんだから。大丈夫。みーんないい人ばかりだから」

「全員となると百人はいるな。ちょっと骨が折れるかも」

そう言つて、俺は片っ端から人を見つけては一人一人に挨拶をした。一日に百回程度もはじめましてと言うのは、この人生で二度とないだろう。現実の俺が起きる前に終わるか怪しかったが、なんとか全員に挨拶し終えた。

——ここに初めて来た日は、そんな一日だったな。

今となつては懐かしいものだ。遊馬の話を聞いてからも、始めの頃は何とも言えない不安や不信感でいっぱいだった。それでも、ここにいる人たちと接しているうちに、そんなものは全部吹き飛んでしまった。不思議なものだ。

そんな風に過去を振り返っていたが、ふと我に返り、今やるべきことを思い出す。

「……さて、勉強するか」

そう呟いて、ゆっくりと地面にしゃがみこんだ。

俺は暗記してきた数学の問題をそこらへんの細い枝を使って地面に書く。これを解いたら一回一回亜世界から出るなんてことはしない。睡眠というのは、こまめにするよりも一度に長時間とるほうが良いらしいので、いちいちこまめに現実を行き来して貴重な睡眠を細かく分けたりしたくないからだ。だから自分の解答を覚えておいて、夢から覚めたら答えを確認する、これが俺の勉強法だ。我ながら少しばかり罪悪感がある。

問題を解いていると、数人の大人たちがやってきた。

「相変わらずやってるね」

「あつ、こんばんは、佐々木さん。今日はプリント作りしないのですか？」

この人は佐々木さんといって中学校の先生をされている。とてもいい先生で、生徒にオリジナルのプリントを毎日作っては宿題にさせているほどだ。

「いや、昨日のうちに作りおきしていたから今日はやらないよ」

「二人とも頭いいよね。私なんて成績は常にオール1だったのに」

さらりととんでもないことをおっしゃるのは米田さん。居酒屋の店員さんをしてる。

「でも米田さんとはびきりの美人だから恋愛では苦労しなすよね」

これは大工をされている久保さん。おい、と心の中でツツコミをいれたが、

「こら！ 抜け駆けは許さんぞ久保！」

「そーだそーだ！」

「うっさい！ お前らはラ〇プラスでもやってろ！」

「てめつ、なにほざいてんだー！！」

「うわつ、や、やめろ、分かった、分かったって！」

「……いいかい成村くん。決してあんな大人になつてはいけないよ」

思わずみんな笑ってしまった。

平和だ。俺は素直にそう思う。現実とは大違いだ。だから俺はこの亜世界を現実以上に気に入っている。ここにいるみんなもきつとそうであるに違いない。

大人たちが騒いだ挙句どこかへ行ったあと、再び勉強に没頭していた俺だったが、精神的に疲れてきたので、散歩に出かけることにした。

亜世界でも疲れはある。しかもこれは現実にもフィードバックしてしまうから厄介だ。だからこうして小休止しないと、目が覚めるとき身体の疲れは取れていなくて、しかも精神的な疲れも溜まったままというなかなか辛い状態に

なってしまうのだ。

歩いていると、ゲートボールをしているお年寄りの方々がいた。

「皆さんこんばんは。」

「あら真人くん、こんばんは。」

「おやおや散歩ですかい」

「相変わらず勉強頑張ってるみてえだねえ」

「私らと違って頭がええからなあ」

「T大学受けるんだっけか？」

「へー、こりやあ大したもんじや大したもんじや」

「そうそう真人くん、彼女できたかい彼女。はやくしねえと先とられつちまうぞ」

俺は聖徳太子じゃあねえ！、と声を大にして突っ込みたかったが、ここは抑えるのが礼儀(?)だ。

「……すいません話についていきません」

「おおい、真人くんが会話についていけねえだよ。こりやすいませんねえ。」

詫びのしるしに今度一杯飲みに行かねえか？」

「いえ、夜遊びが得意な茂さんと一緒に行くと、キャバクラとかに連れて行かれそうなので止めておきます」

「二あつはつはつはつは！」

うん、平和だ。

その後、もとの場所に戻ってきて勉強を再開した。そういえば遊馬はまだ遊んでいるのかと周りを見ると、鬼をやっていた。そこにいるのはわかってるんだぞ〜と言いながら缶から大きく離れる。直後、隠れていた子供たちが一斉に缶に向かってダッシュ、最初についたひとみちゃんが男子顔負けの勢い

で思いっ切り缶を蹴り飛ばした。やったーやったーと喜ばしい声が聞こえてくる。遊馬は、くそ〜ひとみちゃん何回目だよ〜りようたくんとかにも蹴らせろよ〜と苦笑いで呟いていた。

平和だ。

そう思ったとき、俺は夢から覚めていた。
ちくしょう……まだ居たかったのに。

第一と二分の一章 —— 執行猶予残り二日 ——

—— チツ、私の空間で好き勝手しやがって。

東京都内某大学。

「S極は見つかったかい？」

「うっせえんだよ話しかけんな」

暗闇の一室には年老いた教授と、一人の中学生らしき少女がいた。

「亜世界の子供たちの中にいると聞いたが」

「どこのデマだよそりやあ。ガセネタも見分けられなくなったのかクソジジイ」
少女の暴言には聞き慣れていたのか、教授はただ黙り込み、それからこう呟いた。

「S極は後にして、とつととN極を亜世界もろとも消したらどうかね。——

ディスターバー
「狂瀾怒涛」

デイスターバー
狂瀾怒涛と呼ばれた少女は迷わず告げた。

「ああ。——明・後・日・の・夜・に・でも」

全てを狂わせ、乱させ、消滅させる者——

——コ・ド・ネ・ーム、デイスターバー狂瀾怒涛

「なんで明日じゃないのかね？」

事実、少女は現実でそう呼ばれている。

「加藤遊馬に悪あがきの猶予を与えてやるんだよ。執行猶予ってヤツかあ？」

本名は誰も知らない。

「なるほど。その方が君にとって面白いようだね」

だからこそ、コードネーム。

「ハッ、当然だろ？ 可能性を握り締めた途端、それごと全部消えて無くなっちまう様ってのは愉快の極みだぞ。天国から地獄ってやつかあ？ いいねいいねえ。ああ、いつも通り全部滅茶苦茶にしてやるよ。滅茶苦茶のメツチャクチャに……ふふ、あはは、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ——」

狂気の笑い声と共に、どこかの世界が歪み始めた……教授はそんな気がした。

第二章 く影に潜む違和感く

朝七時、現実での俺の日常が始まる。

朝食を食べていると、親父がテレビをつける。別にニュース番組なんて見てもしょうがないのに。ほら、相変わらず殺人事件だの大規模な事故だの物騒な出来事ばかりだ。なーにが「幸い」死亡者はゼロです、だ。ほとんどの人が思っているだろうが、事件事故が起きた時点で「幸い」もクソもねーんだよ。

そう思っていると、今度は総理大臣辞任という既に日本ではお馴染みのニュースが流れてきた。日本の政治は腐っているんだからこんなの見てもストレスが溜まるだけだよな、俺が総理大臣になれば絶対日本は全ての面において世界一の国になるのに、と少々真剣に考えてみる。

八時、俺が通うU高校へ自転車で無事登校完了。U高校は県内トップ校で、なおかつ男子校という俺にとって最高の環境にある高校だ。何故男子校がいいのか、それは、俺が極端に中高生の女子を嫌っているからだ。幼稚園、小学校では性別など特に気にしなくみんな仲良く遊んだものだが、中学ではひどい有様だった。なんだろう、男子・女子間の対立が起き、クラスのまとまりなど微塵もなかった。中には恋愛なんて俺が大嫌いなことをしてた奴らもいたが、結局どのグループも別れたらしく、赤の他人以下の関係になったそうだ（俺はその話を聞いたたびに心の底から大笑していた。他の中学ならこんなことにはならないだろう。そしてもし俺が普通の中学に入学していたら、ここまでひどく女子を嫌うことなどなかったかもしれない。

上履きに履き替え、教室へ向かう。しかしその途中で不幸にも目の前に遊馬が現れやがった。

「おっはよー、真人くん」

「おう、おはよう。じゃ俺はこれで」

「ストップ、ストップ！ 相変わらず冷たいねえ真人くんは」

「はぁ……。ところで、何でお前昇降口に向かっているんだ？ 忘れ物か？」
すると、遊馬の返答は意外なものだった。

「ん？ 帰るんだよ」

「火星にか？」

「家だよケが」

「でしょ」

「ん、どういうこと？」

「お前の家は火星にあるんじゃないかったのか？」

「いつからボクの家は地球上から引越したの！？」

「まいいや。で、何で家に帰るんだ？」

「ヒ・ミ・ツ☆」

「おい」

「いいじゃん別に。……明日の亜世界に来れば分かるよ」

「！？」

「あつ、そうだ飯も食わないと。い・つ・も・の・量・じ・や・あ・全・然・足・ら・な・い・し。それじゃあ！」

「あつ、ちよつと！」

呼び止めようとしたが、遊馬は昇降口にダッシュ、すぐさま外へ出て行ってしまった。

（亜世界に来れば分かるって……アイツ何する気だ？）

ふとそんな疑問が湧いてきたが、チャイムの響きと共に消え去ってしまった。

少年は思う。

（――悪いけど真人クン、ボクには確かめなくちゃならないことがあるんだよ――）

少年は考える。

（――もしかしたら、亜世界がなくなってしまう……いや、そんな生ぬるい表現じゃないな。むしろこれ以上ないくらいひどい有様になって消滅する、と言ったほうがいいかな。それでもまだ本質を突いてはいないけど――）

少年は決意する。

（――あの狂瀾怒涛が亜世界に侵入する前に、さっさとク・ス・リを完成させる。

そして真人クンやみんなを救う。あと良・太・クン、キミも。これがボクのやるべきこと――）

少年は呟く。

「……間に合わせる。だから、無事でいてくれ、みんな！！」

少年は――

学校が終わり家に着いた俺は、すぐさま勉強を始めた。時間はあつという間に過ぎ、もう外は暗くなってしまった。晩ご飯を食べ、お風呂に入り、歯を磨き、勉強を再開する。だが、いつもより集中できない。理由は明白。体に何か違和感を感じているからだ。

「あゝ重い重い。そして時々痛い、喉も痛い、鼻水も出る、熱っぽい、なんだ

ろう、風邪か？」

でも一応は健康的な食事もしているし、夜中までの勉強にもとづくに慣れている。確かにこの受験生特有の生活に慣れる前は体調不良に陥ることが何回かあったが、今更それが原因かと問われても、違うと答えるほかない。

こういう時は寝るのに限る。まだ夜の十一時にもなっていないが、勉強よりも身体を休める方が先決だ。ゆっくり寝たあとに勉強すればいい。それに、時々精神面も休めなければならぬ。だからこの機会に亜世界で子供たちと久しぶりに遊ぶのもいいかもしれない。

俺はベッドに横になり、いつものようにゆっくりと瞳を閉じた。

そして目を開く。

そこにはたくさんの子供たちがいた。ざっと三十人だろうか。

「ねえねえまこちゃん、鬼ごっこしよう！」

「よし。じゃあジャンケンだ！」

するとすぐさま二人一組になってジャンケンを始める。常に遊んでいるせいか、手際がものすごくよい。

「じゃあちはるちゃん、俺とジャンケンしよう」

「いいよー」

「最初はグー、ジャンケン、」

「ポンー」

言うのを忘れたが、俺はジャンケンがものすごく弱い。中学の時、先輩に「俺がジャンケンで『五連敗』したらジュース奢ってください」と宣言して見事五連敗。先輩は呆れたのかどうかよく分からないが、「うわあマジうぜえ」と言っ

て結局奢ってくれなかった。ケチ。

そんなジャンケン最弱でギネスに載りかねない俺は当然のごとく、負けに負けて結局鬼になった。

「やつぱり弱いね、まこちゃんは」

「うん、弱い。てか弱すぎ」

「雑魚じゃん、雑魚」

「ざーござーこー！ あはは！」

（うう、本当のことだから反論できない……）

正直、俺の心は結構堪えていた。

はあ、と溜息をついて下を向いていると、わいわいがやがやしている子供たちの中から、何やら気になる話が聞こえてきた。

「私ね、今日なんだか頭が痛かったんだよ。それと喉も。あと鼻水も出るし熱も少しあるみたいだし。風邪、なのかなあ？」

「あ、それ僕も。なんか気づいたら風邪っぽくてね」

「え！？ 実はオレもなんだけど！」

「わたしも！」

「僕も！」

「オレも！」

聞いているうちに、子供たち全員が今日、風邪のような症状を起こしていたことが分かった。

（あれ、みんなも？）

気になったので、ふと近くのベンチに駆け寄り、そこに一人で座っていた大人、近藤さんに声をかけた。

「こんばんは、近藤さん」

「おつ、こんばんは、真人」

近藤さん。よく分からない人だが、良くも悪くも彼の特長は、「常に笑顔」だ。今も笑っている。

「質問ですが、今日の近藤さんは風邪気味ですか？」

「おお、よく分かったな。ちなみに言うと、今ここにいるみんなも、今日は風邪気味だったらしい。ん、なんで分かるのかって？ それは、俺が『超』がつく程の名医だからだ！ 一目見れば分かるんだよ！ はっはっは！」

ほら、はっはっは！ だって。

（……いくら名医といっても、そこまで出来るものなのか？ というか近藤さんが名医ってのは初耳だ）

「あつ、今俺を疑ったでしょ？」

（バレた！？）

「す、すいません」

「まあ実を言うと嘘なんだけどね」

（……ですよね。で、その嘘に一体何の意味が？）

「あ、でも今日のみんなが風邪気味ってのは嘘じゃないよ」

「えっ、本当ですか？」

「聞きたいみたいだね。しょうがない、教えてやろう。最初は俺らの会話の中で、みんな今日は風邪気味だった、っていうのが明らかにあったんだ。で、俺だけがそのことに興味を持ったんだ。他のやつらは割りとうでもいいらしい。それで俺は他の大人たちに、じいさんばあさんに、そしてあのガキたちに聞き込みしたんだ。いや〜かなり疲れたわ。するとあら不思議、みんな風邪気味だ、っていう返事なんだよね」

（今の近藤さんが嘘をついている様には見えないし、それにいつも大人たちと一緒にいるはずの近藤さんが、たった一人でベンチなんかで休んでいるのも、疲れた、という点で一貫性がある。……どうやら、本当らしいな）

「おつ、やっと心から分かってくれたみたいだな！」

（だから何で分かるんだ！？ はっ、まさか読心術！？）

すると、何故か近藤さんのさっきまでの笑顔が少し絶えてきた。

「……真人、何故この俺が読心術を使えると分かったんだ？」

「使えるんかい？ 読心術を使えるんかい？ 読心術！！」

衝撃の事実発覚。しかし近藤さんはこう告げる。

「まあいいや。用が済んだのなら早く子供たちのところへ戻ったらどうかね」
そう言われて、そういえば俺は鬼ごっこに混ざっていることをようやく思い出した。

「やべっ！ あ、近藤さん、ありがとうございました！ それでは！」

うむ、と近藤さんの笑顔を伴った返事を聞いてから、俺は急いで子供たちのところへ戻った。

（だが、今日に限ってこの人たちが全員風邪気味なんて、有り得るのだろうか？ 偶然？ でもそれしか考えられないし……）

そのことが、ずっと頭に引っかかっていた。

駆け足により数秒で子供たちの所へ到着。

「ごめんごめん、つい話しが長引いちゃって」

「おうそ〜い〜よ〜」

「何話してたんだよ」

「ねえねえ知っている？ こういう時って、『ユースレーイト』っていうんだよ！」

「へえ〜」

「さすが帰国子女！」

「えへへ。じゃあみんなと一緒に、せーのっ！」

「『ユースレーイト！！』」

小学生以下の、しかも日本人の子供たちおよそ三十人程にそんな英語を言われるとは……貴重な体験をありがとう！

そしてオーマイゴット！

そんな少しばかり精神的ダメージを受けた俺だったが、高校生としてやるべきことは分かっている。鬼として子供たちを楽しませる。しかし自分も純粹に楽しむ。これがミソ。みんなで楽しむのが『遊び』だからだ。そしてタッチしたらみんなと合ったスピードで適度に走る。要はその繰り返し。やはりこれくらいの手加減、というかマナーはわきまえるべきだ。そう考えていたが、

何やら一人の男の子がゲラゲラ笑いながら堂々と俺に向けて右手親指を下にしている。

(せいた君……君はどこでそんなの覚えたのかな？)

そう思っていると、せいた君の隣に三、四人集まってきた。

「違うよせいたくん。左手の親指だよ」

「えーうそ」

「それじゃあ結婚してくださいじゃないの？」

「違うもん。だつてゆうまお兄ちゃん言つてたよ。『俺の右手は幻想をぶち殺すためのものだ』って」

「『それ関係ないじゃん！』」

(遊馬……全ての元凶はお前じゃないのか？ とても小学校低学年の会話じゃないぞ。なんだよ『幻想をぶち殺す』って……こいつらネタ元分かるわけねーだろ)

「右手だもんぜったい右手だもん！」

「いーや違うね、左手だよ左手！」

(うわぁ……嫌な予感がする……)

このままだと「けんか」というすごい……く面倒くさいイベントが発生してしまいそうなので、ひとまず彼らの最優先事項をあのくだらない論争から変更させるべく、俺は全力で彼らに向かってダッシュした。

「そんなことしている余裕なんてあ、る、の、か、な！」

「わー鬼が来たぞー！」

「は、速すぎる！ 本気出すなんてずるいぞー！」

(ようし、みんな散らばったな。ひとまず全力はやめて、軽く全員を追いかけるか)

まずは目の前の女の子グループ。

「はいはい逃げないとタッチしちゃうぞー！」

やんわりとした口調で声を発したが、帰ってきた返事は、

「触らないで、変態！」

(な、なんだと……！？)

それは俺の度肝を弾丸のごとく抜、いや、貫いた一言だった。

(なるほど。そうやって俺の戦意を削ぐ作戦か……。完敗だ)

女の子の作戦(本心だったらどうしよう)は精神にやたら響くので、一旦男の子に狙いを変更。

「ほらほら、のん気に突っ立っていると捕まるぞー！」

で、この子は俺に一体なんとほざきやがったでしょう。正解はこちら。

「こ、来ないで、変態！」

「てめえは男だろうがあああああああああああああああああああああああ
あああ!!」

俺は惜しみなく全力疾走し、これまたニヤニヤしているその子、たかし君に
タツチした。

(この野郎……そのセリフは女子だけが許されるものだって教えてやる)
と思つてたかし君の顔を覗き込むと、

思いつきり泣いていた。顔なんかもうまっかつた。

「うわーーーーー!」

(え~~~~~!?)

何故さつきけんかは面倒くさいって言つてのかつて?

それは、子供が泣くからなんだよ。だって泣き止ませるのって難しいだろ? あ
る意味試練だよな。共感出来るよな。そう、最初の俺はそうだった。まあ、以
前よりも慣れたが、まだお手のものとは言えない。

「あ、ごめんね。俺つい本気で走っちゃったから、今のは無しでいいよ。……
本当にごめんね」

(よく考えたら、たかし君に悪いことをしてしまったな)

「本当に大人気なかった。……だから、ごめん」

たかし君はいまだ泣きながら、それでもこう言ってくれた。

「……本当? 無しでいいんだよね?」

「うん。今のは俺が悪いからな。あ、でも変態、なんて次からは言っちゃ駄目
だぞ」

「うん……分かった」

「よし。じゃあ指きりげんまんしようか」

「「ゆーびきりげんまんーうそついたらはりせんぼんのーばす、ゆびきった!」

「オッケー。はい逃げて逃げて」

うん、と元氣よく返事したたかし君は、今度は笑みを浮かべながら楽しそう
に走つていった。

(ふう。次からは氣をつければ)

一度自分を戒めてから、標的を捕捉すべく周りを見回してみた。誰を狙おう
か……そう考えていたが、何かおかしなことに氣がついた。

一・人・足・り・な・い。

(確か、亜世界にいる子供たちの数は全員で三十二人のはず。

なのに今は三十一人だ。……まだ寝ていないのか? いや、少なくとも既に深
夜0時はとくに過ぎたはずだ。いくらなんでも子供は寝ている時間だ。……
どういふことだ?)

今ここにいないのは佐伯良太(さえきりようた)君、多分小学四年生の男の
子だ。両親共にお医者さんで、父に至つてはなんと病院長とか。そのためか、
しつけにもかなり厳しい様だった。常日頃勉強させられていて大変だと以前良
太君は言っていた。そのお陰で神童と呼ばれるくらい頭が良くなったが、一般
小学生と比べて極端に遊びの時間が足らず、初めて会ったときは暗く物静かな
子供という印象が強かった。しかし、ここで同世代の子供たちとたくさん遊ん
でいたので、今ではすっかり明るく元氣な子供となっていた。また、遊馬の家
の近所に住んでいるらしく、遊馬とは仲が良かった。

(寝ていないとなると……事故か何かで氣絶している可能性は? でも睡眠時
の脳波と氣絶時の脳波は違うものなのか? あくくそ、医学知識なんて文系の
俺にはねーんだよ)

いろいろ考えてみたが、結局どれも曖昧なものだった。こういうときは素直
にあきらめるのがベストだと思い、原因推測を中断した。

（おっと、今は鬼ごっこの最中だったな）

そして、良太君が来ていないという奇妙な出来事は、謎のままにされた。確かに不可思議ではあるが、明日になれば分かるだろう。そう思った後、俺は鬼ごっこの途中で亜世界から現実へ引き戻された。

あゝ楽しかった。けど、俺がタッチした瞬間、まさか「タッチ返し」されるとは思っていなかった……。

第二と二分の一章 —— 執行猶予残り一日 ——

「彼が何をしているのか気にならないのかね？」

東京都内某大学の研究室の中は、既に夜なのか漆黒の闇に染まりきっていた。

その部屋で、教授がその女、ディスターバー 狂瀾怒涛に問いかけた。

「はあ？ 阿呆か。んなもん気にしてどうする？」

呆れた表情をしながら軽く吐き捨てたディスターバー 狂瀾怒涛に、教授がこう断言する。

「そう言うと思っていたよ。だが、彼の頭脳は君に匹敵するぞ、ディスターバー 狂瀾怒涛」

へえ、とディスターバー 狂瀾怒涛は嘲りを含めた声を上げ、続けてこう言った。

「ヤツが私みたく、自分の睡眠時の脳波を自由自在に操れる程の頭脳を持っている、とても言うのかあ？ 仮に出来たとしても、頭がパンクして植物状態になるのがオチだろ」

「そういう君は精神以外なら至って健康な人間じゃないか」

「ハッ、全くだな。私は欲しいものが手に入ればそれでいいんだよ。それ以外のことなんざ知ったことじゃねえ」

「……。まあ、明日になれば彼の講じた策も分かる。君が無事に亜世界から帰ってきたらの話、だがね」

教授の言葉に顔を少しも変化させず、淡々とディスターバー 狂瀾怒涛は言い返す。

「おいおい私を舐めているのかあ？ お前は私が亜世界を掌握できることぐらい知っているよな。そしてその方法も」

教授はそう言われて、当然だと言わんばかりにゆっくりと語りだした。

「正確には説明できないが……人間の睡眠時の脳波、それも『ある一定のもの』によって人間は亜世界に存在することが出来る。君がその内の一人だ。他にいくつもの人間が確認は取れておらん。また、原因は不明だが、君は考えること、つまり思考することによって、脳から電気のようなエネルギーを発生させることが出来る。我々は『ブレイン・エネルギー』と名づけたが。しかも君の場合、常人ではまず有り得ないくらい思考を活性化出来るから、それによってブレインエネルギーを任意に変化させることも可能のようだ。要するに、そのブレインエネルギーを用いて無理やり自分の脳波を改変し、亜世界へ干渉、あわよくば操ることも可能、というような理屈を我々は考えている。当然、推測の域を出ないがね」

長々とした説明を終えた教授は溜息をついて、すぐそばの椅子に腰を掛けた。

そんな教授に向かってディスターバー 狂瀾怒涛は頭をボリボリと掻きながら、さっきの話に飽きていたのか面倒くさそうに、しかしやはり自然と嘲りを含めながら口を動かす。

「わざわざ説明ご苦労さんでしたあ。でも私のスペックなら、亜世界だけでな

くそこにいる人間共の行動も掌握出来るんだがな。教授ごときが見くびってんじゃないねえぞ」

デイスターバー
そんな狂瀾怒涛に、今度は教授が虚勢ながらも反論する。

「君は少々自分を過信しすぎではないのかね？」

デイスターバー
だが狂瀾怒涛はその一言に少々苛ついたのか、チツと舌打ちをして怒り気味に呟いた。

「誰にモノ言ってるんだよクソジジ。私が今この場でテメエをぶつ殺すことだって出来るんだぜえ？」

その瞬間、教授の頭が激しい頭痛に襲われた。

「ぐっ、があああああああああああああ！！」

ゆらゆらと足をふらつかせ、頭を抱えながら叫んでいた教授だったが、急にボタンと床に倒れてしまった。それでも、痛みは消えない。頭の内側からガンガンと、本当に頭が割れてしまうのではないかと思う程の激痛が脳内に伝わり

続けている。呼吸の音が狂瀾怒涛に聞こえてくる程息遣いが荒い。激痛にもが

きながらも、教授の叫び声は益々強く、そして狂っていく。

「ああああぐうううあああああ、はあ、はあ、がアアあああああああああああああああ！！」

「んだようるせえなあ、冗談だよ冗談。これでもかなり弱くしている方なんだぞ。それなのにギヤアギヤア騒ぎすぎなんだよ。あーあもういいや。そのハウリングもどきの声ストロップ」

デイスターバー
狂瀾怒涛がそう告げると、さっきまで教授を襲っていた激痛がスツと消えた。

そして、幾分か時間が経つと、さっきまでの荒かった息遣いも収まった。

「……これがブレインエネルギーを用いた他人の脳への干渉、か……」

睨み付けるような教授の視線を見て、
デイスターバー
狂瀾怒涛はニヤリと顔を歪ませる。

「まあ、今みてえな完全掌握は半径約百メートル以内に限るんだがな。私の経験上、ダメージを与えるだけなら一キロ以内で昏睡状態、それ以上となると軽い頭痛程度にしかならねえようだ。おまけに人数も数百人が限界。これじゃあ足らねえ」

分かるだろお、とその狂気的笑顔でさらに顔を歪ませながら、こう言った。

「だーからS極が欲しいんだよ。ああ欲しいね。喉から手が出る程つてのはこのことかあ？」

それを聞いていた教授は決め付けたように呟く。

「……電磁誘導のようなことでもするのだろう」

デイスターバー
狂瀾怒涛は少し意外そうな顔をして、

「おつ、正解じゃん。さっきので頭が軽くなったのかあ？」

「……これぐらい中学生でも分かる」

馬鹿にしすぎだ、そう言い返した教授は夜の景色を見て、ふと明日狂瀾怒涛
デイスターバー
がすることを思い出した。

「明日、のはずだぞ狂瀾怒涛。そろそろ寝たらどうかね。君の場合、睡眠時にもブレインエネルギーを使って亜世界への出現をキャンセルできるのだろう。ならばじっくり体を休めるべきだと思うのだが」

「ああ？ お前いつも私が寝ないことを知らねえのか？

ブレインエネルギーを、睡眠時に供給するエネルギーに代用してるんだよ。その分、ブレインエネルギーを回復するために食事するから、食べる量が桁違いになるんだがな」

それは知らなかった、と言ひ、話題を元に戻して、

「それより明日はただ亜世界を好き勝手した後、それを消し去るだけなのかい？」

「いや、念のためS極がいるかどうかチェックする。あとは私以外のもう一人のN極、加藤遊馬を殺すことぐらいだな。同じ極の奴は消しておかねえといつ邪魔されるか分かったもんじゃねえ。ああそうだった。亜世界は私とリンクしているから、ブレインエネルギーを上手く使うと文字通り『何でも』出来ちゃうんだよねえ。まさに完全掌握ってかあ？」

狂瀾怒涛は自分の腕時計を見た。時刻は十一時五十六分。

残りわずか数分で例の明日になるところだ。

「おつといけねえ、時間だ」

「時間というのは、明日のことかね？ 明日と言っても、亜世界の住人にとつての明日はまだまだ先のはずだが？」

その質問に、ディスターバー 狂瀾怒涛の表情が曇る。

「ちげえよ、ただの布石さ。面倒だが説明してやる。微弱なブレインエネルギーで長時間そいつらの脳にダメージを与えて、風邪のような症状を起こさせるのが目的。今日の午後からやっていたんだが、そろそろダメージ量を増やさないとならねえ。量を調節することで効率を良くしてるんだよ。そうすれば、明日奴らが登校とか出勤とかせずに、風邪だろうと決め付けて家で休むに決まっている。そこが狙い時」

「分からんな。そこまで執行猶予にこだわるかね。今この瞬間にでも亜世界へ侵入出来るといふのに」

フツ、と捨て台詞のように呟いた狂瀾怒涛は、ディスターバー ブレインエネルギーを分散させ始めたのか、目を瞑り、そして黙り込んだ。

（全く、今更だがとんでもない奴と一緒にいるものだな）

教授がそう思っていると、しばらくしてから狂瀾怒涛の目が開いた。しかし、ディスターバー どうも開き具合が狭い。半開きだ。やはりブレインエネルギーの使用は体力の消耗を早めるのだろうか、そんなことを考えていた教授だったが、

「腹減った」

「てつくり疲れた、と言うと私は思っていたが」

「いや、今日は仕事があつたからブレインエネルギーを普段よりも多く使っただけだ。面倒だぞ、わざわざアメリカまで行ってやらされた仕事だ、『ただマフィアを三つ壊滅させるだけ』なんだからなあ。ったく、そのくらいでこの私に仕事させるなっつーんだよ。あゝ腹減った」

「分かった。だが生憎、この時間帯だと近くの店も閉まっている。しかもここだとまともなものを出せん。向こうの部屋にあるカップ麺で我慢してくれ」

「はいはい」

ディスターバー 狂瀾怒涛はカップ麺を求め、部屋を出た。話し声がなくなり、研究室に静寂が訪れる。

ディスターバー （やはり狂瀾怒涛は彼を侮っている。彼は既にクスリを作り終えただろう。

ディスターバー 狂瀾怒涛は亜世界を文字通り滅茶苦茶にする。クスリの出来次第では止めるこ

とも出来るが、はっきり言って怪しい)
教授は思う。

（君にしか狂瀾怒涛を止めることはできないぞ、加藤遊馬）
デイスターバー

第三章 く破滅の始まりとその元凶く

「あゝあ、なんてこった」

朝。昨日までの風邪らしき症状が治まっているのを期待しながら目を覚ました俺だったが、あるうことか頭痛がひどくなっていた。マジかよ……、思いながら無意識に鼻から息を吸うが、鼻水が相当量詰まっているのか、はっきり言っても苦しい。超ポジティブ思考の持ち主なら肺活量が鍛えられるとか考えるだろうが、勿論俺はそんな天然さんではない。ひとまず起きていない頭を無理やり働かせ、自分の身体の状態をある程度把握する。すぐさま異常と判断した思考回路に従い、薬がある引き出しから体温計を取り出し、脇に挟む。

こんなことをするのはいつ以来だろうか。少なくともここ一年ではない。下手をすれば中学生以来かもしれない。

（おかしい。自分で思うのもなんだが、俺は常に健康体そのものだ。ストレスだつて溜まってきたら発散している。つまり原因は俺ではなく外からか。……まさかまたインフルエンザが流行り出したのか？　そしてそれに見事感染。だとすると厄介だな。あゝなんてこった）

ピピピッ、と機械音が鳴る。おもむろに体温計を取り出して画面を見ると、37・9と悪い意味で期待を裏切らなかった数字が並んでいた。

（……無理するのは受験生にとってタブーだ。という訳で今日は学校を休むに決定）

小中学生なら「まともな理由」で学校をサボれて嬉しいと思う奴もいるが、俺は受験生だ。受けるのは高校ではなく、大学。それも日本最難関のT大。分かると思うが、適度な遊びなどはともかく、無駄な時間というのは可能な限り無くしたいのが本音だ。その内の一つが、病気。自分をその魔の手で拘束する憎たらしい存在。例えば、プロ野球選手は野球をプレーする感覚や技術を一定もしくはそれ以上のレベルに保つことで、日々の試合を常にほぼベストな状態で行っている。それは繊細なもので、一度怪我や病気で練習すら出来ない状態になってしまうと、取り戻すには休んだ倍以上の時間がかかってしまう。

大げさな例えだったが、実を言うと大学受験生の俺にも当てはまる。テストをする際にも感覚は重要な要素となる。感覚、というよりは慣れと言った方が良いかもしれない。慣れていればテストでの時間配分をうまく調節でき、変わった問題の本質も素早く掴める。だがテストに慣れていないと、無駄に時間を使ってしまい、見たことも無い問題に戸惑い続ける。俗に言う「差」というのはこれも含まれていると俺は思う。

つまりだ。たかが一日といえど勉強できなくなると、俺の合格する可能性が落ちるのだ。仮に落ちたとしたら、俺は今日という日を一生呪い続けるだろう。

「はあ、仕方ない。とつとと寝るか」

風邪以前に、睡眠中に使ってしまったエネルギーを朝食で補給すべきなのは常識だが、何も食べたくないという気持ちで勝ってしまった。

それでも、市販の風邪薬を適量の数倍飲み（市販の薬は病院で処方される薬よりもかなり薄められている、らしい。ただし信じるか信じないかはあなた次第。良い子は真似するな。悪い子なら良いという訳でもない）、さらにスポーツドリンクを大量に飲む。そしてベッドへUターン。

ん？ と俺はあることに気づく。

（寝るってことは亜世界に行くってことだよな。でもこの状態だといつも通りには遊べないな。精神的に辛いだろう。だが待て。今回は遊んでストレス発散をしたほうがいいんじゃないのか？ そうだ、精神的な疲れはあっても、肉体的な疲れはないんだ。なら遊んだほうがいいな！）

そう結論付けた俺からは、さっきまでの気だるさが吹っ飛んでいた。むしろテンションが上がっている。やはり身体を使わずして遊べるというのはありがたい、まさに思う存分はしゃげる。

（あれ、そういえば一昨日に遊馬が、亜世界がどうだこうだ言ってたっけ）
不意にそんなことを思い出したが、どうせ行けば分かることだ。

俺はすぐに目を閉じた。

次に目を開ければ、そこに広がるのは俺のお気に入りの亜世界。

（楽しみなあゝ）

老若男女様々な人たちが共に時間を共有する場所。

（今回はかくれんぼにしようか、それともケードロがいいかな）

そしてみんなが楽しみ、みんなが安らぐ楽園。

（遊馬がこの前やっていた缶けりもいいなあゝ）

現実なんかよりもずっと平和で、穏やかで、そして色んな人と繋がっていら

れる、そんな理想的な世界。

（あゝなんかわくわくしてきた！）

……なのに何だこれは。

これが本当に俺のお気に入りの世界なのか？

「……………は？」

それしか口に出来なかった。

誰が予想出来ただろうか。

真・っ・先・に・目・に・し・た・の・は、いつもの平和な公園の風景ではなく、地・面・に・人・々・が・
へ・ば・り・つ・い・て・い・る・と・い・う、まさに異様な光景だった。

（……………あ……………な、に……………が？）

そしてそこら中に赤黒い模様を描いている大量の、血・よく見てみると、腕・
や・足・指・肉・片・骨・脳・小・腸・肝・臓・す・い・臓・ありとあらゆる人間の体が、
し・か・し・ど・れ・も・原・型・を・と・ど・め・て・な・く、例えるとしたらまるでミ・ン・チ・の・よ・う・な・状・態・
で・散・ら・ば・つ・て・い・た・。

俺は思わず吐いた。胃の内容物だけでなく臓器自体が丸ごと出てくると思う
くらい、激しく。さっき飲んだスポーツドリンクが黄色っぽく変色して出てき

た。亜世界でも吐くことが出来るなどと悠長なことはとても考えられなかった。

全て吐ききったのか、吐き気が一気に来ても口からは何も出て来なかった。

(落ち着け、落ち着け、ひとまず落ち着くんのだ)

あの光景から逃れるために目を瞑る。そして考える。この状況は、一体なんなのかということ。

だが俺の弱さからか、今すぐここから出ると魂が叫んでいるような気がした。

ゆっくりと一歩足を歩めようとした。

しかしその足を動かすことは出来なかった。

(目を開ければまたあれを見ることになる。閉じたままだと、……踏んでしまいかもしれない)

何もできない。

でも何かしないといけない。

俺はもう一度思考を再開する。

(考えるんだ……)

その時、後ろの方から誰かの声が聞こえた。

「やつと来たか。まったくこの私を待たせやがって」

だがそれは初めて聞いた声だった。同時に、何か人を恐怖させるような、人を嘲笑うかのような、そんな人間らしくない声だった。

俺の目は自然と開いた。

そして振り返る。

「誰だ、お前は？」

するとその少女は手を後ろに組んだままニヤツ、と顔を歪ませ、告げる。

デイスターバー
「狂瀾怒涛。こう言えば分かるかなあ？」

デイスターバー
狂瀾怒涛。

遊馬が言っていた、亜世界とリンクする脳波を持ち、そして前の住人でもある人物。

女性にしては短めなストレートの黒い髪、端正な顔をしているようだが、崩れ切ったニヤケ顔で台無しになっている。服は上から下まで白で統一されているが、ところどころに血の模様がいつている。

俺は咄嗟に尋ねた。

「あ、あなたは、この状況について、何か分かりますか？」

言葉がおぼつかない。しかも違和感がある文だ。彼女が一体誰なのかを聞くのが普通ではあるが、優先順位が違っていた。と言っても、そこまで頭は回っていない。故に今の俺にはこう表現するしかなかった。しかし正反対に、

デイスターバー
狂瀾怒涛は滑らかな口調で答える。

「ああ分かるとも分かるとも」

すると益々歪んだ顔を作り、一言。

「私のら、く、え、ん、だよ。フフツ」

意味が分からなかった。

デイスターバー
しかし狂瀾怒涛が組んでいた手を元に戻したとき、そんなことなどどうでも

その手に握られていたのは、

そう、あの「常に笑顔」の近藤さん。

しかし、その顔には表情すらなかった。というか生気が感じられない
そこで気づいてしまった。

近藤さんの首から下が無いことに。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ!!」

「うるっさいな。あ、もしかしてこれ見てびっくりしたのか？ 悪い悪いだったら、

一旦言葉を切ってから告げる。

「……うしてやる」

パン、と破裂音がした。目の前で。

そして何か飛び散った。反射的に驚くことすらできない俺は、ふと

デイスターバー
狂瀾怒涛の手元を見る。

さつきまで持っていたはずの首が無い。

そのかわり、デイスターバー狂瀾怒涛の手にはさつきまで無かったどす黒い汚れが付いていた。

「ま……さか……？」

「何だ分からなかったのかよ。ダツサ」

ディスターバー
狂瀾怒涛は未だにニヤニヤしながら俺の顔を指差す。

「左の頬に触ってみろ」

俺の左手は震えながらも言われた通りに動いた。

何か冷たいものが触れる感触があつた。

一センチ角のべつとりとしたそれをつまみ、ゆつくりと視界に入れる

茶色いのか赤いのか黒いのか、言葉に出来なかった。が

「それさあ、一般的に『脳みそ』って言うんじゃないかねえのかなあ？」

俺は頭がおかしくなりそうだった。

いや、最初に見たあの光景によつて既に狂つていたのかもしれない。

だけどそんなことはどうでもよい。

本当に何なんだ？ 何でこんなことになるんだ？

「この状況」を認識できても理解はできない。

そんな俺に残っていたのは、「この状況」に対する怒りだけだった。

⋮

「おいおいそんなに睨むなつて。まあうるさくなるよりはマシだが。……つと
いけねえ、この後コイツをどうするか決めねえと」

デイスターバー
狂瀾怒涛が何か言ったようだが、俺にはあまり聞こえなかった。普通なら聞

こえていただろうが、今の俺はそんなに落ち着いてはいない。

「……お前か？」

「あ？」

「あ？　じゃねえよ。お前なのかって聞いている」

「んだよ、『何を』この私がしたのかぐらい言えよ。じゃなきゃ分からないだろお？」

(二、この野郎……！)

まるで今の問いかげが自分に關係の無いような素振りを見せた狂瀾怒濤に、デイスターバー
俺はついに吹っ切れた。

「お前がこんなにしたのか！　そうだろう！　人の目の前で人間の頭爆発させやがって！　そんなこと普通の人間には出来ない！　それを平気で、笑いながらしやがって！　……他のみんなまでこんな惨い有様にしたのも、ディスターバー狂瀾怒涛、お前なんだろう！！」

もはや叫びに近い声でディスターバー狂瀾怒涛に怒鳴りつけたが、彼女の反応はあっさりしたものだ。た。

「チッ。うっせえんだよ。黙れや虫ケラが」
その瞬間、俺の口が開かなくなった。

口だけではない。手、足、腕、指、首、気づいたら身体全体が硬直していた。

(何だ、何が起きている？)

「アイツが来てから見せびらかそうと思っていたが、これじゃ駄目だ。お前、うるさすぎ」

(う、嘘だろ、コイツが俺の身体を操っている、だと？)

全く動かない俺の身体から、嫌な汗がどわっと出てきた。ついでに、だんだんと顔が青ざめていくようにも感じた。

「だからさあ……今から私のオモチャになれよ」

ディスターバー

狂瀾怒涛はさつきよりも恐ろしい笑顔を作り、

「タイトルは忘れたが、首が三百六十度回ってぼろっ、と落ちるシーンのある映画があるだろ。お前は知っているか？」

(当たり前だ。だがそれがどうした……？　ち、ちょっと待て！　コイツ、まさか俺の首もぎ取るつもりか！？)

生きている心地がしなかった。おそらく、同じ状況になれば誰だって俺みたいな気持ちになるだろう。

「まあどっちでもいいが。……でもさあ、それを見て恐怖する奴もいれば、そんなんじゃないもの足りねえって思う奴もいるだろう？　私は断然後者でね。どうも満足できねえんだよな。スケールつつうか、何かちやつちいんだよ」

ディスターバー本当にコイツ、狂瀾怒涛の性格はどうかしている、改めてそう考える。

「でさ、それをこのディスターバー狂瀾怒涛風にアレンジしたのを考えたんだけどよお」
ぞわっ、とそれまで以上に殺気めいたものを感じる。

(……な、何をするつもりだ……？)

すると俺の心を読み取ったかのように、ディスターバー狂瀾怒涛は答えた。

「首だけじゃなくて、他にも捻ればより面白くなるんじゃないかなあ？　例えば、腰とか」

ディスターバー狂瀾怒涛が言い終えると同時に、俺の首と腰がそれぞれ反対方向に捻れ始めた。

(なっ……！？)

俺は今度こそ叫び声を上げようとした。絶叫しようと身体から声が自然と絞り出されるような気もした。だが、俺の口からは叫び声どころか、声すら出ていなかった。ディスターバー狂瀾怒涛に操られているからだ。

俺の恐怖とは対照的に、ディスターバー狂瀾怒涛は喜びを噛み締めているようだった。

「アハハッ！　これだよ、これ。静かだからこそいいんだよ。下手にうるさくてもムカつくだけだっつーの。……そろそろ九十度を過ぎたかなあ。じゃあ、とつと胴体もろとも千切れちゃえよ！　そこから溢れんばかりの血を見せて

みろよ！ キヤハハハハハハハハッ！！」

(まずい……本当に千切れる……)

既に首の筋や血管が切れただろう。痛みを通り越して、麻酔にかけられたように何も感じない。

感じるのは、ただ生命の危機だけ。

「いいねいいねえ！ お前はフィギュアかあ？ 身体の形がおかしいんだよお！ ツフ、アハハハハハハハハハハ！！」

視界が暗くなってきた。息が出来なくなってきた。骨が砕けそうになってきた。血管がせき止められてきた。

(嘘、だろ？)

(俺、死ぬのか？)

(……いやだ)

(絶対に、いやだ)

(絶対に……い、や………)

そして、

バタリと、俺の身体は、倒れた。

死んだのかな？

だが、何故か^{デイスターバー}狂瀾怒涛は驚いた表情になっている。

しかしさらに驚くべきなのは、俺が「生きている」ことだ。しかもさっきまでの捻じ曲がった身体は元通りになり、呼吸もできる、痛みもない、そんな状態に戻っていた。

そして、

俺の目の前にソイツは現れた。

「ゆ………遊、馬？」

茶色に染め上がった長髪、人をムカつかせるような目つき、無駄に筋肉質な体、そしてファッションセンスゼロの服装。

それは間違いなく、加藤遊馬だった。

しかし、表情が違う。

いつものやわらかさが無い。

「真人クン……済まなかった」

こつちを見た遊馬が言ったのは、たったそれだけだった。

俺は立ち上がるとした。だが腰が抜けているのか、全く立てない。

「狙いはボクなんだろう？ それなのにわざわざこんな惨いことまでしゃがって」「ついにお出ましかN極くん。てめえが来ると反発するから頭ん中がジリジリすんだよ……っっておおつ、いやあい表情だねえ。前みたいなアホ面とは大違いだ」

「ギミが他の人にまで手を出さなかったら、ボクだって命ぐらいは見逃してや

「何ほざいてんだよ」

「死ね。」

第四章
誰も望んでいない

直後、ディスターバー狂瀾怒涛から光が溢れ出した。

具体的に言うところ、心臓のあたりからだろうか、まばゆい光が一気に拡散した。

「ぐあつ！ くつ、さっきの不自然な倒れ方といいこの力、……はつ、貴様まさか！？」

「ブレインエネルギーを使えるのは狂瀾怒涛、キミだけじゃないんだよ」

ブレインエネルギー？ 初めて聞く単語に俺は戸惑う。

[illegible]

いそうかい、お前もスペックが高いようだなあ！
だがこの狂瀾怒涛に勝てる

「ともも思つたかあ!？」

すると、今度は遊馬から光が放射された。

「！」

（こいつら、一体何をしているんだ？）

さっぱり分からない。どうやら、今はただこの二人の攻防、のようなものを見て、いることしか出来ないようだ。

「キミもボクと同じく直接心臓を止めようとしているみたいだね。でも無理なのはお互いみたいだね。そんなやり方だとN極同士で反発するのを無理やり押し通すからエネルギーの消費量がケタ違いだし、そもそもその程度なら防げるからね。だから、」

遊馬は何か集中しているようだった。

「物理的にキミを殺す」

すると、デイスターバー狂瀾怒涛の周りに銀色に光る針が数百、数千、いや、それ以上のお

びただしい数になって出てきた。

「なるほどなあ。亜世界と私がリンクしているのをいいことに、お前もこの空間を完全掌握したみたいだなあ。お前らは私の脳波に引っ張られて来たんだからな、脳波が私と同じになっているんだったな」

「それじゃあ……いくよ」

膨大な数の針が一斉に狂瀾怒涛へと襲い掛かった。はつきりとは見えないが、

ヒュンヒュンヒュン、と音がする。真つ白なそれらの針はただ一点、デイスターバ狂瀾怒涛の頭をめがけてまっすぐ飛ぶ。

そして、たった一秒もしないうちに全ての針が狂瀾怒涛に突き刺さった。間

違いなく、俺にはそう見えた。

だが、ディスターバー狂瀾怒涛には傷一つ無い。

見ると、^{ディスターバー}狂瀾怒涛の側にはいつの間にか無数の針が落ちていた。

「ざあんねえんでしたあ〜！ お前がどんなに攻撃したって、私はブレインエネルギーで防御しているから無駄なんだよお。このまま続けたって、どうせお前の脳が先に疲れ果てちまうのがオチなんだからさあ」

「……そうみたいだね」

つかの間の沈黙。

遊馬は無表情。

^{ディスターバー}狂瀾怒涛はニヤケ顔。

そして俺はただ歯軋りをしているだけだった。

（何か出来ることは無いのか！？）

この状況で俺は明らかに場違いだ。二人のようにブレインエネルギーというものも使えない。それ以前に、今日の亜世界に何が起こったのか、それすら未だに掴めていない。この二人はそれを知っている上で戦っているに違いない。つまり、俺は傍観者に過ぎないのだ。

（俺は何をすべきなんだ！？）

それでも、俺にだって何かすべきこと、何か出来ることはあるはずだ。

（どうすればいいんだ！？）

一度冷静になって考える。

（……いや、そもそもブレインエネルギーって何だ？ ブレイン、ということとは『脳のエネルギー』か。つまり脳を使うってことだな。でもどうすれば？）

今までの二人の争いを振り返る。

（あの光を出すのにモーションなんて無かった。ただ告げるだけ、と言うより意識しただけで力を発揮しているようだ。だったらそれこそ脳を使っている以外に考えられない）

ついでに言うならば、ブレインエネルギーは脳から出ている訳ではなく、あくまで脳で生成されるのも見ていて分かる。しかも、使い方はまさに何でもあり。亜世界だからこそ出来るのかどうかは知らないが、任意の位置から攻撃を仕掛けることも可能らしい。あの光や針がそうだった。現実世界でそんなことが出来るなら世界征服も夢ではないだろう。

そんな魔法じみたことが目の前で繰り広げられている。とても人間技とは思えない。

しかし、ブレインエネルギーさえ使えるようになれば誰にでも同じことが出来るはずだ。勿論、俺でも。

（つまり、方法が分かればいいんだ。でも、方法って……）

俺は考え事に集中していたが、その途中で^{ディスターバー}狂瀾怒涛がしばらく続いた沈黙を破った。

「それにしても、よくそんなにも力が使えたもんだ。その源は何だあ？ 私は対象、つっても人間以外にも風とかカオス理論が絡むものもあるが、それらの動きを高精度で予測演算することで脳を働かせてエネルギーに変換している。いつておくが、もはや予測が当たって当然のレベルだ。まあ、風の場合は本気を出すとき以外ではやらないがな。さて、じゃあお前はどうかやってその力をつけているのかなあ？」

（！？ 脳を働かせる……？）

「……単純な計算だよ。さっきの攻撃は『二の一千万乗』を計算したことでブレインエネルギーを生成した。当然、器用に解くんじゃなくて、ただ二×二×二……を繰り返さなきゃ頭を使わないから意味が無い」

（ちよつと待て、そんな計算してたのか！？）

これが日本一の頭脳。もはや常識なんてちっぽけな枠にはとどまらない。万単位で累乗など本当に暗算で出来るのだろうか？

だが、これで謎は解けた。

(要は、ケタ違いに頭を使えばいいんだな。それによってブレインエネルギーを生み出せる！)

ケタ違いと言っても、彼らはあまりにも違いすぎている。俺では歯が立たないどころか相手にすらされないかもしれない。それくらい次元が違うのだ。しかし、

(だからどうしたって言うんだ！)

そう。やるべきことは見つかったのだ。これで十分。

(遊馬、俺にだって何か出来るってことを見せてやる！)

そう決意し、すぐさま「何に」頭を使うか考えていると、突然、遊馬が微笑に笑い出した。

「……あはは」

(どうしたんだ、遊馬？)

何故急に笑い出したのかは分からないが、遊馬の笑いには、何故だか悲しみが含まれているような気がした。

「どうやら、こうするしか無いようだね」

嫌な予感がする。遊馬は何かをする。だが、それは遊馬本人もやりたくなかったこと。察するに、

(遊馬、お前自分を犠牲にする気か！？)

根拠などどこにも無いが、俺はそう感じた。

「何だ秘策でもあるのかあ？　そういうやお前こ最近チョコチョコと動いていたようだが、それが関係しているんだなあ？」

「出来ればやりたくなかったけど、

一呼吸おいて、一言。

……もしN極とS極の性質を同時に持つ人間がいるとしたら、そいつは最強なのかな？」

「！？」

「悪いけど、次の一瞬で終わらせるから」

俺の友人は、何かを心に誓ったときのような、そんな目をしていた。

「ケッ、何かと思ったら、ただのハッタリかよ。芸がねえな」

(いや、遊馬は本当のことを言っている！)

N極とS極という懐かしい単語があったが、それはともかく、遊馬が言ったことは真実だ、俺ははつきりと思う。

それを裏付けるかのように、遊馬は呟く。

「じゃあ、試す？」

刹那。

ディスターバー
狂瀾怒涛の身体に雷のような光が浴びせられた。

「うがあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつー！」

俺は驚いた。ブレインエネルギーで自身を完全に防御しているはずの

ディスターバー

狂瀾怒涛に攻撃が通っている。

「今からボクはS極だよ。つまりキミはボクの攻撃を全て引き付けることにな

そう言つて、遊馬は叫びだした。

「うおおおおおおおおおおお！！」

(遊馬……)

放たれた光は虹色のような色彩をめぐるめく変化させながらその勢いを強めていく。ゴゴゴツ、と地面を揺るがすほどのエネルギーは徐々に拡大していく。

そしてその中心に狂瀾怒濤がかすかに見える。さつきまでの余裕は消え、いかにもがき苦しんでいる表情に変わっていた。対する遊馬も、全力を振り絞っているのであらう、ぐつと目を瞑り、ただひたすら叫んでいる。

遊馬と狂瀾怒涛、二人の絶叫が亜世界に響き渡る。

「があああああああああゝ！」「
あああああああああああゝ！」

（おい……遊馬、遊馬！　くっそ、何に頭を使えばいいんだ！？　何だ！？　体何なんだ！？　どうすればいい！？）

完全に取乱していた。いや、それが普通だろう。自分が情けない。情けなくて情けなくて情けなくて、それでも、現実はこの有様だ。

（脳を使ってエネルギーを生成する……ってことは！？）

俺はようやく閃いた。

（地味だが俺の得意分野のこの方法なら！）

正直アホらしい方法だが、効果はあるはずだ。

それは、「二人しりとり」だ。

（ただ考えるだけじゃ足りない。だったら、限界まで思考をフル活用するだけだ！）

つまりこういうことだ。

ブレインエネルギーは思考でつくられる。

思考が必要量に達していれば十分。

この世にある単語はまさしく無限大。

それを全て使うくらいの勢いでしりとりをすれば……

（駄目元だが、やってみるしかない！）

「うおおおおおおおおおおおつ！！」

必死だった。遊馬と狂瀾怒涛の雄たけびもいつの間にか頭に入って来なくなっていた。

俺の脳内はありとあらゆる単語で埋め尽くされていた。それこそ国語辞典を丸ごと頭に叩き込まれたくらい、だ。しかも量だけでなく、しりとりスピードも尋常ではなかった。一秒間に何十、何百と単語が重なり合い、またさらに新たな単語が出てくる。それにつれて頭がパンクしそうになってきた。無理も無い。実際にやってみないと理解できないが、学校などのお勉強とは頭の使い方がまるで別物だった。それをここまでやり続けている俺の脳は、長時間多大な負荷をかけ続けて異常に熱したパソコンのごとく、オーバーヒートしておかしくなりそうな予兆が脳裏をよぎる。

すると、頭のだ真ん中、つまり脳内から、何かが、それが何かは分からないが、溢れてくるような奇妙な感覚を感じるようになった。

（これがブレインエネルギーか！）

ついにエネルギーを作り出すことに成功した俺は、すぐさま狂瀾怒涛へ攻撃を仕掛けようとする。

しかし、どうやって？

（方法なんか知るか！ イメージだ、イメージ！）

あ!!」

またギギツ、と、今度は右腕から音がした。震えながら見てみると、やはり右腕がなくなっており、左腕同様真っ赤な血と、それとは別に真っ白な骨が見えた。

「ううううううあうああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

いやだ、分かったくない。なんだよ、これは。

「まこ、と、くん……」

「ハッハアア! いいねいいねえ! さてじゃあ右足いつてみようかあ?」

「くっ、」

「と思いきやあ! 折角だから両足同時つてのがおもしろそうだよなあ!!」

また例の音がする。そしてストン、と俺の胴体が落ちる。

「うううあごう p c d j s y ほあ s y ……」

自分が何を言っているのか分からない。そして、何故こんなになっても未だに生きているのか不思議でしかなかった。

すると、まるでその疑問に答えるかのように、

「ん〜? なんで手足もぎ取られた胴体+頭だけのめえが生きているのかってえ? 知りたいかあ? 私がめえを生かしているからだよお! 矛盾? いいやあ、めえに最っ高のキョウフって奴を味わってもらうためさあ、ギャツハツハツハツハツハツハツ!」

ギギギツ。何度も聞いた音がまた聞こえた。

ぐらり、と視界が真横になった。

目の前には、さっきまで首で繋がれていたはずの、胴体、」だったもの。過去形なのは、腸みtainなものとの骨の残骸がわずかに残っているくらいで、あとはただ液体になっていただけからだ。

もう声なんて出せなかった。今までに無く気持ち悪くなっていたが、胃が無

いたため、嘔吐すら出来なかった。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハッ! サイコウ、もうサイコウ。こんな気持ちは初めてだあ! ありがとよお、私は今サイツツコウに上機嫌だあ! でもこれで終わりなんだよなあ、これで。その醜い面をミックスジュースにしてメインディッシュの完成だああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

これだけは本能で思う。

俺は間違いない、死ぬ。

そして遊馬も俺と同じようにされるだろう。

「イヤッハッハッハアッ! それじゃあ、その頭も狂^{ディスターバー}瀾怒涛になっちまいなあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

キイイイン、と音がした、ような気がした。

(あーあ、俺の人生、ここで終わっちゃうのか……)

急に、目の前がパアッ、と明るくなった。

(何だろう、これが天国?)

感じられたのは、眩しい、それだけ。

(はは、もうどうだっていいや……)

そしてその光はだんだんと薄くなり、そして消えた。

(ん?)

様子がおかしい。何故か狂瀾怒涛デイスターバーがいる。ぼろぼろになった遊馬もいる。ということは、

(い、生きている?)

幻覚? いや、

(これは……!?)

だが、くしくも俺の意識はそこで途絶えてしまった。

第五章 現れたイレギュラー

「まこ、と、クン……」

閃光弾のごとく一時的に視力を奪うほどのまばゆい光が消えた後、加藤遊馬は成村真人が完全に息絶えたのを見た。

「ごめ、ん……でも、」

そう。遊馬には確かに、真人をこんなにさせてしまったという自分への罪悪感や侮蔑があった。

だが悔やむよりも、今目の前で起きたことのほうが優先度は高かった。目の前に、いてはならない人物がいること。

「良・太・クン……何で、ダメ、だ、と、言った、のに、来ちゃった、んだ……?」

佐伯良太。頭の良い小学四年生の男の子。毎日亜世界に来ているが、昨日は来なかった。そして今日も来るはずはなかった。なのに、

「あの、部屋、に、いた、の、に、どう、やって、ここに、来れた、んだ?」

実は、あるヒミツがこの子にはあり、それを狂瀾怒涛デイスターバーに知られないよう、昨日と今日だけ亜世界にこの子が来れないようにある部屋で過ごしてもらっていたのだが、

「部屋中から人には聞こえない超音波のような音が出ていることを認識。思考力を弱めるものであると推測。ブレインエネルギーの生成には苦勞。エネルギーで過度な圧力を加えて部屋を破壊するのは困難。が、比較的エネルギー使用量の少ない、音源部分を真空状態にする方法で音を遮断。だが、それまでに二日かかったのは今後の課題。やはり子供には限界があると断言」

亜世界でみんなと楽しく遊んでいる子供とは思えない程、感情が抜けきっていた。表情は恐ろしいくらいに変化が無く、相手によつては薄気味悪さすら感じさせるようだった。

「おいそこのクソガキい、お前も自らこの私の餌食にでもなりに来たのかあ!?!」

「口の悪さは評判通りのようだな、狂瀾怒涛」デイスターバー

「へえ、私の名前知っているんだあ! ついでだからお前の名前くらい聞いてやるよお!」

「佐伯良太、と言いたいところだが、君にはこう名乗ると宣言」
それは、この場において遊馬だけが知っているもう一つの名前だった。

「コードネーム、解析不能」

「……コードネーム、だど？」

狂瀾怒涛は明らかに動揺していた。コードネームというのは、狂瀾怒涛のよ
うな立場の人間が持っている二つ名。

つまり、この機械のような表情で狂瀾怒涛を見つめている小さな子供も、同
じ立場の人間であるということだ。

「なんだよ……解析不能なんてふざけた名前語りやがつて」

「それはあなたも同じだ、狂瀾怒涛。どんなところも一度目をつけるものなら

ば全てを破壊、いや、狂瀾怒涛のごとくメチャクチャにしてしまう、というの

が由来だと推測。では質問に答えようと宣言。解析不能の由来は文字通り解析
不能からくるものなのだが、詳細に話すと、僕の存在から行動、つまり僕とい
うものが解析不能、ということからくるものである、と返答

「……、」

「時間が無いので加藤遊馬、あなたにお話。今すぐ僕と電磁誘導せよ、と命令」

「!？」

「ダ、ダメに、決まっ、ている、だろ」

電磁誘導。普通は学校でよくある理科の実験、磁石をコイルの中で出し入れ
することで電流が流れるというものだが、それは彼らの会話では全く関係ない。
ここでの電磁誘導とは、一人はS極、もう一人はN極の性質を持つ者が、互い
にブレインエネルギーをある方法で使用することで、無限にエネルギーを生み
出す、というものだ。しかし、

「そんな、ことをすれ、ば、エネルギー、が暴発、するだけ、だ。とて、も、
操れる、量、じゃない」

そう。遊馬はケタ違いな量のブレインエネルギーを操ることが出来る。だが、
電磁誘導は一回するとエネルギーを永遠に生成し続ける。まさにその量は無限。
論理的に考えれば、操るなんて不可能だ。逆に実行者もろともエネルギーに飲
み込まれてしまう。つまり、解析不能がしようとしている電磁誘導というのは、
ただ破壊しか生み出さない。

だが、解析不能は驚くべきことを口にした。

「僕には操れる能力がある、と断言。故に電磁誘導をしてもその無限のエネル
ギーでこの人たちを蘇らせることも、余計なエネルギーを消滅させることも
可能」

ふざ、けるな、と遊馬は言い、

「信用、でき、ない」

「ならお前はどうかするのかと質問。このままではみんな死ぬだけ、僕にも
狂瀾怒涛を殺す力はないのだから、と説明。ならば電磁誘導に賭けるべきだと

字になっており、元の顔の形を完全に崩壊させていた。

(まずい、N極に先制攻撃されればS極はそれを引き付けてしまう……ッ！)

ディスターバー

辺馬が先にと狂瀾怒浪にタスエにわたのは、先に攻璽を仁掛にたか

らだ。S極の磁石をN極に近づけると、互いに引き合う。つまり、S極時の遊馬が攻撃してもそれはS極の性質を持った攻撃となっているから、N極の

ディスターバー

狂瀾怒浪の攻撃とふかり合い
威力が分散して消えてしまう
だから先に攻

デイスターバー

撃を食らねせ
そうならな
いようにし
たのだ（な
ら）狂瀾怒
浪のように
直接体内

から攻撃すればよいのだが、それは見ては分らないが、体力の消耗が激しく、

しかし、この状況では逆転している。

ディスターバー
狂瀾怒涛が攻撃側、
解析不能が防御側となっている。

それは、デイスターバー狂瀾怒涛の攻撃が少しでも当たれば、当たる前に止めない限り、攻

アンノーン

「さああああて、こつちにきやがれクソガキイイイイイイイイイイイイイイイ

「堅固拒否」

デイスターバー

突如、狂瀾怒涛の動きが止まった。真人がそうであつたように、指先まで完

(まずい、N極に先制攻撃されればS極はそれを引き付けてしまう……ッ！)

遊馬が先ほど狂瀾怒涛にダメージを与えられたのは、先に攻撃を仕掛けたか

らだ。S極の磁石をN極に近づけると、互いに引き合う。つまり、S極時の遊馬が攻撃してもそれはS極の性質を持った攻撃となっているから、N極の

狂瀾怒涛の攻撃を引き付けてしまう。よって遊馬の攻撃は狂瀾怒涛に届く前に

狂瀾怒涛の攻撃とぶつかり合い、威力が分散して消えてしまう。だから先に攻

撃を食らわせ、そうならないようにしたのだ（なら狂瀾怒涛のように直接体内

から攻撃すればよいのだが、それは見ては分らないが、体力の消耗が激しく、そのため最初のうちにしか使えないのだ。

しかし、この状況では逆転している。

ディスターバー
アンノーン

狂瀾怒涛が攻撃側、解析不能が防御側となっている。

それは、デイスターバー狂瀾怒涛の攻撃が少しでも当たれば、当たる前に止めない限り、攻

アンノーン
撃は解析不能に全て加えられるということだ。

「さああああて、こつちにきやがれクソガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

「断固拒否」

突然、狂瀾怒涛の動きが止まった。真人がそうであつたように、指先まで完

デイスターバー

デイスターバー

「今のうちに、実行」

ア
ン
ノ
ー
ン

ルギーを作る。

「やり方は知っているよな、と確認」

二人を囲

「では開始」

声と共に

「くっ！これが、電磁誘導か」

れで十分。もう終わる、と断言」

デイスターバー

デイスターバー

狂瀾怒濤

どんな形？ 分からない。

この世に存在する？
分からない。

ア
ン
ノ
ー
ン

チヤグツ

デイスターバー

した。
例

「ギヤハ」

亜世界は真っ黒に染まりきっていた。

この混沌の中心に、ディスターバー狂瀾怒涛がいるようであった。

だが、

それは違った。

大間違いだった。

真の中心は、あの二人。

この時、ディスターバー狂瀾怒涛は知る由もなかった。

飲み込まれているのは、実はディスターバー狂瀾怒涛であることを。

そして気付かなかった。いや、気付けなかった。

亜世界が消えてしまったことに。

終章　　二人は探し、二人は殺し合い

成村真人は長い眠りから覚めるように、ゆっくりと起き上がった。

「あれ……？」

おかしい。確かに、亜世界で手、足、そして首までもぎ取られて間違いなく死んだはずだった。

それにもかかわらず、俺は生きている。しかも、バラバラになっていた手足と首もしつかり元通りになっていた。

「元に戻っている……？　それで、ここは……家？」

部屋の中は暗かった。夜なのだろうか。しかし電気をつけると、どうやら自分の家だということが分かった。

今いるのはベッドの上。

「……って、のん気になっている場合じゃ無い！」

すぐさま枕元に置いてあった携帯電話を手に取り、加藤遊馬の携帯に電話する。

「……おい、おい！　出ろよ！　何やっているんだよ！」

しかし非情にも、プルル、プルル、と呼び出し音が鳴り響くだけだった。

「くっそ……聞きたいことが山ほどあるのに……」

もう一度コール。

……出ない。

更にもう一度。

……出ない。

「……………ばっか野郎」

加藤遊馬は商店街を走っていた。正確には、ある人物を探していた。

「良太くん、一体どこに行ったんだ！？」

遊馬はディスターバー狂瀾怒涛との戦いのため、とある事情（と言っても、ただ子供が傷つ

くのを遊馬が見たくなかっただけなのだが）により解析不能である佐伯良太を

特殊な部屋に閉じ込めていた。だが良太は脱走。生憎、良太は携帯電話を持つ

ていない。親に電話しても遊馬が不審に思われるだけ。要するに、何にも頼らず、ひたすら搜索しなければならないという訳だ。そのため遊馬に携帯電話は

不要だったの、真人の期待を裏切るかのように、家に置いてきてしまったのだ。

「はあ、はあ、くっそ、どこだ、どこにいる！」

遊馬の体力は既に限界だった。しかしこんな商店街で倒れてしまつてはいろんな人に迷惑をかけるし、後々面倒だ。一先ず少し休憩のため歩くことにした。

「本当に、どこ行つたんだろう。行動が読めない。……くっそ。どこなんだよ………ばっか野郎」

東京都内のある大学には、教授と、そして狂瀾怒涛デイスターバーがいた。

「どうだったかね」

デイスターバー

狂瀾怒涛はまさにボロボロの状態だった。普通なら余裕でこなせる仕事とは比べ物にならない程、体力を使い、またダメージも受けた。

「さあな。今はそれどこじゃねえ」

「ん、何をするのかね？」

デイスターバー

しかし、それでも狂瀾怒涛はあの狂った笑いを起こす。まるで自分の欲しいものが見つかった時のように。

「決まつてるだろ……あのクソガキを捕まえて、そして……ぐふ、ぐふふ、あはは、ハッハッハッ、アッハッハッハッハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！……ぜつつつつつてえにぶち殺すッ！！」

佐伯良太はある場所へ向かつていた。

（良かった、全員が生き返った。けど、狂瀾怒涛デイスターバーを始末できなかった）

実は、電磁誘導によつて得られた無限のエネルギーを上手く使うことができ、結果的に亜世界で死んだ人間が蘇つたのだ。但し、それは亜世界だったからであつて、決して現実世界で同じようにいく保障など無い。また、亜世界が消えてしまった。元々あるはずのない世界だから消えたところでどうなるという話でもあるのだが、少なくとも良太にとつて亜世界は、同世代の子供たちと遊べる唯一の場所であり、楽しみでもあつた。いくらみんなが助けられたからと言って、みんながあんなことになつてしまつては素直に喜ぶことも出来なかつた。（にしても、どうも感情とかを最適化すると喋り方とか変な感じになるんだよなあ……やり方間違えたかな）

デイスターバー

良太は子供であるが故に、狂瀾怒涛や遊馬よりも脳が発達しておらず、彼らほどブレインエネルギーを使うことが出来ない。そこで良太はブレインエネルギーで自身を最適化、つまりエネルギー生成の際のあらゆる無駄を省いているのだ。

（さてと……今度こそ最後だよ、狂瀾怒涛デイスターバー。じゃあ……最適化、開始）

目の前には東京都内のある大学。そしてそこに狂瀾怒涛デイスターバーはいる。

「目標を探索。……地下一階の第十三研究室にN極の反応。攻撃を開始」

それぞれの思いが交錯する中、亜世界ではなく、今度は現実世界で、戦いの続きが始まろうとしていた。

あとがき

はじめまして、新道知樹と申します。文芸部に入部してから半年も経っていません。まだまだ幼稚な文章しか書けない未熟な一年坊です。故に中二病みたいな名前を決めてしまいます（因みに、ディスターバーという言葉はこの世に存在しません。また、ジャンケンのくだりは実話です）。小説の難しさを痛感する今日この頃、いえ、テスト前日です。部活を優先するなんて、えらい！と言ってくだされば大変元氣が出ます。ええ、追試になっても胸を張れます。

この小説を書くため、でもありますが文芸部員として先輩方の作品を読ませていただいたのですが、レベルが高くてやる気が粉碎されそうになりました。しかし、なんとかここまで書くことが出来ました。出来はともかく。

さてこのあとがきですが、私はあることを信条としています。それは、
「作者が最後に残すのはあとがきではなく、感動だ」

というものです。すいません、調子に乗りました。でも言ってみたかったので私はとても満足です。一体何様でしょう。

えゝ最後に、ここまで読んでくださってありがとうございました。次に執筆するときはもつと上達しているよう精一杯頑張りますので、その時は是非また読んでいただければと思います。

それでは、さようなら。

……早く禁書二期が見たいです。

ホウカゴノテイオー

「たちでも新入生が来たようだ。」

47 / 108

の担任になつた、隅居だ。下の名前なんぞ知らなくて、自己紹介をしよう。三十四歳で、こ
に勤めて十三年目。百七十センチ五十二キロ、
右利き。彼女はない。実家は神社だ。質問・
ツッコみは受け付けないぞ。」
なんがする。この先生は。俺の常識を覆され
た。文は気に入る。こんな自己紹介ってありかよ。
洋文は「せんせー。なんで遅れたんですか？」
「あ、あ？ 質問は受け付けないうことと答えろ
が。やる。だ、特別に入学祝いという事で答えろ
て。文がどこの穴か、つづいてよく聞け。」
洋文が「ぼじつに、素直なのか、バカなの
を。かっぼじつに、先生。いいですよ。」
耳の掃除を終えた洋文が、間延びした声で言
う。「う。終わったか？ 正直言いたくないんだが、聞
きたい。：「正直言いたくないんだが、聞
き聞きたい。：「正直言いたくないんだが、聞
先生は。声を遮つて洋文が言った。
「はあ。仕方ないな。トイレだよ。腹の調
子が悪いんだ。とこで、お前の名は。」
「椎名です。とこで、お前の名は。」
洋文が笑っているから答える。さっきの俺の言葉
に。当たっているから笑うことないだろう。

「マジャッ少し血の気が引いた顔で聞く。」
「洋文が少し。」
「偶居先生が無言の笑顔。コワイ。洋文はと言
うところ、青ざめて入る。前途多難だ。入学式行
くと、青ざめて入る。前途多難だ。入学式行
くぞいてるな。よしよし。じゃあ、入学式行
既真顔に戻って。長髪がいい、って何？ 高校
生の始まりだ。」

――過去――

「夏文がこんな事を言い出したのは、五年前の
急にどうしたんだよ。ギターだなんて。」
「プールのから帰ったとき、ギター弾いて
た男がいたんだ。そいつが一曲弾くと、周
りの人がたが小銭をそいつの方に投げ、い
だ。七千円位はあったかと思つてさ。」
「小遣い稼ぎにうらないかと思つてさ。」
「ふみん。良さそうないかと思つてさ。」
「俺とみるか。じゃあ、二時間後にまたここに頼
つた物の九割五分は手に入りの金がある。ね、
つたのは、九割五分は手に入りの金がある。ね、
親父たちは話してみたいかな。こんな訳で、
ギタ―を買って何にしようか？」
「分かんないよ。おもしろそうだから。」
「で、欲しんだ？ 食べると思つてねえ。な」

「洋文とバンドをやるんだ。バンドといえば、
ギタ―とバンド。五万あれば足りるか？」
「ありか。五万あれば足りるか？」
「今考えてみると、十歳の子供に五万円も与え
る親って、かなり変わつていいると思う。」
「二時間後、洋文と結果を報告しあつた。」
「洋文はどうだった？ 好きにしろつてよ。伸二は？」
「八万もあつた。まあ、いいものは買えるだろ。」
「俺たちの住む地区には楽器屋がなかったから
だ。自転車をすっ飛ばして隣の地区まで十五分。
楽器屋を探して三千里、まではいかないもの
の二十分に近くつた。灯台も暗し。」
「初め、知つたとき、灯台も暗し。」
「て、潰れていて悪かつたんだ。かなりボロつち
店主のしきオジサンが言う。」
「げ。坊主の地文だと思つて、実は
口に出して、冷やかしながら帰つてくれ。」
「で、何の用だ？ 冷やかしながら帰つてくれ。」
「ん、すみません。えっと、ギターが欲しい
ー見たとこ、初心者だ。これなんかどうだ？
背丈が大きく、初心者だ。これなんかどうだ？
オジサンの一本のギターを俺に見せた。デザ
インのほな、ウロウロしている。」

車に縛ったりしての楽器屋からの帰り道の
と。洋文に聞いてみる。何だ？」
「べース？何それ？」
こいつも知らない。なんだか分からな
いもの。を値切ろうとしてたのか。解
釈によつては勇者だ。と。サンの話だ
と、お前の楽器のこ
とらしいぞ。形が似たようなモンだ
から、たい
して変わらないだろ。」
「それもある。一緒にウチで弾いて
みよ
うぜ。」俺達はまるで違つていた。
二人で愕然とすること。

髪の新入生全員が怯えている。金縛りに遭ったようだ。
分程度の入学式が終わっていた。在校生入場。
「あれより、対面式を始めます。」
先輩達が続々と講堂に入ってくるが、みんな
「マルガリータ開始。」
その言葉と同時に先輩達が動き出す。先輩達
はいつの間にかロープやバリカンを手にしてい
る。やばい事になるのは本気で分かっている。
新しい体が出来ない。金縛りに遭ったようだ。
新入生全員が怯えている。金縛りに遭ったようだ。
来上りが付いていく。逃げないよう足でロープを
縛り付けていく。逃げていないように足をロープ

さっさと帰って練習しようぜ。」
文化祭まで
あといか月。焼けが広がっているかな。

「――ゴーン。――現在三――」

「ん？こはどこだ？ああ、寮生活してるんだつたつけうさいよ。鐘の音がうるさい騒いでんの。」「――だいて、朝の音からいんどーあゝあ、起床の鐘だ。もっと寝たいなあ。」「食二度寝しようとする洋文を叩き起こして、『おまかせ』しかない。ある意味、メニューは見えてラズ密な計算から、それぞれのメニュートをグラム単位で決められている。だから残り間食は決して許されない。だから残ら爪楊枝をくわえて談笑、なんてことは絶対にできないけど。もとと爪楊枝なんてくわえないと思うけど。授業が始まった。高校最初の授業は理科だった。法律上、大和学院も高校にあたるため、俺と数学や英語も履修しなければならぬ。俺と分なので助かる。午後の授業は全て仏教関係。それで初日にも関わらず、いきなり読経を

「格ノ人來てな付だるる数い俺ねザノで「ヒや「がし洋でチ
藤谷、か、つ、た、よ、握、手、す、る、洗、脳、さ、れ、や、す、い、性
「リ、と、が、つ、ち、あ、よ、ろ、し、く、な、」
「そ、う、か、？、じ、や、あ、よ、ろ、し、く、な、」
「で、や、ん、だ、ど、う、せ、な、ら、ギ、タ、ー、と、ボ、ー、カ、ル、一
「大、丈、夫、だ、よ、の、声、を、聞、い、て、ビ、ビ、っ、と
「や、る、か、」
「俺、ギ、タ、ー、は、で、き、る、が、自、信、を、つ、け、も
「藤、谷、の、不、安、が、つ、て、る、」
「だ、め、だ、こ、り、や、こ、う、な、つ、て、る、時、の、洋、文、は、手、が
「付、け、ら、れ、な、い、も、う、ザ、ボ、ー、ズ、で、も、い、い、か、」
「る、ん、だ、ぞ、」
「掛、詞、だ、よ、に、掛、詞、な、か、な、洒、落、て
「の、言、っ、て、だ、伸、二、の、坊、主、に、も、な、つ、て
「い、何、」
「俺、が、文、句、を、言、っ、て、み、る、し、か、し、洋、文、は、手、強
「ね、？、」
「ザ、洋、文、の、ボ、ー、ズ、の、結、成、だ、！、」
「ノ、リ、が、歌、つ、て、あ、い、い、な、ら、が、ん、ば、る、よ、伸、二、が、ギ、タ、ー、
「で、も、僕、も、い、い、い、人、が、い、る、と、思、う、ん、だ、け、ど、
「ヒ、ロ、キ、チ、も、言、う、の、」
「や、あ、い、い、ん、か、で、い、い、の、か、い、そ、れ、で、何、を、す、り
「が、言、う、」
「し、か、し、二、人、は、洗、脳、さ、れ、や、す、い、ら、し、い、ノ、リ
「洋、文、が、言、つ、て、も、全、く、自、信、は、持、て、な、い、よ、な、あ、
「で、き、る、！、俺、達、と、バ、ン、ド、や、ろ、う、ぜ、！、お、前、ら、な、ら、絶、對、

何もないんだぞ。家から取ってきたいんですけ
 ど、次の休みみん
 くん、行かせんよ。ね？」
 お帰った。だ、あ、特例だから、う。
 ぐ、取りつて、ここ、い、ござい、ます。
 日、に、あ、つ、て、き、ま、す。
 文、が、い、る、だ、ろ、う、か。
 前途多難な気が
 結成された。
 洋

55 / 108

「そ、普通じゃあ、俺もそこ受けるかな。今
「さ、でも、大事な話なんだから、ちゃんと親と
「話しかけてから決めよう。」「あ、」
「俺が立ち上がったその時、おぼさんが入って
「き、あた、シンちゃん。もう帰るの？もっとゆ
「つ、大丈夫です。」「言、う、こと、だけ、言、っ、た、ら、帰、る
「や、つ、も、大、丈、夫、だ、っ、て、お、ぼ、さん、は、タイ、ミ、ン、グ、が、悪、い。
「た、家、に、帰、っ、て、お、ぼ、さん、は、タイ、ミ、ン、グ、が、悪、い。
「の、う、や、十、二、月、二、十、四、日、大、和、学、院、の、受、験、日、だ、と、ど
「本、当、事、で、毎、年、こ、の、日、を、リ、ス、マ、ス、に、し、て、い、る、し、な、い、
「い、か、？、三、月、下、旬、の、三、年、生、を、送、る、会、や、ら、卒、業、式、の、謝
「恩、日、が、近、づ、い、て、い、る、そ、え、な、中、戸、内、海、向、か、
「楽、器、屋、へ、向、か、い、て、い、る、そ、え、な、中、戸、内、海、向、か、
「ち、込、み、を、禁、じ、ら、れ、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「て、お、こ、ん、に、ち、は、し、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「ン、お、は、い、だ、君、達、か、。」「オ、ジ、サン、に、預、か、
「高、校、が、決、ま、っ、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「ほ、う、に、決、ま、っ、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「言、い、に、決、ま、っ、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「そ、う、い、に、決、ま、っ、た、ら、オ、ジ、サン、に、預、か、
「る、で、す、け、な、い、く、れ、た、か、い、や、な、い、か、わ、ざ、わ
「器、の、す、か、い、や、な、い、か、わ、ざ、わ
「持、ち、込、み、は、禁、じ、ら、れ、て、あ、

「い、る、ん、で、す、だ、か、ら、俺、達、が、戻、っ、て、く、る、ま、で
「預、か、つ、て、く、だ、さ、い、」
「た、時、に、さ、く、使、え、る、よ、う、メ、ン、テ、は、ち、ゃ、ん、と、し、き
「く、あ、り、な、い、と、誰、か、入、っ、て、き、た、誰、だ、？
「達、だ、ん、だ、の、僕、の、レ、ー、ダ、ー、が、反、応、し、た、の、は、君
「社、長、が、入、っ、て、き、た、初、め、で、会、っ、た、時、か、ら、四、年
「半、ぶ、り、の、再、会、だ、ね、今、度、で、何、年、生、に、な、る、ん、だ
「い、？、高、一、で、す、。」「瀬、戸、内、海、の、学、校、に、行、く、ジ、サン、に、
「そ、こ、は、楽、器、を、持、っ、て、け、な、い、の、で、オ、ジ、サン、に、
「預、か、つ、て、お、ぼ、さん、に、オ、ジ、サン、に、
「別、れ、だ、ね、。」「エ、ア、ギ、タ、ー、は、何、器、か、ら、い、ば、し、の、お
「練、習、は、欠、か、し、エ、ア、ギ、タ、ー、は、何、器、か、ら、い、ば、し、の、お
「ん、分、か、つ、て、ま、し、や、あ、俺、に、は、ギ、タ、ー、し、か、あ、り、ま、せ
「店、を、出、る、と、し、た、と、こ、ろ、で、オ、ジ、サン、に、呼、び
「止、め、ら、れ、る、と、し、た、と、こ、ろ、で、オ、ジ、サン、に、呼、び
「じ、や、な、い、か、ダ、メ、だ、か、ら、簡、易、練、習、道、具、な、ら、大、丈、夫
「を、発、つ、の、は、い、つ、だ、い、？
「三、日、後、で、出、発、前、に、こ、こ、に、寄、っ、て、く、れ、。、そ、の
「と、き、に、あ、う、出、発、前、に、こ、こ、に、寄、っ、て、く、れ、。、そ、の
「楽、器、屋、に、行、っ、た、。、あ、と、五、分、だ、け、待、っ、て、く、れ、な
「い、ら、っ、し、や、い、。、あ、と、五、分、だ、け、待、っ、て、く、れ、な

棟夏休みに現在四
かで猛練習をた、ザ
は思い、通りに進んで、
よそし。夏休みがわ
追われ。普通授業に
二時限を仏教の授業に充て、午後は祭すべ、の

突来い「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
きた。俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を

「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を

「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を

「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を

「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を
「俺達一誰しにも分りゃしない。自分道を

この幕が開いていく。まばゆい光が目に入っている。この光は、ボーズの未来を暗示していたのかもしれない。

あの文化祭から八年後。ザ・ボーズというバンドは、事務所の所属バンドとして活動をして、社長の事務所所属バンドとして活動をして、いる。袈裟姿に坊主頭の四人組ロックバンドというギヤップが話題を呼び、その人気は国内にとどまらず、世界中に広がった。

人気の高い、世界に広がった。噂の流れた、龍紋寺正太郎は前代未聞の高支持率を得て、総理の座に二十年居座った。ざ・ぼらずの人気の日本全国仏教徒数は増加し、龍紋寺の一日本全国仏教徒政策は思惑通りに進んでいる。龍紋寺正太郎の真の目的は、そして、ざ・ぼらず一色となった地球は龍紋寺正太郎に征服されてしまうのだろうか……

この話は当然のごとくフィクションでございます。私に未来予知能力なんぞ遺伝子に組み込まれておりません。だから、将来にこのようなことが起きても単なる奇跡ですし、起こらなくても作者の知ったこっちゃありません。作中の団体、人物、学校は九割九分存在しません。それでは、あとがきをどうぞ。

いませ。

「ネタをください。」

今、回も、友人からでした。が、ネタがないので、す（
て、ほしい友人からなネタをあれば、まいす）の書い
高文芸部室までよろしく書きお願ひします。（
そのうな物なら、本堂に書ききたら：：何だろ、うさ？）
来れば、奇跡です。複数に来たら：：それでは、さ（
よおふながら。）

一 クイズ研究会

司会「さあ始めましたクイズ研究会主催クイズ大会、『クイズウツターカ』！ 数々のクイズを早押しで答えて最も正答数の多かった人が優勝というシンプルなルールのクイズです」

パチパチパチ。

司会「なお、このクイズ大会に集まってくれた参加者は三名です」

青田「なんか少ない！」

司会「おっと、回答者の青田さんが最初からテンション高めで来てますね。司会の進行を無視しての自己紹介はRPGですよ？」

青田「それを言うならNGだよ！」

司会「さて、楽しいゲストの皆さまをご紹介します」

青田「しないの!？」

司会「それではまず第一問！」

第一問 「万物の根源は水である」と唱えた哲学者は誰でしょう。

青田（いきなり問題始まったが……まあいい。で、答えただけ……）

これはタレスだな。しかし、早押しボタンはどこに？

赤山「ピンポン！」

司会「赤山さん速い！」

青田（口で言った！ 今「ピンポン」って口で言ったぞ！）

司会「さあ赤山さん答えをどうぞ！」

赤山「レタス！」

司会「惜しい！」

青田（早押しなのに「惜しい」って言っちゃったよ司会……）

緑川「ピンポン！」

司会「回答権が緑山さんに移りました！ さあ答えは!？」

青田（……回答するには「ピンポン」って言う必要があるのか？）

緑川「レタス！」

青田（今目の前で間違えた奴と同じ答えだ!？）

司会「さあ、残るは青田さんですが……」

青田「……ピンポン。タレス」

司会「青田さん大正解！ これは波乱の幕開けだ！」

青田（一問答えたただけなのに……）

司会「次の問題！」

第二問 「テーブルテニス」を日本語で言うとは何？

青田「ピンポン！」

赤山「ピンポン！」

緑川「ピンポン！」

司会「全員不正解。『ピンポン』ではなく『卓球』でした」

青田「はめられた！ 出題者汚いさすが出題者汚い！」

司会「あ、言い忘れました。奇数番号の問題では『ピンポン』と言

う必要がありますが、偶数の場合は要りません」

青田「そうなの？ 変なルールだな」

司会「変とか、青田さんに言われたくないですねwww」

青田「司会が暴言吐いたんですけど!？」

司会「次の問題！」

第三・一問 炭素の化学式を答えなさい。

青田（奇数でも偶数でもねえ！）

司会「さあ、どうでしょうか？」

青田（回答権を得るにはどうすれば……？）

赤山「タタカナムフ！」

司会「赤山さんが回答権を得た！」

青田（タタカナムフ！ タタカナムフだった！）

司会「さあ、最近彼女に振られて傷心気味の赤山さん、答えをどう

ぞ！」

青田（なんか赤山が秘密暴露されてる！）

赤山「……C……ぐすん……」

司会「正解！ 赤山さんと青田さん、同点！」

青田（赤山泣いてるよ！ 司会がゲスト泣かせた！）

司会「次の問題！」

第五問 太陽系で最も大きい惑星は木星です。

青田（そしてクイズですらなくなった!? 第四問どこ行った!?）

司会「さあ、この難問にどう答えるのでしょうか？」

赤山「はい、そうです」

司会「赤山さん正解！」

青田（……つつこむの面倒になってきた……）

司会「さあアツくなってきました！ スタッフ冷房つけて！」

青田（そっちの「アツい」かい……てやかましいわ）

司会「クイズ全問終了！」

青田「今アツくなってきたって言ったばかりなのに!？」

司会「今回の優勝者は青田さんでした！」

青田「赤山だよ！ 俺一問しか答えてないよ！」

司会「終わり！」

青田「司会が強引に終わらせた！」

こんなクイズ研究会は嫌だ。

二 メイド喫茶

池面「なあ、メイド喫茶入ろうぜ」

青田「ええー……気が進まねえ……」

池面「いいからいいから、ほら入ろうぜ」

青田「はいはい」

からんからん。

店員「お帰りくださいませご主人様！」

青田「入店拒否された!？」

池面「違う違う、こういう喫茶なの。ツンツン喫茶」

青田「俺の知らない世界がここにある……」

店員「ほら、座るんならさつさとその席座りなさいよ」

池面「はい」

店員「注文は何？ 時間ないんだから早く言ってよね」

池面「ラブラブオムライス！」

青田「そこはかとなく犯罪の匂いがするオムライスだ」

店員「あともう一人は何食べるの？」

青田「あ、俺は飲み物だけで……」

店員「あっそ。飲み物は何にするのよ」

青田「アイスコーヒーで」

池面「俺はラブラブジュース」

青田「……こいつ……」

店員「じゃあ出来るまで待ってなさい！ 悪いけど他の客優先だから遅くなるからね！」

五分後

店員「はい、オムライスと飲み物」

青田「なんか割と早く届いた気がするけど……」

店員「あ、あんたにだけ早く届けたわけじゃないんだからね!？」

青田「……これ、仕事でやってるんだよね……」

店員「……ラブラブオムライス、ケチャップで文字書いてあげる」

池面「じゃあ、愛してるって書いて」

店員「し、仕方ないわね！ 書いてあげるわ！」

書いてもらった。

青田「本当に書くのか……」

池面「よおっし、頂きま……」

??「あんた何やってんの？」

池面「ん？」

青田（読者に状況を説明すると、池面の横に一人の女性客が立っている）

??「……」

青田「おい池面、どうしてお前そんなに冷や汗を……」

池面「……」

青田「……あれ？ この人、確か池面の彼女だったよね……」

彼女「……あんた、何メイド喫茶入ってんの？」

池面「いやこれはこいつが強引に」

青田「え？ 逆だろ？ お前が無理やり連れて来たんだろ」

池面「お前そこは空気読めよ！」

彼女「へえ、あんたが強引にねえ……」

池面「いやあの、これには深いわけが……」

彼女「メイドさん相手に鼻の下伸ばして、その上、オムライスにケチャップで『愛してる』なんて書いてもらって……」

池面「違う、これは！」

彼女「あんた、ちよっとこっち来なさい」

池面「わ、やめ、俺をどこに連れていく気だ！ 青田助けろ！」

青田「ドナドナドーナードーナー」

池面「裏切り者おおおおおおおお……」

青田（池面が店の裏に引きずられていく）

ドカボコグチョデクシドグバキメギドゴバッ

青田（池面が引きずられて戻って来た）

彼女「ごめんね、ちよっとこいつ寝ちゃったみたい！」

青田「あ、はい……」（追求するのはよしとおこう）

彼女「じゃ、あたしはこれで！」

青田「はい、さようなら」

池面の彼女が店を出た。

青田「……池面、生きてるか？」

……………

青田「へんじがない ただのしかばねのようだ」

池面「……勝手に……殺すな……ガクッ……」

青田「今死んだな」

池面「……女つて……恐い……」

青田（満身創痍とはこのことだ）

池面「……ああ、俺は変態だ……」

青田（そして何か言いだした）

池面「……変態で何が悪い……」

青田（犯罪者予備軍）

池面「……俺の屍を越えて行け……」

青田「池面、走馬灯を見ているところ申し訳ないが」

池面「……？」

青田「あそこ、すつごくかわいい女の子がいる」

池面「マジで!? かわいい女の子どこ!？」

彼女「……」（※補足 彼女は一度店を出した後戻って来た）

池面「……」

彼女「……懲りてないようね……」

こうして、池面は彼女から二度目の制裁を受けた。

なんでこんな池面に彼女がいるのか、不思議でならない。

三 ファーストフード店

青田（結局池面のせいで昼飯を食べ損ねた。ファーストフードでも食べよう）

ウーイーン。

店員「お次のお客様こちらへどうぞ」

青田「あ、はい」

店員「ご注文はいかがですか？」

青田「そりや注文するよ！ 俺何のために来たんだよ！」

店員「ハンバーガーが一点」

青田「勝手に注文された!？」

店員「それとも月見バーガーにしますか？」

青田「あ、そうですね。お願いします」

店員「大変申し訳ありません、月見バーガーは季節限定となっております」

青田「なら何故勧めた!？」

店員「何か他の物をご注文ください」

青田「えーと……」

商品一覧を見る。

・ハンバーガー 百円

・チーズバーガー 百二十円

・フィッシュフライバーガー 二百円

青田（店のメニューはまとものようだ）

・ライスバーガー 各種百五十円

・オニオンバーガー 百八十円

・ゴーヤバーガー 百八十円

青田（……ん？）

・テラバーガー 三百円

・オムライスバーガー 三百円

・ぬ 百七十三円

青田（メニューも狂ってやがる！ しかもなんだよ『ぬ』って！ メ

ニューの中身が分からん上に値段も中途半端だ！）

店員「ご注文はさっさとしてください」

青田（店員態度悪っ！）

店員「ぶぶづけ食べますか？」

青田（なんか京都風に出て行けって言われた!）

店員「お客様、ご注文は……」

青田「……ハンバーガーとコーラ」

店員「お持ち帰りですか？」

青田「いえ、ここで頂きます」

店員「えっ……お、お客さまったら大胆……」

青田「その『頂く』じゃねえよ！」

白子「お姉さまに手を出すとは百年早いのですわ！」

青田「なんか新キャラ出て来た!？」

白子「お姉さまはわたくしのお姉さんなんですの！」

店員「し、白子……」

青田（『しらこ』と読むのか『しろこ』と読むのか分からない）

白子「そのあなた！ 何者ですの!？」

青田「俺は青田だけど……。君、誰？」

白子「黒井白子ですの！」

青田（何故だろう。筆者が著作権のギリギリラインを歩いている気がしてならない）

がしてならない）

店員「店長、私体調悪いんで早退します！」

店長「なん……だと……?」

白子「ああつ、お姉さま！ 白子から逃げないでくださいまし！」

店員「だが断る」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

青田（店員と白子が壮大な追いかっこを始めた）

ウーン。

青田（新しい客が入って来た。女の子だ）

店長「!!!!!!」

店長に電撃走る。

店長「伝説の少女Bシフトだあああああ！」

店員一同「オオオオオッ！」

青田（もう俺はつつこまないことにした）

説明しよう！ たった今この店に入って来た少女は知る人ぞ知る

有名人！ 今までに彼女が食べて美味しいと言った商品は全て大ヒ

ットを記録している！ ヒット商品になるかどうかは彼女が美味し

いと言うかどうかに掛かってといっても過言ではない！

そして、そんな彼女をファーストフード業界では『伝説の少女B』

と呼ばれているのだ！

青田（地の文でどうでもいい解説をして文字数を稼ぐ筆者）

店長「今季の新作、ゴッドバーガーはいかがですか!？」

少女「あ、じゃあ一つください」

店長「かしこまりましたああああああつ！」

青田（暑苦しい）

店長「ゴッドバーガー一丁あがりっ！」

青田（凄い早い）

店長「さあ、お召し上がりください！」

少女「はい」

少女食事中……。

店長「お味はっ！ どうですかっ！」

少女「まずい」

その次の日、その店は閉まっていた。

四 告白

女子「あ、あの青田先輩っ！」

青田「ん？」

女子「その、これ受け取ってください！」

青田はラブレターを手に入れた！

青田「え？ こ、これって……」

女子「あ、あの、お返事待ってますっ！」

たったったった……。

青田「あのコは確か学園のアイドル……」

そのコに告白された。

青田（つまりそれって……）

青田は考える。

青田「俺が新世界の神だ」

今回はうざい青田をお楽しみください。

青田「でさー、俺ラブレター貰っちゃったわけよ」

池面「へー、そう」（何度同じ話するつもりだよ……）

青田「いやあ、ほんつとうに、可愛いコなんだよ！」

池面「へー、そう」（俺の彼女の方が可愛いし）

青田「まさかなあ、俺がなあ！」

池面「そうだな」（俺の彼女は暴力的だけど可愛いし）

青田「なんつーの？ 俺、モテ期到来？ なんちって！」

池面「よかったな」（あいつは嫉妬するところがまた可愛いし）

青田「なーっはっはっはっは！」

池面「はっはっは」（青田きもい）

青田「いやあ、この幸せをお前にも分けてやりたいよ」

池面「どうも」（俺はお前よりずっと幸せだよ）

青田（あー、池面悔しいんだろうなあ。俺が学園のアイドルなのに

池面は見た目が美人なだけの暴力的な幼馴染で！）

池面（実はラブレターの相手は青田の兄なんだけど黙っておこう）

青田「ふっふっふ、あはあはあはあは！ むふふ！」

池面（ラブレターの送り主は青田を経由して青田兄に届けたかった

んだろうけど、『青田先輩へ』としか書かなかったから青田が誤解したんだろうな。てか青田うぜえ）

青田「いやあ、子供は三人ぐらい欲しいなあ」

池面（誰もきいてねえよ）

青田「なあ、池面？ 俺、兄貴越えちゃったよ！」

池面（正確には越えられたわけだが）

青田「なあ、お前の彼女なんていう名前だっけ？」

五 緊急会議

とある部屋。

窓に下ろされた黒い帳が陽光を遮り、ほぼ闇と言って差し支えない空間の中、一本の蠟燭を取り囲むように並んでいる男達。

重苦しさを感ぜさせる静寂の中、男達の一人が重い口を開いた。

青田「皆、今日は集まった理由は分かっているな？」

全員「勿論」

青田「よろしい。では、これを見てもらおう」

一人の高校生が一冊のノートを取り出した。

青田「……これが、件の日記……」

全員「……」

青田「池面と池面の彼女の交換日記だ」

一日目（彼女の番）

私の池面勇人へ

交換日記なんて初めてだけど緊張するわね。

幼馴染だからあんなことは大方知ってるはずんだけど、やっぱりこういうのは流石にあたしでもドキドキしちゃうわ。

……初日だから何書けばいいのか分かんない。もう終わりっ！

青田「激甘だな」

赤山「ラブラブだ」

緑川「リア充爆発しろ」

二日目（池面勇人の番）

明美（※池面の彼女の名前）へ

確かに何書けばいいのか分からないのは良く分かるけど、お前がそんな純情乙女みたいな日記書いても俺には分かるか

（※何故かここに血の跡が付着している）

明美は乙女です。純情です。ごめんなさい。

青田「……どう見る？」

赤山「日記を書いていた池面が途中で彼女が乱入したと見た」

青田「別にラブラブじゃなさそうだな」

緑川「このやりとりは仲のいい恋人同士じゃないとできないぞ」

青田「やっぱり池面消えろ」

三日目（明美の番）

純情乙女、明美さんの愛する勇人へ

今日なんでメイド喫茶で『愛してる』なんて書いてもらってたのか、明日また聞かせてもらうからね。

青田（……これ、あの日の日記か）

赤山「うーん、これは浮気っぽいしラブラブとは……」

緑川「彼氏が浮気しかけたのに最終的には赦してあげている彼女」

青田「池面赦すまじ！」

四日目（池面の番）

明美へ

俺、明美のメイド姿が見てみたいなあ。

青田「池面がなんか言い出したが……」

赤山「……」

五日目（明美の番）

池面へ

あたしのメイド服？

あんたの部屋行ってあんたにだけ見せるならいいけど？

あ、べ、別にあんたの好きな服着てあんたにもっと好きになって

ほしいとかじゃないんだからねっ!? 勘違いしないでよね!

青田「ツンデレだな」

赤山「ツンデレだ」

緑川「さっきからお前ら片言なのはなぜ？」

六日目（池面の番）

明美へ。

明美のメイド服、すごく可愛かった。

やっぱり明美が彼女でよかった。

俺は、明美を一生幸せにする。

七日目（明美の番）

勇人へ

そういうことはちゃんと場所とムードを作ってから言うものよ。

ちよつとメイド服見たぐらいで軽々しく言うんじゃないわよ。

馬鹿。

……。

……。

……。

……待つてるからね？

青田「池面が 羨ましくて もう嫌だ」

赤山「涙拭けよ……」

緑川「てか、最初の方と比べてギャグが減っているのはなぜ？」

青田「ん？ そりゃ、ネタぎ……」

赤山「言うなっ！」

あとがき

どうも、日高吞です。

文化祭に出す作品にこんなものを書く人間は文芸部で恐らくただ一人でしょう。

自分が下手に真面目に書くと却ってつまらないと思ったのでこうしました。時間がなかったわけではありません。

すいません。時間がなかっただけです。

そして、皆さんすでにお気づきのことかと思いますが……。

この作品、とても短い。

あとがき入れて十一ページしかないとかいう異例の短さ。

すごいですね。何がすごいのかは知りません。

なんかもうあとがきにも書くことがないっていう。

以上、日高吞でした。

夏の暑い日。

もう盆とはいえ、まだまだ暑さは残っている。

思えば里帰りするのは正月以来だろうか。

毎日書類やパソコンとばかり向き合っていると、心の余裕までなくなるらしい。最近では、食欲も減衰気味だった。

年をとった、と思う。

十八歳の時、上京してすぐのころは、やっと家から離れられると、心を躍らせていたものだった。

そして四年間の大学生活を経て、大手食料品メーカーに就職。

学校からも開放され、ようやく社会人の仲間入りだと思って期待していた。

しかし、誰もが口をそろえて言うように、現実甘いものではなかった。

指示通りに動くのではなく頭を使わなければならないし、失敗すれば上司に怒られる。

仕事が上手いかなければ残業もするし、人付き合が増えると気苦労も格段に増える。

始めのうちは新鮮さが勝っていたとはいえ、それも時間の問題

五年も経てば、倦怠感と疲労感に押しつぶされそうな毎日が、誰の目にも留まらない石ころのように、ただそこにあるだけになっていた。

ほとんど車の通らない田舎の道路を運転すること二時間ほど、僕は久しぶりの実家に帰ってきた。

「あら、和一や、帰ってきたのかい」

「ただいま、おばあちゃん」

家に着くとすぐ、祖母が迎えてくれた。

父と母は、もう五十を過ぎたというのに、まだ働いている。もつとも、この町では五十でも若い部類に入るのだが。

祖父は二年前に他界した。

太平洋戦争では、中国にいたらしく、その時の話をたくさん聞かされた。

「まあまあ、とにかくゆっくりしていきなさいな」

祖母がそう言って家の中に招いてくれた。

懐かしい香り、古びた家具。

九年ぶりの家の中は、昔と変わっていないように見えた。ひとまず荷物を自室に放り込み、墓参りに出かけた。

祖父の墓は、寺にはなく、家から歩いて二、三分のところにある。

自分もいつかこの墓に入るのだろうか、と考えてみたが、具体的な様子は浮かばなかった。

あたりには彼岸花が咲いているだけだった。

墓の掃除をして、持ってきた花を供える。

祖母が時々手入れをしているようで、墓の掃除にはたいした時間はかからなかった。

手を合わせて目を閉じる。

生前の祖父。老人とは思えないほど体力もあり、町の観光協会の副会長などしていたぐらいで、元気だと思っていた。

しかし、ある日突然倒れ、そのままぱたりと死んでしまった。

医者は脳卒中だと言った。

私が駆けつけたときにはもう体の水分が抜けてしわしわになり、小さくなっていた。

そして葬式が行われた。

火葬場で骨を拾った。

そのときはとても祖父が死んだなんて信じられなかった。

祖母や親戚のおじさんおばさんたちが泣いているのが、人事のように見えたものだった。

しかし、二年も経つと、流石に実感も湧く。

あのしやがれた声を聞くことはもうできないのだ。

「おじいちゃん……」

呟いてみても返事はなく、風が真つ赤な彼岸花を揺らすだけだった。

それから家に帰り、のんびりとすごした。

空を自由に飛びまわる蜻蛉。

透き通るほど青い空にぼつぼつと浮かぶ白い雲。

大輪の向日葵。

どれも東京では見られないものばかりだ。

改めて見ると、全然環境が違ふ。

上京したところは、こんなところで生活していけるのだろうか、とよく思った。それが今では、よくこんな何もないところで生活していたな、と思うのだから、歳月の力は恐ろしい。

夕方になると、父も母も帰ってきた。

「あら、お帰り、和一」

「よく帰ってきたなあ」

二人とも満面の笑みだった。

こちらも笑顔で、「ただいま」と応えた。

「待つてなさい、今夕飯の支度をするから」

そういつて母は台所に消えた。

自分で食事を作らなくて済むことがどれだけ楽なことか、今ならわかる。

父は成長した、と言うかもしれないが、自分ではなんとなく寂しさも感じていた。

「そろそろいい人でも見つかったか？」

「いや、仕事が忙しくてそれどころじゃないかな」

「なんだ、そうなのか：お前ももういい年なんだからそろそろ結婚してもいいんじゃないか？」

テレビドラマなんかで見たのと同じ台詞を自分が言われている。

そう考えると少しおかしかった。

「機会があれば、ね」

そういつて曖昧にごまかした。

こんな会話も一人暮らしでは味わえないので、新鮮に感じた。

何年か前にはしつこいと思っていたのに。

母が料理を運んできた。

家族団欒での楽しい夕食。

父も母も祖母も、終止笑顔だった。

僕もつられて笑顔になった。

そのまま夜も更けて行く。

流石の長旅で疲れていたもので、僕は早くに寝てしまった。

懐かしさに浸っていると気付けばその日は終わっている。

帰省一日目なんてものはそんなものなのかも知れない。

翌朝、起きてみると時計は10時半を指していた。よっぽど疲れがたまっていたんだろうか。

祖母は氣を使つて起こさないで置いてくれたらしい。

起きてみると父と母はすでに出勤。

祖母は畑仕事をしていた。

僕はテーブルの上の冷めた朝食を食べた。

冷めていてもおいしいのは、手作りだからだろうか。

食べ終えてから一休みしようと、横になる。

ぼーっとしているうちに、猛烈な眠氣に襲われ、そのまま寝てしまった。

古ぼけた写真のようなセピア色の風景。

そこに場違いなカラー写真のような自分。

先ほどの眠氣もあつたので、ここは夢の中だろう、と結論つけた。

あたりを見渡すと、ついさつきまで見ていたのと同じ景色。

「なんだろう、これは」

部屋から出てみると、そこには死んだはずの祖父がいた。

「おじいちゃん？」

「おお、和一か、お帰り」

「おじいちゃんもあの世から帰ってきたの？」

「そうなるの」

言いたいことはたくさんあつた気がする。

でも、そのひとかけらも今は浮かんてこなかった。

「あの世でも、元氣にしてた？」

ようやくの思いで、言葉を紡いだ。

「おう、怪我も病氣もせんし、戦時中の方がよっぽど恐ろしかったわい」

そういつて、白入れ歯を見せて、かっかっか、と笑った。

そこにいるのは、紛れもない祖父だった。

二年前に死んだときと、何も変わっていないかった。

「和一も元氣にしとったかの？」

「まあね」

實際元氣ではなかったが、そう答えておいた。

「そうかそうか」

祖父は目を細めた。

「おじいちゃん、あれから俺、出世したんだよ」

「偉くなったんか」

「うん」

「そうか…和一ももう一人前じゃな」

微笑ましそうに、ただちよつとだけ寂しそうに、祖父は笑った。

「わしのような老いぼれの出る幕はもうないかの」

「いつまでもおじいちゃんに頑張られたら俺のすることがなくなっちゃうよ」

「はっは、言うようになったの」

祖父と二人、笑いあった。

相変わらず世界はセピア色だったが、それも気にならなくなった。

それからしばらく祖父と話をした。

出世についての詳しい話。

まだ結婚はしていないこと。

他にもいろいろなことを話した。

一通り話すと、祖父と一緒に黙って縁側に行き、外を眺めた。

「ここらば変わらんの」

自分で思っていた以上に、このあたりの景色は変化していないらしい。

次に自分が来るときも、その後も、もしかしたら僕が死ぬまでこの景色は変わらないかもしれない。

「和一や」

唐突に、祖父がこちらを振り返って話しかけてきた。

「ええか、人間、無理をしたらよくないんじや」

「え？」

思わず、間の抜けた返事をしていた。

「わしに嘘はつけん」

きつと、祖父は最近僕が疲れ気味で、食欲も減っていることなどお見通しだったのだろう。

「死と隣あつとるとな、人間以外と無理をせんようになるんじや」

戦争中の体験談だろう。

「いつ死ぬかわからんと、人は毎日を楽しもうとする。そうするとどうすると思

う？」

「楽しみを求める？」

わからず、思った答えを口にした。

「逆じや。余裕がないとき、人はどうもせん。ただ飯を楽しみ、睡眠を楽しみ、いつも見える景色を眺めて楽しむんじや。それは最低限の生活を楽しむ、ということじやの。」

そして、死ぬなら自分の家で死にたいと願うんじや。」

僕には祖父が何を言いたいのか、具体的につかめなかった。

「つまり、人は生きていこうと思えば、動物並の生活でも生きていけるってことじや。」

わかるか？多くを望まなければ、人は幸福でいられるのじや。

そのために必要なのは、健康な心と体、そして心のよりどころじや。

お前はまだ結婚しとらんからの。しばらくはここが心のよりどころじや。

疲れたら、くじけそうになったら、ここにくればええ。

ここに来たら、縁側に座って、落ち着いて景色でも眺めるんじや。

そうすれば、楽になる。きつとお前が思っている以上に。

そうやって生きてきて死んだわしが言うんじや。間違いはない」

そういつて最後はまたかっかつか、と笑った。

「おじいちゃん…」

「帰ってきたら、わしの墓を掃除してくればええ。

それ以上はわしは望まん。

じやが、ここはお前の場所じや。

そして、ここではいつまでもお前はわしの孫じやし、ばあさんに馬鹿息子の和昭、それに明子さんもおる。

甘えたくなったら甘えればええ。

泣きたくなったら泣けばええ。

子供に戻りたくなったら、戻ってもええんじや」

会社を出るときに残してきた書類の山がたいしたことのないものに思えてきた。

心も軽くなった。

「そろそろお別れのようにじや。

来年の夏を楽しみにしとるぞ。

ばあさんもこっちにいないとええがな」

最後に冗談を言って、祖父は笑った。
記憶から消えなさそうな、そんな笑顔だった。
セピア色の世界が歪んでいく。

目を開けると、そこには元のカラーの世界があった。

外には昨日と同じ青い空に、白い雲。

空気は澄んでいて、深呼吸をすると、肺の中の濁った空気は空に溶け、新鮮な空気が肺を満たした。

仏壇に行くと、遺影の祖父が微笑んでいた。

座布団に正座し、線香に火をつけて立てる。

線香独特の香りに包まれて、僕は目を閉じた。

さまざまな思いが渦巻いている。

それは、嫌な種類の混沌ではなかった。

日本には、夏があり、盆がある。

今までは当たり前だと思っていたけど、それがとても素晴らしいことのように思えた。

「ありがとう、おじいちゃん」

呟いた言葉はふわりと浮かび、そして散った。

遺影の祖父が笑ったような気がした。

あとがき 改

どうも、はじめまして、もしくはお久しぶりです。

火のつかない白黒燐寸です。

前回ほどではないにせよ、今回も夜遅くまでキーを叩きました。

割と深夜のテンションです。いやっほう。

今回の作品はいかがだったでしょうか。

前回の表現86のほうの感想を部内で聞いたところ

「道徳の教科書みたいだね」といわれました。ううむ、なるほど。

今回もなんだかそんな感じですね。おかしいな、道徳教育がしたいわけではないのに(笑)

ちなみに作中の「和」君の読みは「かずひと」です。念のため。

さて、突然なんですけど、僕は今回の宇高祭を期に、文芸部をしばらく休部することにした。

『一冊の本を書くためには、百冊の本を読まなければならない』なんて言葉がありますが、この二回小説を書いてみて、その大変さを痛感しました。

今のところ、小説を書けそうにないので、もしかしたら次回の表現89の時には私の作品はないかもしれません。(え？誰も期待してない？)

そうすると、文芸部として形になる小説はこれで最後かもしれませんね。まあ、そのときはそのときということで。

ちなみに前回のSS云々の話はなしの方向で行きたいと思います。

理由？察してください。

後で手作ってついでいうのも大学行ったら(行けたら?)にしたいと思います。そのときはまた読んでくださるとありがたいです。

それでは皆さん、僕の拙作を読んでくださってありがとうございました。

時間がない。ボタンの掛け違いを無視して制服を着る。そのまま玄関へ直行。
「飯はいいや。……時間がない、時間がない！全速力で自転車を走らせる。」

「あーっ、もう完全に遅刻だ——！」

午後一時半の出来事である。

「遅い！明後日から文化祭で時間が無いってのに……」

二日後に迫った文化祭。俺と、今小言を呟いている僕の幼馴染、秋山風花はその実行委員のメンバーだ。僕が家で寝ている間に、学校ではまた厄介なことが起きたらしい。

「で、なにがあつたんだっけ？」

風花は無然とした表情のまま答え、それを僕に突きつけた。

「例の脅迫状が届いたの。毎年恒例のがね。」

ウチの高校は、毎年文化祭の前に脅迫状が届く。新聞の見出しの文字を切り取り、それを並べた、安いモノだが。八百人近い人数の生徒がいるんだ、その中に文化祭の存在を疎んじてる奴がいてもおかしい事じゃない。

「ほんと、迷惑しちゃう。こんな手紙一つですつと前から作ってきた文化祭が台無しになっちゃうんだよ……聞いてんの！？」

「聞いているよ。脅迫状への対応が面倒だっというんだろ？放つとけばいいじゃないか。」

心からそう思う。やりたくないこと、やりたいことなんて、一人一人違うに決まってるんだから。……それに、

「今回の脅迫状も、書いてあることは実行されてないんだろ？」

「うーん、そうなんだけど、もし万が一の事があつたら大変でしょ。」

そう、毎年恒例（いいことではないが）の脅迫状は『口だけ』のものだ。『天罰が下るだろう』とか『地獄の業火に身を焼かれることになる』とか、色々書いてはあるが、それらが実行されたことは一度もない。なら何のためにそんなものを作るのか、というと、風花のいうように、『万が一』を想定させるためのものなのだろう。

「あ、そっだ、今回のやつにはなんて書いてあつたんだい？」

風花の手から手紙を奪い、その内容に目を通す。

「何々……愚かなる役員どもへ。裁きをつけたくなければ、文化祭は取り止めにしろ。もしこれを無視して文化祭を開催しようとしたならば、文化祭前日、愚か者のうち一人に悪魔の裁きがかかるだろう……ねえ。」

「ちよつと、もう少しトーン落としてよ。一般生徒には知られちゃいけないんだから。」

随分ちやち、だな。前の『地獄の業火に焼かれる』然り、テレビ見過ぎの小学生が書いたような内容だ。

どうせ、今回の脅迫状も、中に書かれていることは実行されないだろう。……なにも起こらない方がいい。当たり前だ。でも、どこか期待してしまふ。……毎年。不謹慎なことだ。

放課後。僕が登校した一時半から行われていた作業は、今も続いている。僕は荷物運びを命じられ、色々入ったダンボールを、もともとあつた資料室に戻していた。

「あれ、九条くん。」

「……この声は……」

「霧咲先生……！どうかしたんですか？」

そこには、僕と風花のクラス担任である霧咲麗華先生の姿があつた。……今日も相変わらずお美しい……。

「ん、大変だなあ、と思つてね。平気？」

無言で頷く。首が千切れるぐらいに。

「そう、文化祭まであと二日、ね。頑張つてね。」

「は、はいっ！」

やつと口から出たのがこれ。はあ。自分で自分が嫌になった。うう、と首を振り、僕は再びダンボール運びを始めた。

「で、今何時？」

誰かが口にした。みんな何とかして口に住まいとしていたけれど、もう限界だったようだ。

「十時半……。」

代表して風花が伝え、へたり落ちた。それに触発され、まだ残っていた文化祭

とても素朴な吹き矢の筒(でいいのか)が落ちていた。僕が準備室に入る時は気がつかなかったけれど、その時からこれはドアのパッキン部に挟まっていたことになる。

「しかし、それだと……」

……あれこれ考えている間に、救急車が到着したようだ。考えたいことは残っているけれど、ここは霧咲先生の容体が気になる。

それにしても……今まで脅迫状の内容は実行されたことはなかったはずだ。なんで今回に限って……。まさか……確かめる方法は簡単だ。とりあえずやってみよう。

校舎中を駆けずり回った。目的の光景に出会うまで、そう時間はかからなかった。

「おい、いい加減吐いたらどうなんだよ……!」

「そんな、私、あんなことやつてないです……!」

大柄の男子生徒が、苛立たしげに一人の女子生徒に詰め寄っている。目当てのものではないかもしれないが、ここは入っていくべきだろう。

「否定しているのにそれを全く聞き入れないのはどうかと思うな、飯島。」

男子生徒の方——同級生の飯島雄介がこちらに目を向ける。さっきまでの威勢はどこへ行ったのか、飯島はかなり辛そうな表情をしていた。

「聞いてくれよ、九条。俺、俺さあ、警察に連れてかれるかもしれないんだ。……今回の事件の所為で。」

「脅迫状のこと、かい?」

はっとした顔で飯島はこちらを見る。凶星みたいだな。

「……そうだよ。文化祭実行委員に毎年脅迫状をおくってたのは、このおれさ。」

「何のために?」

「盛り上げようと思ったんだ。あの脅迫状の紙を水に浸したか?そうすると脅迫状の文字がはがれて、下から『文芸部よろしく!』の文字が出てくるんだよ。……」

「気付かなかったのか?」

心底不思議だ、なんて顔をするな。誰が気付くっていうんだ。

「ちゃんと伝えれば大丈夫だよ。……多分。で、その女子に詰問していたのはどうしてなんだよ。」

「朝、文芸部内で犯人探しをしたんだ。……その会議に出てこなかったんだ、こいつは。」

「君、名前は?」

「え、あ、如月、如月美里です。」

ふう、と息をつき、飯島に文化祭のパンフレットをつきつける。

「よく見てくれ。イラスト:如月美里って名前があるだろう?おまけにこの絵、かなり上手だ。……昨日も夜遅くまで描いてたんじゃないのか?」

如月さんはごくごく頷いた。

「確かに、良くできてるが……それが証拠とはかぎらないだろうが。」

「それを言い出したら切りがない。如月さんのいうことにも少しは耳を傾けてやれよ。可愛い後輩じゃないか。」

飯島はまだうん、と唸っていたが、一応納得したのか、如月さんに謝っていた。如月さんも安心したようだった。

さて、ちよつと回り道だったけど、目的は達成された。犯人が生徒で、脅迫状が三年目となる今年に、ついに犯行を実行に移したという可能性は否定されたわけだ。……にしても、さっき僕はかなりいいことを言ったな(自分で言うのもなんだが)。『相手の気持ちを考える』うん、これで僕の株が一つ上がったぞ。

相手の気持ち、か。……風花の事が気になった。確か、風花は先生に手伝いを頼んだ、と言っていた。その所為で先生が傷付けられた、とか考えてしまっているかもしれないな。

案の定、風花は泣きじゃくっていた。……三十分泣き通したそうだった。

「あたしが、先輩たちに、先生に横断幕のお手伝いを頼みませんか、なんて言わなければ……!」

このままじゃ自分が死んでしまいそうな勢いだ。

「落ち着きなよ。先生は一命を取り留めつつ、安達先生が言ってたじゃないか。」

「でもお……。先生が受けた矢って、毒まで塗ってあったんでしょ……?」

安達先生は、僕が家庭科室に入った後すぐに、続けて入室したらしい。先生はその時呼んだ他の先生と一緒に、非常に迅速に霧咲先生を運び出した。霧咲先生がなんとか生きてられたのは、その行動も大きく影響があるんだろう。毒が塗られていたとはいえ、不幸中の幸いだった。……でも、そうしたら……。僕は……とその事について考えていた。

「窓の鍵は全部閉まっていたし、おまけに家庭科室は三階だ。飛び降りればただ

じゃすまない。それは準備室内も同じ。それに、僕が入ってきたドアの所には安達先生と、安達先生に呼ばれてきた先生が三人はいた。……ということとは、だ。」
そう、あの状況下において、あの家庭科室内は、密室になってしまっていたのである。

霧咲先生には悪いが、今僕は非常に感動している。……だって僕は、推理小説研究会がなかったことに落胆し、この学校に、自分の手でそれを作りだしてしまつたぐらいの推理小説愛好家なのだ(部員募集中心)その僕が今、こうして密室犯罪を目の当たりにしているんだ、どうして興奮せずにいられるだろうか。どう考えたって無理だ。

「直、警察も来るだろうけど……もう一回だけ、入ってみようか、あの場所に。」

というわけで、家庭科室に戻ってきたわけなんだけど……。

「正直、なんにも見つからないんだよねあ……。てか、なんでいるのさ、風花。」

「え、だって絶対に先生の仇をとらなくちゃいけないし、人を傷付ける奴なんて絶対に許せないし、ね?」

やっぱり、自分のせいだっていうのを気にしているのだろうか。あとから聞いた話だと、霧咲先生と風花は家が近く、かなり付き合いが良かったらしい。そのことも影響していたんだと思う。にしたって危険だ。犯人がまだ潜んでいるかもしれないのに。

「大丈夫だよ。護身術ぐらい心得てるから。ところでさあ、あたしはさっき言った理由があるけどさ、暁はなんでそんなに躍起になってんの?」

「ええ、僕は単に、この謎を解きたいと思ったただだよ。」
「嘘つけ。」

う、一言だけだったが、心の中を見透かされた気がした。……昔と変わらないなあ。風花はいつも、僕の心を見通していた。

なんだか感慨に浸ってしまった。さ、なにか手がかりを見つけないと。そう思わないおしたその時。

「これ、なんだろう?」

風花が何かを見つけたようだ。……なんでこんなものが、こんな所に、こんな形で……?顔をあげ、家庭科室内を見渡した。

あ、そうか、これって……!え、でも、これじゃあ……。何が何だか分からない。でも、この物体が示す犯人は一人だけ、なんだ。理由なんて直接聞き出せ

ばいい。

「風花、ちょっと待っててくれないかな。」

「え、う、うん。分かった。」

向かう先は、霧咲先生の運ばれた病院だ。

犯人を、そこで明らかにする。推理小説のようなギャラリーはいないけれど、それでいい。……そうじゃなきゃいけない。

病院は意外に近く、これなら救急車じゃなくても良かったんじゃないかと思つてしまった。

受付で部屋の番号を聞き、そこを訪ねた。

ノックしようとした時、中から入れ違いに年配の男が出てきた。……。改めて、ノック。

「はい、どうぞ。」

中に入ると、ベッドの上で、霧咲先生が上半身だけ起こしてこちらに目を向けていた。

「あら、九条君。なんの用?もうお見舞いに来てくれたの?」

ベッドの横の机に目をやる。そこには、かなりの量の宝くじが置いてあった。

「先生でも、宝くじとか買うんですね。ちょっと意外です。」

「フフ、わたしだって一攫千金は夢見る時だってあるもの。」

「なんでそこまでしてお金が欲しかったんですか……?」

「大げさ、ね。宝くじくらい、みんな……」

もう、決心はとづくについていた。失礼だとは思いつつも、僕は右手をあげ、先生に指先を突き付けた。

「宝くじのことじゃない。……先生、罪を認めてください。あなたのことを、僕は警察に無理に突き出すようなことはしたくない。」

「な、なにを言ってるの、九条く……」

最後まで言わず、続ける。

「とぼけないでください。先生、今回の事件であなたに放たれた毒矢の主、それは先生自身だったんでしょ?さっき部屋から出てきたのは、保険金会社の人じゃないんですか?」

それから僕は、手始めにあの現場が密室であつたことを説明した。うん、こゝまでは大丈夫だ。

「でも、それだけじゃ、私が犯人だという理由づけにはならないでしょ？」
分かつてる。そう返されることも予想済みだ。

「……話を続けます。次に、次は吹き矢の射出方法についてです。悲鳴が聞こえる直前、つまり僕が家庭科室のドアを開けた時、僕の方から部屋の中へ、風が吹き抜けていったんです。あの時、多分先生はクッキーを焼くからと言って、換気扇をつけたんでしょう。それもかなり強く。僕らの学校の家庭科室は、思った以上に機密性が高い。先生はこれを利用したんだ。強い換気扇によって、家庭科室内の気圧は低くなった。もちろんこのままじゃあ矢が逆流してしまふ。恐らく吹き矢の吹き口の部分には、そうなることを防ぐための、ささくれのようなものがあるはずだ。そして、それらの仕掛けのおかげで、無事に矢は射出された。結果的に先生を傷付けるスイッチを押したのは僕だったわけだ。このトリックに気付いたのは、風花が見つ付けてくれた『これ』のおかげです。」

風花に渡されたものを取り出す。

「なに？それは。」

「小麦粉をこねて作られたものです。恐らく吹き矢とパッキンとの間から、風が流れ出てしまふのを防ぐためのものなんでしょう。ドアのパッキンと吹き矢との隙間に押し込まれてました。もし、吹き矢を口で吹くのなら、こんなものを使つて、空気の流れを操る必要なんてない。」

霧咲先生は、ずっと俯いていた。

「いくつかの予定外が重なって、真相は暴れました。部屋が密室になつてしまつたことや、この小麦粉の塊が見つかったのもその一つです。もし部屋が密室で無かつたら、僕だって違つた答えを出していたでしょう。犯人は外部の人間で、先生を射つたあとどこかに隠れ、隙を見て現場を去つた、とかね。……でも、今回の事件で、部屋の換気扇を操ることができたのって、先生だけなんです……このトリックは、先生以外じゃ出来ないんですよ……。」

「一番の予定外は、九条君、あなたのような人を教える子にもつたこと、ね。」

「どうして、こんなことを……？」

「私ね、子供がいるの。」

驚いた。けれど、口は挟まない。絶対。

「すごい難病でね、手術しないと、余命が一年もないの。一年前、夫は交通事故

で死んじゃつて、もう、どうしようもないぐらい追い込まれてたの……。」

「それで、事件を？」

「入つてすぐ事故に遭つようなことじゃ、保険会社は信用してくれない。だから、絶対に人の手じゃないと起こせないような事件をつて、そう思ったの。でも、もうおしまい。保険金が下りないなら、手術なんて無理だもんね。それとも、……見逃してくれる、九条君？」

とても美しい、けれど寂しい笑顔だった。

「……僕に出来るのは、間違ひだったつてことを保険会社のひとにちゃんと伝えて、警察沙汰ににならないように努力する事だけ、です。」

「ごめんなさいね。こんなこと、頼めないよね……。」

先生は泣いていた。僕はそつと部屋を後にした。

僕は目を見開いた。先生の病室のドア横に、風花が立っていた。

「待つてろ、つて言つといて、帰つてこないから……暁のこと見たつていう友達に話して……そしたら、ここに……。」

「風花、これは、えーと、その……。」

「いいよ、今回のことは、聞かなかつたことにしてあげる。……だから、少しは私にも手伝わせてよ。」

風花は、昔から、こういう性格だった。困つてる人がいたら、放つておけない。たとえそれがどんな悪いことをした人でも。……本当に、変わつてない。

「じゃあ、さ。一つだけ、頼んでいいかな。プレゼントを渡したい人がいるんだ。」

「……」

「どんな人？」

「分かり切つたことを聞かないでくれよ。目一杯頑張つたひとだよ。苦しんで、苦しんで、それでもなんとか生きる道を見つけ出そうとした人……いいだろう？」

「うん……うん……！」

余談なのだが、風花の家は、大きい。すごく。要するに金持ちだ。とんでもないぐらいの。だから、一つだけ、プレゼントをおねだりすることにしたんだ。風花の家の大きさに見合つた、すごいスケールのプレゼントを、ね。風花は大丈夫だといつてたけれど、もし僕の家で同じことをするのは到底無理だ。……ここま

で言えは分かるだろう？」

数か月後、僕と風花の元に届いた手紙に同封されていた写真には、『ありがと

『という手書きの文字と、……明るい空の下を走まわっている元気な女の子と、
本当に幸せそうなるその母親の姿があった。』

あとがき

はじめまして。八汰鳥と申します。

まずは、このような拙い物語をお読みいただき、ありがとうございます。

宇高祭ということで、何を書こうかな、と考えていたら、真っ先にミステリもどきを書きたいな、と思ったのがこの作品の馴れ初めなのですが、今回これを書いてみて、なにか文章を作る、というのがこんなにも大変なのか、と痛感いたしました。推理小説はかなりの数を読みましたが、トリックの仕組みにせよ、人物間の繋がり^{つながり}にせよ、なんだか薄い^{うす}気がしてなりません。しかし、今現在としては、ひとつの物語を、なんとか作り出せた喜びに浸っております。

最後に。もし、この作品によって、ミステリへの興味を少しでも持っていただけたならば、本屋さんへ行ってみてください。より上質で、思わずあつと言わされるような作品に出会えるはずです。

グローリアー滝の原高校探偵神話―

喜多宮枕

登場人物(登場順)

- ・喜多宮枕(きたみやまくら)……2年。文芸部。
- ・琴子(ことまこと)……2年。女子高生。
- ・白樺芥子(しらかはからし)……2年。手芸部。
- ・琴真琴(ことまこと)……2年。帰宅部。
- ・飛沢佐備斗(とびさわさびと)……2年。サッカー部。
- ・横綱(よこづな)……教師。2年4組担任。
- ・鯖爪翼(さばづめつばさ)……2年。帰宅部。
- ・牧野軒真(まきののきま)……2年。剣道部。
- ・洲焼幹康(すやきみきやす)……2年。剣道部。
- ・所作正芳(しよさまさよし)……2年。ラグビー部。
- ・蟹原ばにか(かにばらばにか)……2年。手芸部。
- ・弓芦弘幸(きゆるひろゆき)……2年。生徒会。
- ・金谷中(かなやあたる)……2年。帰宅部。
- ・岡隆夫(おかたかお)……2年。柔道部。
- ・三代目びこ彦(さんだいめびこひこ)……2年。文芸部。
- ・小金井さくら(こがねいさくら)……2年。文芸部。
- ・日高吞(ひだかどん)……2年。文芸部。
- ・白黒燐寸(しろくろまうち)……2年。文芸部。
- ・徳川岳人(とくがわくと)……2年。生徒会長。
- ・的場都馬(まどばとうま)……2年。図書委員長。
- ・野波ナノ(のなみな)……2年。生徒会。
- ・岸芳樹(きしよしき)……2年。生徒会。
- ・滝の原健児(たきのはらけんじ)……

X月Y日

「こんばんは！皆様！」

「……………」

「ほらの子さん何黙ってるの？」(挨拶)(挨拶)

「………いたいこれはなんの茶番なのでしょう？」

「やっぱりさ、これから僕の物語を読んでもらおうというわけだし、親愛なる読者の皆様にご挨拶しようかなと思って」

「それで、冒頭に作者と登場人物の会話のようなものを入れたというわけですか。なんと………駄作の臭いがかもし出されてきますね」

「ちよとちよと的子さん！そんなこと言わないでよ。読者の皆様が僕の作品読み飛ばして別の人の作品読み始めてしまうでしょ」

「そもそもこの冊子ちゃんと読む人なんているのかしら………」

「それ言っちゃう？いや、何百部と刷って配るんだから、きつと中には物好きな人がいるはずさ」

「どうでしょうかね？それで、何故私があたなんかと会話しなくちゃいけないのでしょうか？必要な時以外は、私はお兄様としか会話しないことにしているのです」

「はいはい！………で読者の皆様、特に男性の皆様に残念なお知らせがあります」

「はあ？」

「このシーン以降、この作品には女の子が一切出てきません！いやー残念だね。僕も残念だよ本当に」

「別にあなたが描くような女の子に魅力を感じる人なんていないんじゃないのかしら」

「というわけだね。一回も女の子が出てこないのは華が無い、と僕は思いました。だから冒頭に、僕の過去の作品の中から、女の子代表として琴子さんにご登場願ったというわけですね」

「勝手に登場させられたんですけども」

「的(てき)子(こ)さんの初登場はこちら！」喜多宮枕は冊子を取り出した。A4のコピー紙をスケープラーで綴じたものだ。

「これは『夏の夜風と上弦の月』。去年、読者の皆様が今お読みになっているこの冊子と同じように無料配布されたものです」

「なんか回りくどい言い方ですね。それにしても、よくこんなものが残っていましたね」

「2百部しか刷られていないからね。プレミアものだよ」

「きつとほぼ全てが再資源として生まれ変わっているのでしょうね」

「哀しいこと言うなよ。僕らの1年前の青春の結晶なんだから」

「青春………」噴出す子。

「さてこの冊子の一番最初に載っているのが、喜多宮枕の処女作『どきどきシンジャエル』なのです！簡単にあらすじを説明すると……」

「あーそんなのいらないますから！誰も興味ないですから！」

「そう？でも実はさ、今作『グロリア』は、『どきどき』の続編にあたる物語なんだよね。ま、続編といつても、前作読まなくても大丈夫なような内容なんだけどき」

「じゃあもうそれでいいじゃないですか」

「うーんそれじゃの子さんの紹介だけしようかな。琴の子さん。上から読んでもことまこと。下から読んでもことまこと。女子高生。動物と話せます。双子の兄がいて、その人は名を真琴といいますが、めっちゃ美少年です。だからその妹である的子さんもきつと美少女なはず！的子さんはお兄さんのことが好き好き大好き超愛しちゃってまして、それで『どきどき』では猫を殺しまくりました」

「ああもう無駄な説明はいりませんから。聞いている限りでは本当にステレオタイプなキャラクターですね」

「あ、そうださっき動物と話せるというあまりにご都合主義な設定があると言いましたが、今作でもそれは踏襲されています。真琴くんがその能力をフル活用して大活躍するのでよろしく」

「またあの都合のよい設定使うのですね」

「だって便利なんだから」

「読者にとってはほんとにどうでもいい前置き、本当にありがとうございます」

「さ、ではそろそろ物語を始めようかな」

「ずいぶんとえらそうですね。そもそももはやこんなの読んでる方なんているのでしょう。もうとくに放り出してしまったのでは……」

「一人になっても語っちゃうもんね。それではスタート！」

×月×日

白樺芥子は単語帳をめくっている。朝、ホームルーム前の教室はがやがやとしているが、いくつかの少人数のグループで会話をしているという印象だ。白樺芥子は傍目にもそわそわとしているが、それは毎朝のことである。別に友人がいらないというわけではないが、芥子は誰とも会話をしていない。彼は待っているのだ。教室の扉がざらりと開いた。

「おはようございます。芥子さん」

「お、おはようございます！真琴様」

真琴様、という呼称に周りの者は驚きを隠しえないが、二人は気にしていないようだ。去年1年3組だった時も、二人はさんざん奇異の目で見られていた。後半になれば、だんだん周りも慣れていったが、このクラスではどれくらいかるだろうか。

二人が挨拶をしたところで始業のメロディが鳴る。

8時25分

この、物語の舞台となる、この滝の原高校の始業メロディは、滝の原高校応援歌を使用している。1924年（大正13年）、初めて野球部が甲子園に出場した際に製作されたもので、それ以来野球部が甲子園に出場したことはないが、応援歌の方は様々な機会であられる。せつかくなのでここで歌詞を引用しよう。

滝の原高校 応援歌

二荒おろし 吹きすぎぶ

戦雲巻くや 瀧の原

衝天の意気 敵堂に

勇みて向こう 常勝軍

鉄棍ひらめき 砂を噛む

越球の音 肉の弾

竜攘虎搏 雨を呼ぶ

戦いまさに たけなわよ

一角崩れ また崩れ

敵の陣営 色めけば

疾風迅雷 躍りこむ

剽悍決死の わが勇士

我らは勝ちぬ 優勝の

旗は燦たり 夕陽に

勝鬨の声 張り上げて

帰らんかなや いざやいざ
帰らんかなや いざやいざ

「帰らんかなや いざやいざ……」

始業メロディに合わせて、芥子は小さく口ずさんだ。まだ担任教師は来ない。

「先生来ませんね」

真琴は隣の席で文庫本開いている。

「本当ですね。どうしたのでしょうか……」

先生が来ないのをいいことに、クラスの連中はめいめい好きなことをしている。あるものは語らい、あるものは予習をし、あるものは漫画を読み、あるものは居眠りし。

「やべ忘れてた！」

飛沢佐備斗が頓狂な声を上げた。

「俺週番だったわ。出席簿とってくる」

「おう。ついでに職員室覗いて横綱呼んでこいや」佐備斗は駆け出していった。横綱とは2年4組の担任教師である。冗談みたいな姓だが、本名だ。名は体を表すとは言いが、別に横綱先生は太っているわけではない。それでも、その名のためにいろいろ苦労しているらしい。

佐備斗が教室に戻ってきた。

「はあ、はあ」

「どうした？そんなに慌てて」しかも佐備斗出席簿忘れてんじゃない。何しに行ったのよ」「先生は？」

「それが、いないんだよ」

「は？どういうこと？」

「職員室が……空っぽなんだ」

詳しい説明をみんなが求めるが、佐備斗自身も混乱しているのか、その説明は精彩を欠くものだった。

「とりあえずみんなで職員室行ってみようぜ」

クラスメイト達はどろどろ教室を出て行った。

「僕たちも行ってみましょうよ」

「そうですね」

真琴は本を閉じる。芥子と真琴も一団のお尻にくっついていった。廊下の途中でチャイムが鳴った。本来はこれでホームルームの終わりとなる。

8時35分

職員室の扉は閉じられていた。扉についている曇りガラスから明かりが漏れている。

「俺、入るよ」鯖爪翼が横開きの扉をゆくりと開く。

「失礼しまー……」固まる翼。

「どうしたどうした」入り口に群がるクラスメイト達。中を覗いた者が揃って固まってしまい、つかえている。

「おいどういことだよ。佐備斗」「いったい何が起ってるんだ……？」

「どういことだよ……はあ？」やと中の様子を見た佐備斗が青ざめる。「マジかよ。俺が来た時は、こんなことには……」

職員室の中には死体が並んでいた。

デスクが中央に集められていて、その上に乗っていた教師の様々な私物は床に置かれている。並べられ、一つの島のようになったデスクの上には、滝高生達が横たわって並んでいる。みな黒い学生服姿。生徒たちに目立った外傷は無いが、血溜りができていて、学生服も赤黒い血で染められている。瞳は閉じられ顔に生気が無い。それらは間違はなく死体だ。死体は全部で10個あるが、奇妙なのはその並べ方だ。中央には2つの死体が向かい合って並び、腕と脚をそれぞれ伸ばして合わせていて、楕円のようなものを形作っている。上側には同じように2つの死体が並び、上から見ると楕円が縦に2つ並んでいるといった感じだ。それにその2つの楕円を囲むようにして、6体の死体が並んでいる。6つの死体は腕を直角にのばしたり腰の辺りで折れ曲がっていたりして、全体でホームベースのような形になっている。楕円の一つはホームベースの底辺からはみ出ている。血溜りはホームベースの縁と楕円の縁の間にあって、ホームベースの外、そして楕円の中は血で汚れてなく、白いデスクが覗いている。全体として見ると盾のような形をしている。

本来そこにいるはずの教師の姿は一人も見えない。強烈な血のおいが溢れ出ている。

「うわあー」

やと中を覗いた芥子が悲鳴を上げた。真琴は無表情。

「これ、やばいだろ」どうしよう……？」「一体何が起ってるんだ」

とりあえず教室に戻ろうという声が上がリ、一同は廊下を歩き出した。遅れては

なるまいと芥子も後を追いかけたが、真琴が職員室に残っているのに気づいて立ち止まる。

「何やってるんですか真琴様。早く戻りましょうよ」

真琴は答えず、奥まで行くと窓を開けた。

「集合！」

普段なら考えられないくらいの大声で真琴が叫ぶと、窓の周囲に動物たちが集まってきた。カラスやスズメといった鳥たち。蛇や蛙、鼠といった小動物たち。蛙なんて後足だけで歩き出している。どこから迷い込んだのか、野良猫も混じっている。

「皆さんにお願いがあります。この滝高で何か異常が発生しているようです。何かおかしいものを、特に」真琴は一步引いて部屋の惨状を見せる。「こんな感じの状況を発見したらすぐ私に教えてください」

「合点承知！」真琴さんの頼みなら断れねえや」

動物たちは散った。一瞬の出来事だった。

「い、今、何をしたんですか？」

「動物さんたちに協力を依頼しました。おそらく、他の場所でもこんな事態が起きているはずですよ」

「一体誰が、こんなことを……。こんな、人が死んでいるなんて……」

「人が死んでいるだけではありません。これは間違いなく殺人です」

「殺人……」

「しかも、犯人は単なる娯楽のためにこの10名を殺したと考えられます。それが私には許せません」

「娯楽？」

「この死体の並べ方を見てください」

窓際に立つ二人。楯状に並んだ死体が一望できる。

「犯人は、死体で滝高の校章を形作っているのですよ」

1時間目の開始を告げるチャイムが鳴った。

8時40分

2年4組は重苦しい沈黙に支配されている。

「佐備斗が職員室行った時は、死体は無かったんだよね？」

沈黙を破ったのは翼だった。

「死体って……」

「あれは間違いなく死んだたどろ。で、どうなんだ佐備斗」

「あ、ああ……」

「だとしたら妙だな……」

「何が？」

「あの現場の状況は、佐備斗が職員室を出てから俺らが職員室に行くまでの、ほんの数分のうちに出来上がったということになる」

「……」

「謎は二つだ。誰が、どうやって10人を殺し、あんな風に並べたのかと、教師たちはどこに消えたのかという二つだ」

「謎って……」いつの間にか、クラスメイトたちはみな翼の言葉に耳を傾けている。「なんかすごく冷静だな鯖爪」

「いや俺さ、ミステリとか好きじゃわけよ。こういう状況になって、殺された人には申し訳ないけど、すごく今俺燃えてる」

「へえ……」

みな一步ひいてしまっている。

「俺絶対この事件解決するわ。よし、みんな席に着いてくれ！」

翼は教壇に立った。みな、なんだこいつは、という目つきで彼を見たが、おとなしく座る。

「今いないのは誰だ？」

「牧野」

洲焼幹康が言った。

「やつはどうせまた遅刻だろ」「他は？」琴と白樺」

「ああ……。あの二人はよく判らんからな……」「学校には来てたはずだよ」「他には？」「正芳」「蟹原」「弓芦」「喜多宮」「金谷」

「けっこういないやついるんじゃない。学校には来てたっけ？」

「どうだろう？ たぶんいたと思うけど」

「ふうむ。まあいいか。さて、これから推理を始める。殺人の方だけど、犯人として一番怪しいのはやっぱり佐備斗だろうな」

「はあ？ なんで俺？」

「第一発見者が一番怪しいというのはミステリの鉄板だろ」

「いやそんなの知らねえし」そっか。佐備斗が殺人なんてするわけないだろ！」「引ッ込め鯖爪！」野次が四方から飛んでくる。

「わ、判った判った。じゃあ別の方角から考えてみよう……」
素人探偵は話し続けるが、もはや誰も聞いていない。

◆
「なんのために校章なんか作ったのでしょうか？」

「さあ？深い意味は無いと思いますよ。それよりも」真琴は言葉を切った。「さらに意味不明なことが起きています……気づきませんか？」芥子は見渡すが、死体が並んでいる意外に奇妙なことは見られない。「先生方の持ち物だと思われる、本やノート、パソコン、文房具などが床に並んでいますよね」

「あ、綺麗に並んでいますね」

雑多な物が列を作っているのだ。だいたいA4用紙くらいの幅で、職員室の入り口辺りからずらりと並び、端まで行くとカーブしている。デスクの島を中心に渦を作っているようだ。

「よく気づきましたね」

「意味不明です。しかし犯人にはきっと意味が……」

そのときスズメが飛び込んできた。

「ほうー！ー！音楽室にて異常発見！」

「音楽室で何かあったそうです。行ってみましょう」

「はい」

しかしそこにもう1羽スズメがやってきた。

「ほうー！ー！白亜館2階にて異常発見！」

「白亜館でも何かあったそうです」

「白亜館でも！では先にそっちから行ってみましょうか？」

「いえ。二人で行くより分担して行くのがよいでしょう。芥子さん、携帯電話は持ってきていますか？」

「あ、携帯で連絡を取るという手がありましたね」

「はい。現場に着きましたらその状況を私に知らせてください」

「真琴様はどっちに行かれます？」

「私は白亜館の方へ行きますよう。芥子さんは音楽室をよろしく」

「はいー」

◆
滝の原高校の校舎は2階建てで、南北に長く伸びる中央廊下に各棟が東西に枝を伸ばしているという形をしている。誰かがその様子を宇宙ステーションと形容していた

が、なかなか言いえて妙だ。南の端は職員室、事務室、校長室、保健室、進路研究室、パソコン室などが並び、管理棟で、釘の頭のように中央廊下につながっている。そこから北に向かつて順に、東側には3年棟、2年棟、1年棟、西側には図書館、化学棟、生物棟がつながっている。さらに北の端には講堂と文化部棟が本校舎とは少し離れてある。管理棟のさらに北には西体育館、東体育館が並び、その先には第1グラウンドが広がる。

白樺芥子は中央廊下2階を歩いていた。目指すは、1年棟を超えたさらに北にある音楽室である。選択芸術は工芸を選択し、管弦楽団でもない彼にとって音楽室はなじみの薄い所だ。

入り口の短い階段の先には先客がいた。

「蟹原くん？」

蟹原ばにかはびくっと身体を震わせて振り向いた。

「なんだ芥子ちゃんか。驚かせないでよ」

「驚いたのはこっちだよ。なんでこんなところにいるのさ」

「いや部屋に忘れ物したからとりに行こうと思って」

「文化部棟開いてるわけじゃないじゃん」

「まあそうだったんだけど」

二人は同じ手芸部員だ。

「それよりさ、見てみろよ芥子ちゃん」

扉は開いている。ばにかが横にずれると、中の様子が見えた。

滝高校章の形に並び、10の死体。血のにおい。職員室の時と違うのは、特に物が並んでいるわけでもなく、代わりに大量の「鬼おろし」が死体の上に散らばっていることだ。さらにえ県の郷土料理しもつかれを作るのに欠かせないあ鬼おろしである。さすがに、初めて死体を見た時ほどのショックはない。芥子は携帯を操作して、

「あ、真琴様。やっぱり死体、ありました」

「ご苦勞様です」

「職員室のほとんどと変わらないですけど、鬼おろしが大量に散らばっています」

「鬼おろしって……あの鬼おろし？」

「はい」

「鬼おろし……」

「真琴様の方はどうだったんですか？白亜館は？」

「はい。2階に全く同じような感じで死体が並んでいます。でも死体はもう一つあり

ます。校章の横に倒れていました。奇妙なのはその人がシャンデリアに押しつぶされて殺されているということです」

「シャンデリア？」

「私も白亜館は初めて行ったのですが、2階が物置みたいになっていて、上には古いシャンデリアが吊るされていたみたいです。それが天井から長い鎖で吊るされて、死体を押しつぶしています」

「シャンデリアが……」

「天井につながっている長い鎖には赤い上向き矢印がくっついていきます。ちなみにその殺されていた人は私の知らない人ですね。1年生みたいです……あ、あと校章の死体のうち一人はうちのクラスの所作正芳くんです。気ついたのはこれくらいでしょうか」

「所作くんが殺されてしまったのですか。てか白亜館の中入れたんですね」

「鍵が開いていたのですよ。犯人が開けたのでしょうか？」

「！ということはまだ犯人は白亜館の中にいるんじゃないですか！」

「そうかもしれません。まあ人の気配は無いですが……」

「危ないですよ！すぐにそこから離れてください」

「大丈夫ですよ」

「大丈夫じゃないですよ！僕も急いでそっちに行きます」

芥子は電話を切った。

「どした芥子ちゃん。さっきの、琴さんでしょ」

「うん。僕もう行かないと」

「この事件のこと、調べてるんだろ？」

「え？」

「隠さなくても判るよ。それなら琴さんの所に行く前にこの死体を調べる必要があるんじゃない？」

「そんな……」

「ほら」

「ばにかは音楽室へ入っていった。」

「うちのクラスの奴も死んでる」

「一体を仰向けにすると、それは弓芦弘幸の死体だった。」

「弓芦くん……」

「俺気ついたんだけどさ」

「ばにかは次々と死体を仰向けにしていくな。」

「この10体の死体、滝高生だてこと以外は学年も何も共通点が無いだろう？」

「うん」

「でも一つだけ共通点があるんだ。第2ボタンを見てくださいませんか？」

学生服の第2ボタンを見た。血で汚れているのもあれば、綺麗なものもある。滝高の制服である学生服は、ボタンが滝高の校章が浮き彫りにされた指定のものとなっている。

「ボタンが第2ボタンだけ逆さに着いているんだ」

全ての死体の第2ボタンが、校章のとがっている方を上に、つまり逆向きに取り付けられていた。

「死んでるのはみんな、アンチ・タキノハラなんだよ」

「アンチ・タキノハラ？」

「知らないのか？滝の原主義に抵抗しようともくろむ思想集団だよ。彼らは第2ボタンを逆さまに取り付けてその意を示している」

「そんな集団が……」

「まあアンチ・タキノハラを唱えてはいても、特別な活動をしてきたわけじゃなかったみたいだな……まあ今後相手の第2ボタンをよく見るようにしてみろよ」

◆

「ばにかと分かれた後、芥子は中央廊下を小走りで戻っていた。途中多くは無いが歩いている人とすれ違う。教室の方も騒がしくなってきた。すれ違う人の第2ボタンをそれとなく観察してみるが、アンチ・タキノハラを証を持つ人はいない。」

電話で白亜館の死体の様子を訊こうかとも思ったが、直接訊いた方が早いだろう。

アンチ・タキノハラが抵抗しようとしている「滝の原主義」について説明するのは難しい。入学したときから何度も校長講話などで説明されるのだが、それは非常に抽象的だ。戦後すぐの混乱期に、目標を失った生徒たちの新たな指標として提唱された滝の原主義。それは学業に及び、心構えに及び、生き方にまで及ぶ。簡単に言ってしまうと、滝の原高校に流れる空気、「滝高らしさ」を生み出す源だとも言えいいだろう。もっとも、あまりに抽象的で判りづらいからか、「和敬信愛」「質実剛健」「自律自治」「進取究明」という4つの具体目標としての生徒指標も存在する。

抽象的な滝の原主義と、4つの具体目標。

◆

2年4組は相変わらず騒がしい。

「そうだ、警察を呼ばないでいいのか？」

と誰かが言った。

「そうだよ」「なんで今まで思いつかなかったんだろ？」「誰が呼ぶ？」「俺が呼ぼう」翼が言った。なんだこいつという視線の中、携帯に耳を当てる。

「駄目だ。つながらない」「どういうこと？」「お掛けになった電話は、電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、掛かりません。だって」「はあ？110番したんだろ？」「もちろん」「俺がやってみるよ」「俺も」どの電話も同じ音声を流すだけだ。

「圏外というわけじゃないんだよ……」「警察が来てくれないって……これからどうすんだよ」「なんなら、外に出て直接呼んでこようか」「そうしようぜ。あ、俺カワチ行く」「俺も」

カワチとは滝の原高校北門を出てすぐのところにあるドラッグストアである。滝高生御用達で、休み時間などに買い物する姿がよく見られる。

洲焼幹康を含む4人がクラスを出て行った。

「俺、もう一度現場を見てくるわ」誰に言うともなく言うと、鯖爪翼もクラスを出て行った。

飛沢佐備斗もクラスを出ようとしていて、「おいどこ行くんだよ佐備斗」とクラスメイトが訊くと、「便所」と一言。



白亜館とは本校舎のさらに南にある、白塗り2階建ての洋館である。白亜館はその外観から来る通称で、滝の原会館、滝の原高校旧本館とも呼ばれる。明治期の旧校舎の一部が資料として残されているというわけだ。

スクールサンダルのまま白樺芥子が外に出てしばらく歩くと、白亜館の屋根が見えてくる。

入り口の観音開きの扉の前に琴真琴が立っていた。

「真琴様。ご無事でしたか」

「大げさですよ芥子さん。私はこの通り大丈夫です。鍵は犯人が閉め忘れたのでしょう」

「そうでしょうか……？」

「それよりも、この3つの殺人の共通項が判りました」

「共通項って……校章を作っていること以外に、ですか？」

「あくまで推測に過ぎないですし、多少牽強附会などころもあります……各現場の状況を考えてください。10の死体で滝高の校章を作っていること以外で」

「職員室では、物が一列になって渦を作っていましたね。音楽室では鬼おろしが大量に散らばっていた」

「そして白亜館ではシャンデリアに人が押しつぶされていて、上向きの矢印がついていた。この順番を、音楽室→職員室→白亜館という風にして考えてみます。鬼おろし、渦巻き、押しつぶされた死体と上向きの矢印……」

「何を言っているのかさっぱり判りません」

すると真琴は歌い始めた。

「ふたあらおーろし、ふーきすさぶー。せーんうんまーくやー、たあきのはらー……」

実は真琴は音痴である。だが芥子には彼の言わんとしていることが判った。

「応援歌？」

「そう、応援歌です。この連続殺人は、滝の原高校応援歌の見立て殺人なのです。……音楽室では「鬼おろし」が散らばっていました。これは応援歌の最初、へ二荒おろし吹

きすさぶーの見立てです。職員室では物が渦を巻いていました。これは「戦雲巻くや瀧の原」の見立てですね。そして白亜館です。これは少し強引な説明ですが、あれで重要なのはシャンデリアではなく、人が圧死していること、上を向いた赤い矢印なのです。矢印は圧死したその人の魂の行く末をさしているのです。魂は昇天する。昇天、ショウテン、衝天……。これは「衝天の意気 敵營に」の見立てなのです」

「な、なるほど……」

「そしてこの推測が正しければ、この連続殺人はまだまだ続きます。次は「勇みて向こう 常勝軍」を見立てた殺人が起きるはずなのです」

「そんな、それなら早く殺人を止めないと！」

「問題はどこで殺人を犯すかということです。現場で10人を殺すとはちょっと考えられないですし……」

「あと、いつ殺しているのかも重要です」

「いちおう、何か異常があったら動物さんたちが知らせしてくれるはずですが……」

「あ、そういうば……」芥子はさっきばにかに言われた、死体の第2ボタンが全部上下逆に着いていることを確認しようとした。しかし、その時彼は、真琴の第2ボタンがやはり上下逆に着いていることに気づいたのだ。

上下逆の第2ボタンは、アンチ・タキノハラの説。

「……なんですか？」

「……いえ、なんでもありません」

芥子の心には迷いが生まれた。

◆ 音楽室を出た蟹原ばにかは、考えを整理しようと、報恩館へ向かった。報恩館は図書館の一部で、閲覧席が設けられ、本が並んでいる。昔、ある資産家のOBの寄付によって建てられた建物らしい。図書館は、他に中央閲覧室、自習室、視聴覚室で構成されている。校舎に近い方から順に、視聴覚室、自習室、中央閲覧室、報恩館とつながっている。

当たり前といえば当たり前だが、図書館内は無人だった。ばにかは奥の報恩館を目指す。

報恩館の中には誰もいないようだった。しかし隅の席に人が座っていることに気づく。ばにかは近寄り、その人物の背中に深々とナイフが突き刺さっていることに気づく。

その人物は、ばにかと同じクラスの人だった。あまり親しいわけではない。テーブルの上にはたぐさんの滝高原稿用紙が広がっている。文字で埋まったものもあれば、白紙のものもある（滝高原稿用紙とは、主に読書感想文課題などのために使われる、27文字×37文字の特製原稿用紙のことである）。ばにかはページ番号がふられているものを順に読んでみた。それはどうやら小説で、流水大説を目指して書かれたような代物だった。死体の目の前には半分ほど埋まった原稿用紙があって、物語はそこで唐突に終わっている。もう一度原稿のタイトルを見た。タイトルは『グロリア』とあった。

彼はこの場所ですべて小説を書いていたのだろうか？本来授業中の時間にこんなことをしているなんてなかなか酔狂な奴である。そういえば奴は文芸部だった。まあ殺されてしまったわけだが。

ばにかはこの男と反対の隅に落ち着くと、腕組みをして考え事を始めた。そして、何故喜多宮枕が殺されているのかについて思いを馳せた。

◆ 2年生用の通用口から出た2年4組の4人は北門の方へ歩いていった。この通用口は2年棟の真下にあり、2年生の下駄箱が置かれている。すぐ前には駐輪場が広がっている。

北門まで行って4人は言葉を失った。北門のすぐ外には、道路と、農家直営店『あぜみち』と、ドラッグストアアカワチが見えるはずだが、そんなものはどこにも無く、ただ寂寥とした荒野が広がっているのだった。

「どういふことだよこれ……」「俺たち帰れないのかよ」

その時チャイムが鳴った。普段なら、1時間目が終了する時間である。

9時30分

「でもよ」

一人が口を開いた。

「携帯が圏外ってわけじゃねえんだから、まあ警察にはつながらなかったけど、他の人には掛かるんじゃないか？」

「そうか。じゃあ掛けてみよう。誰に掛ける？」

「そーいや牧野まだ来て無かったよな？もしかしたら今滝高に向かっている最中かも」

「よっしゃ。掛けてみよう」

幹康が携帯を操作するのを固唾を呑んで見守る。

「へい。どうした洲焼？」

「どうしたっていうかお前こそ学校どうしたんだよ」

「恒例の寝坊。今向かってるよ。もう北門見えてきた」

「北門？なあ、宇高の様子、おかしくないか？」

「はあ？何言ってるんだ？」

「ていうか周りの様子はおかしくないか？」

「意味不明なこと言うなうて。もう着くよ」

果たして北門から自転車に乗った牧野軒真が現れた。突然の登場に驚く4人。軒真も驚く。

「あれ？お前ら何、お出迎えに来てくれたの？」

「おい牧野。振り返ってみろよ」

軒真は再度驚くことになった。

5人のそばを小走りで通り抜ける二人がいた。琴真琴と白樺芥子である。

「どうしたあのカプル。どこへ行くんだ？」「判んないけど、ついて行ってみよう」

「おい何がどうなってるんだか説明してくれ」と言う軒真に幹康が説明しつつ、一行は二人を追う。

真琴と芥子は和敬寮を目指していた。和敬寮とは文化部棟・講堂のさらに北にある、古い建物である。寮とは名ばかりで普段は誰も住んでいないが、百人一首かるた部の活動や、その他部活動の合宿の際の寝泊りに使用される。

1階は何も異常なかった。畳の敷かれた広い部屋がある2階へと階段を駆け上がる。引き戸を開けると、目の前には10人の死体による滝高校章が既に完成していた。

そしてもう一つの死体があった。

「佐備斗！」

一人が悲鳴を上げた。

飛沢佐備斗の死体は校章の横に仰向けに寝転んでいて、胸には深々とナイフが突き刺さっていた。血がまだ流れ出ている。佐備斗の死体の周りには、チェスの駒が、色・種類を問わず大量に散らばっていた。

「へ勇みて向こう、常勝軍！」

と真琴が小さく呟いた。

芥子はそれとなく死体の第2ボタンを観察した。10の死体の方はみな上下逆になっているが、佐備斗のは普通だ。

「なんで佐備斗が殺されなくちゃいけないんだ……」

「ええ。ここで飛沢くんが殺される必要はなかったように思えます」

真琴が言った。

「歌詞の見立てなら、チェスの駒だけば撒いておけばいいのに」

「琴さん？何言ってるの？」

「いえ……。とりあえず、教室に戻りましょうか」

一行は和敬寮をあとにした。

◆

「岡さん。喜多宮氏を見なかった？」

中央廊下の雑誌コーナーにいた岡隆夫がのそりと振り返ると、三代目びこ彦が立っていた。隆夫は柔道部で筋骨たくましいが、ニュートンなどを読みこなすインテリでもある。

「喜多宮？知らないな」

「そうですか。ちょっと文芸部のことで相談があるのですが……。あ、ありがとうございしました」

びこ彦は去った。道中、小金井ささらとも出会う。

「小金井氏。喜多宮氏は？」

「さあ？」

「困ったな。『表現』のことで話があるんですが」

「おお。そういえばそろそろ『表現』も始めないと」

「どこに行ってしまったのでしょうね」

「教室はいなかったのか？」

「いませんでした」

「じゃあ図書館は、っていう」

「行ってみましょう」

二人は図書館と歩みを進めた。この時チャイムが鳴った。普通だったら2時間目が始まるはずだが、教師が一人もいないというのに授業などできやしない。

9時40分

報恩館。二人の目の前には動かなくなった喜多宮枕がいた。

「喜多宮氏……」

唇を噛み締める二人。

「一体この学校では何が起こっているのでしょうか……」

「そういえば職員室と音楽室に大量の死体があったらしい」

「連続殺人事件ですね。それに喜多宮氏も巻き込まれてしまった。文芸部として、このことを克明に記録しておく必要があるのではないのでしょうか？」

「うん……。それが喜多宮氏の弔いにたるかもしれないな」

「そうと決まれば日高氏と白黒氏も呼びましょう」

びこ彦は買ったばかりの携帯を取り出した。

◆

喜多宮枕の死体の前に4人の文芸部員が集まっているのを蟹原ばにかはぼんやり眺めていた。彼らが何を始めるつもりなのかばにかは興味があった。もともと静けさを破られるのはごめんだったが。

◆

「行きますよ」

2年4組へと向かう途中、本校舎への入り口あたりで、琴真琴は白樺芥子の耳に口を寄せて言った。

「次の事件が起きたようです」

真琴の肩にはスズメが止まっていた。

「どこですか？」

「第1グラウンドです。靴をはいて行きましょう」

2年棟まで来て、二人は何も言わずに下駄箱へ向かった。残りはそのまま2階へと上がっていく。

教室まで来て、真琴と芥子がいないことに気づいた。

「あれ？あの二人は？」

「さっきまでいたのに」

「なんかあの二人、怪しくないか？」

「あのカッブルが人を殺してるって？ありえないだろ」

「いや、でもさっきも和敬寮で事件があったことを知ってたみたいだし……」

「うーん……」

教室に戻る。

「あれ牧野じゃん」「おっす」「学校来れたんだ」「それが、学校に入ることはできても

出ることはできないみたいなんだ」

洲焼幹康が有様を説明した。

「なんてこった」「俺たち閉じ込められたってこと？」「何に？」「時空の狭間とか？」「…

…」

「つかなんでこんな人いないの？」

牧野軒真が問いかけた。クラスの席は半分ほどしか埋まっていなかった。

「さあ？みんな好き勝手遊びに行ってるんじゃない？」

「自由だな」

「4組らしいっちゃらしいか」

◆

外履きに履き替えた白樺芥子と琴真琴。芥子は急いで行くところだが、

「急いだって無駄ですよ。もう事件は起こってしまってますし、次の事件まではまだ時間があります」

「え？それってどういう……」

「チャイムですよチャイム」

「チャイム？さっき鳴った？」

「そうです。もちろん殺害はもっと前でしようが、チャイムに合わせてあの状況を完成させているのです。……音楽室は8時10分、最初の予鈴の時に、職員室は1時間目の予鈴である8時35分、白亜館は1時間目の始まる8時40分に、和敬寮は1時間目の終わりの9時30分に、そして今から行く第1グラウンドは2時間目の始めの9時40分にそれぞれあの状態が完成しているのです。動物たちの報告、そしてこの事件の犯人の異常なこだわりよりからこのことは間違いないと思いませんか？」

「なんかそんな気がします」

第1グラウンドが見えてきた。もともと滝高の校庭は広く、日光線が校庭内を横切

っている。学校に近い方を第1グラウンド、遠い方を第2グラウンドと呼んでいる。

第1グラウンドの脇には既にちよとした人だかりができていた。二人がその中を分け入り覗くと、10の死体による滝高の校章、そしてその他に9人の死体が転々と転がっていた。9人はみな頭がへしゃげているが、それが直接の死因かは判らない。横には犯人が使用したと思われる血がこびりついていてぼこぼことしたバットが転がっている。さらにはその死体の口には砂が詰められているのが見てとれる。

以上のことを読み取った真琴は、その内容を、離れたところから見守る芥子に伝えた。

「へ鉄棍ひらめき 砂を嚙む、ですか」

「9人もの野球部員が殺されるなんて」

「何故野球部員って判るんですか？」

「みんな坊主だから」

「なるほど」

詳しく調べたかったが、人の目がある中で死体に近づくのははばかられる。二人は下駄箱の方へと歩いていった。

「いよいよ犯人は本気になってきたという気がします」

「9人というのは野球にちなんているのでしょうか？」

「やはりそうでしょう」

「へ鉄棍ひらめき 砂を嚙む」の見立ては判りやすかったですね」

「鉄棍……金属バットを使った見立てなら間違いないくあんなバイオレンスなものになると思ってました」

「ちよと待ってください。次の歌詞はへ熱球の音 肉の弾ですよ！」

「……嫌な予感がしますね」

「肉の弾……大変だ。早く犯人を止めないと」

「しかし、どこが現場となるかが問題なのです。音楽室、職員室、白亜館、和敬寮、第1グラウンド……、これに何か規則性があるのでしょうか？」

「なんとなく、第1グラウンドは見立てに合ってる気がしますけど、他はよく判りません」

「まだ次のチャイムまでは時間があります。よく考えてみましょう」

その時、放送が流れた。

「おはようございます。生徒会長の徳川岳人です。皆さん既にお気づきでしょうが、滝高は今多大な混乱の中にいます。亡くなっている学友もたくさんいます。いろいろと根

も葉もない噂も飛び交っているようです。皆さん、こんなときこそ皆さんの滝の原主義が試されるときではないでしょうか？僕はそう思います。自分をしっかり持って、見えない混乱と戦っていきましょう。さて、生徒会は皆さんの安全を守るために全力を尽くします。生徒会のメンバーは、緊急ミーティングを行いますので今すぐ生徒会室に集まってください。それ以外の皆さんは、すぐに自分のホームルームに戻って、そこから出ないようにしてください。ホームルーム委員は点呼をとって、誰がいなかを控えて生徒会室までお知らせください。こちらで確認をいたします。皆さんのご協力で、皆さんの安全が守られるのです。どうか、協力、よろしくお願いします。以上」

「徳川くんやる気出してますね」

真琴が口を開いた。

「教室戻ります？真琴様」

「いえ……いったん戻ってしまうと自由に調査できなくなってしまうからやめておきましょう」

外にいた生徒たちがぞろぞろと戻ってくる。意外とみんな素直なのだ。

二人はそれとなく群集から離れていった。

放送を終えた徳川岳人はほっと息をついた。果たして何人の生徒会員が来て、何人のホームルーム委員が来てくれるのか……。

彼は正義に燃える生徒会長だ。この滝の原高校の秩序は自分の双肩にかかっていると信じて疑わない男である。それゆえ時々暴走気味だが、生徒会のほかのメンバーが上手く調整してこれまでうまくやってきた。

◆
報恩館にも放送は流れた。しかし蟹原ばにかは動かない。文芸部員たちも動こうとしない。

日高吞が言った。

「おい。喜多宮の前の原稿用紙、よく見てみるよ」

「喜多宮、字汚いくせに原稿用紙に万年筆で手書きだもんね。文豪気取りか？」

「いやそういうことじゃなくて、これダイニングメッセージじゃね？」

「確かに……。でもこれってどういう意味だ？」

◆
「ふざけんな！」

生徒会長の放送を聞いた的場都馬は叫んだ。彼は中央廊下を歩いていた。これから

図書館へ行くと思っていたのだ。

彼は図書委員長だ。図書館内で殺人が起きたらたまらないと思っていた。彼には図書館を守る義務がある。それに図書館に閉じこもっていれば、この混乱にも関わらないで済むはずだ。

ちょうどロビーに差し掛かったところで、そこでは岡隆夫がニュートンを読んでいた。

「どうした都馬？」

「おう。さっきの放送聞いたろ？全員教室に戻れなんて言う権利がどうしてあの会長にあるんだ？俺は断固反対してやる」

「まあそう言うなって。あの会長も頑張っているんだ」

「俺は図書館に行く。岡っちも来なよ。ニュートン持っていからさ」

「いや……これもうすぐ読み終わるし、そしたら教室戻るわ」

「そうか。じゃあ気が向いたらってことで」

都馬は図書館へと歩いて行った。

「図書館……」と隆夫は呟いた。

◆
ぼちぼちと人が集まってきた。生徒会のメンバーは半分ほど揃った。各クラスのホームルーム委員の報告はまだ3分の1ほどだ。

「まあ3分の1でもよく協力してくれている方か？」

野波ナノが言った。

「それよりも生徒会が半分しか揃っていない方が問題じゃない？」

「みんな、死んじまったのか……」

「嫌なこと言なよ」

生徒会室には重苦しい空気が流れている。

「さ、そろそろミーティング始めようか」

徳川岳人が言った。

「みんなも知っての通り、滝高は未曾有の危機の中にいる。たくさんさんの学友が、死んでいる。もしかしたら殺されているのかもしれない。俺たちでこの混乱を鎮静しよう。いっ外に出られるのか判らないが、これ以上人が死ぬのはごめんだ」

「具体的には何をするんだ？」

「校内のパトロールをしようと思う。二人一組で、校舎を見回るんだ。異論はないか？」

答える者はない。もっとも、反対したところで岳人が一度決めたことを曲げるのはめっ

たにないことだが……。

「じゃあ始めよう。野波と岸はここに残っていてくれ。他のみんなは何か異常を発見したら、ここに戻って二人に報告すること。じゃ、二人組を作って……」

その時、放送が流れた。

「図書館からお知らせします。自習室、中央閲覧室、報恩館を事態が落ち着くまで開放しますので、静かに勉強したい方、安全を求めたい方などは是非おこしく下さい。なお、本校舎からの入口は施錠してしまいますので外側の入口からお回りください。20分後にそこも施錠してしまいますのでお早めに。繰り返します……」

「なんて勝手なことを！」

岳人は吠えた。

「抗議してくる。他の者は仕事を始めてくれ」

彼は生徒会室を飛び出した。ほとんど真向かいに近い場所に図書館への入口があるのだが、そこは既に施錠されていた。重たい防火扉で、押しても引いてもびくともしない。

下駄箱へ走って行った岳人の背中を見ながら、他の生徒会メンバーも廊下へ出て行った。他の者は岳人ほど熱意があるわけではないが、それでも自分たちがこの異常に対して何かしなければならぬということを感じていた。

生徒会室に残った野波ナノと岸芳樹は、壁に貼られた「檄」と題する一枚の紙を見ていた。30年前に滝高のOBが残っていたものだ。

檄

滝の原健児諸君

喜びは天に謝せ

怒りては天に叫べ

哀みては天を仰げ

樂しみは天に謳え

創立百年の

喜怒哀樂をこめ

今宵高らかに

天に向つて

歌はんかな

「俺は怖いよ野波」と芳樹。

「この学校はどうなってしまうんだろうな？」

「大丈夫さ。こういう時こそ滝の原主義だぜ」と意味の無いことをナノが言った。

◆

主に3年生で満員になっている自習室を見て、やはり自分の決定は間違っていないかたとの場都馬は思った。俺の役目は、この静かに勉学に燃える雰囲気壊さないことだ。報恩館も、奇襲室ほどではないが人が増えていた。喜多宮枕の死体とその周りの文芸部員を避けるようにしている。すると必然的に蟹原ばにかの近くに人は集まるわけ、ばにかはげんりした。

出ていくべきだろうか？まだ推理の材料は足りない。人は他にもたくさん死んでいるらしい。彼はこの事件に関するある仮説を持っていた。しかし、それが正しいかどうか確かめるすべはない。これが推理小説なら、とっととページをめくって正解を読めるのだがな……と彼は残念に思っていた。

◆

「何をやっている？早く中にいる生徒を全員教室に戻せ」

図書館入口。生徒会長徳川岳人と図書委員長場都馬は対峙した。

「君にそんなことを言う権利はない。特に3年生は、この時期しっかり勉強したいはずだ。俺はその場所を提供しているんだ」

「なんだと？」

「見ろよ。こんなに自習室は盛況だ。彼らを帰すことがどうしてできる？それに」都馬は笑った。「ここには殺人鬼はいない。安全だ」

「そんなことがどうして判る？」

「判るよ。俺は毎日ここにいるんだ。ここに来る奴らのことはだいたい判る。図書館に来る人には、殺人なんて馬鹿なことをする人はいないんだ」

「そんなの判らないだろ」

「それよりも、図書館が殺人現場として使われる方が問題なんだ。殺害場所は無作為に選ばれているらしいじゃん。神聖な図書館が侵されるのは絶対に許さない」

「……しかし……」

その時チャイムが鳴った。普段だったら2時間目の終わりを告げるチャイムである。

10時30分

チャイムが鳴り終わっても、岳人は黙っている。なんとなく不安を感じた都馬は振り返ったが、図書館内に異常はなさそうだった。

「判ったら、もう帰ってくれ。この鍵もそろそろ閉めたいんだ」
その時また校内放送が流れた。

「鹿瀧会に所属する生徒は、至急大会議室に集まってください。繰り返します。鹿瀧会に所属する生徒は至急大会議室に集まってください」

「なんで鹿瀧会が動いているんだ……？」

「ほら。こんなところでうだうだしている場合じゃないんじゃない？」

「どうやらそのようだな」

岳人は身を翻すと校舎入り口へ走っていった。都馬は鍵を閉めた。これにより、図書館は完全に外部からの人の侵入をシャットアウトしたことになる。

◆
鹿瀧会とは滝高内に存在する秘密結社である。鹿沼市出身の生徒で構成されているらしいが、その全貌は定かではない。その活動、主義、目的、全てが不明のままに秘密結社である。いや、滝高祭の時のみ公に活動している。彼らは鹿瀧会として飲食物の販売を行う。飲食物の販売は一般生徒のブースでは禁止されているから、鹿瀧会は滝高祭での飲食物販売を独占していることになる。ちなみに図書委員会と生徒会を除けば金銭取引が許されているのも鹿瀧会のみである。

◆
調理教室で。琴真琴と白樺芥子はチャイムの音を聞いていた。部屋には、なんら異常は見られない。

「どうやら読みは外れたようですね」

「はい……」

「というか10人を殺すのが別の場所だったとしても、あんな風に並べるのにやっぱり時間掛かるんだから、チャイムが鳴るまでのんきに同じところで待つ必要はないんですね」

「あ、そうですね」

「次からはぎりぎりまで動き続けることにしますか……」

「次といっても10分後だからすぐですよ真琴様」

「ええ急ぎましょう。さて、へ熱球の音 肉の弾の见立てはどこでなされたのかな……？」

いつの間にか、真琴の肩にはスズメがとまっていた。

「生物室です。行きましょうか」

「真琴様、それよりも次の竜攘虎搏 雨を呼ぶの場所を探した方がいいんじゃないでしょうか？」

「ああ、そうですね。とりあえず歩きながら考えましょうか」

二人は調理教室をあとにした。ここは滝高通信棟1階である。滝の原高校には全日制の他に通信制があつて、登校日の火曜日には茶髪のあるちゃんたちが北門でタバコを吸っていることもあつて怖いのだが、今日は誰もいないようだ。全日制の生徒も、家庭科で通信棟内にある調理教室や裁縫室を使用するので、通信棟の鍵は開いていた。

通信棟と本校舎は、1年生の棟の端からのびる外通路でつながっている。二人はそこから校舎内に入った。1年生のクラスの中は騒がしいが、さすがに外に出ていない者がいないようだ。

「どこで起きますかね？」

「竜攘虎搏 雨を呼ぶ……。雨がキーワードですかね。するとシャワー室とか？プールと運動部棟にある……。他にもあるのかもしれませんが」

「いざいざも狭すぎるでしょう」

「そうですね。ところでりゅうじょうこはくってなんですか真琴様？」

「さあ？ りゅうは竜だしこは虎だから、まあ竜と虎が争つてどうのこうのという意味でしょう」

「竜と虎という意味なんですか。てっきり竜状の琥珀のことだと思っていました」

「なんか強そうな琥珀ですね……」

中央廊下に出る。

真琴は窓から外を覗いた。空は灰色の雲が重く立ち込めている。

「雨が降る気配はなさそうですね」

「はい……」

二人はとりあえず南に向かって歩き始めた。

「それにしても人が全然いませんね」

「みんな意外と素直なんですね」

「ま、そこが滝高生らしい、というところですか」

「滝の原主義ですよ。これが」

芥子は真琴の手を握った。

「ちょっと、駄目ですよ芥子さん。こんなところで。人に見られたら……」

「大丈夫ですよ。誰もいませんから」

「まったく、もう……」

口では嫌がりながらも真琴から手を振り放すことはしない。

二人は恋人つなぎしながら廊下を歩く。

◆

大会議室では、鹿瀧会の緊急集会が始まっていた。会長が口を開く。

「諸君。よく集まってくれた」

正方形を描くように長机が設置され、その後ろには椅子が並んでいる。空席はほとんど無い。

「この滝高は今、大変な危険の中にいる。人が次々と死に、助けは来ない。しかしこれは我々にとって好機でもある。理由は判るかね？」

会長は周りを見渡した。会長以下、全てのメンバーは顔を仮面で覆っている。オペラ座の怪人がつけているようなやつだ。メンバーのプライバシーを尊重してのことで、口元も隠れているので声の感じも変わっていて、仮面の裏の人間が誰なのかはメンバー間で判らないようになっていた。仮面にはアルファベットがふられている。「N」という仮面をつけた者が声を上げる。

「もちろん。現生徒会長徳川岳人を亡き者にする……そうでしょう？」

「その通り。そして我ら鹿瀧会のメンバーを新会長に擁立するのだ。これで遂に鹿瀧会は滝高を制圧することができる」

「悲願達成ですね！」

「その通りだ。鹿瀧会に栄光あれ！」

「栄光あれ！」「栄光あれ！」「栄光あれ！」

「さあ。作戦会議に入ろうか」

チャイムが鳴った。

10字40分

◆

「チャイム鳴ってしまいましたね」

「結局、見つかりませんでした」

二人は事務室まで来ていた。管理棟1階の西端、職員用玄関のある近くである。普段はなかなか近寄らないところだ。もちろん、人は誰もいない。

扉からスズメが飛んできて真琴の肩にとまった。

「次の見立ての舞台はひょうたん池だそうです」

「ひょうたん池……。水つながりってことですか」

「どうします？ きつぎみにたいに生物室とひょうたん池を分担して見に行きますか？」

「え？ いや一緒に行きましょうよ。危ないですし」

「それもそうですね。じゃあまずひょうたん池から」

二人は手をつないだまま、玄関から外に出た。

◆

「なんでうちのクラスはこんなに人間がいなんだ……」

洲焼幹康は呟いた。2年4組の席は半分も埋まっていない。さながら化学のテストの追試が行われている昼休みのようである。

「みんな、殺されてるってか？」

牧野軒真が答えた。

「いやなこと言うなよ……」

「でも、そうとしか考えられないだろ？」

「全員ってわけじゃないだろ？ 野波とかは生徒会だし……、あとは鹿瀧会の人もいなかった？」

「ああいたかも。でも鹿瀧会ってほんと謎だよな。こんな時に集会開くとか」

「実は鹿瀧会がこの事件の黒幕だったりして」

「うわ、怖いこと言うなよ」

「徳川は勝手なことされて怒ってんだろ？ なー」

「図書委員会も好き勝手やってるし」

「でも図書館にいれば安全って気がしない？」

「そうか？」

「的場なんか頑張ってるじゃん」

「いや……。案外図書委員会が黒幕だったりして」

「お前ほんと黒幕好きだな」

「まじで犯人誰なんだろうな。俺たちも皆殺しにされるのか？」

◆

滝の原高校 講堂。学年集会などに使用され、放課後は合唱団の練習場所として使用される。ここはもちろん今は施錠されていた。

講堂内部の壁には、明治の時代から続くこの学校の、歴代の校長先生の肖像写真が飾られている。彼らが見守っている中、講堂内には会議が行われていた。

「いよいよ次は君の番だな。〈質実剛健〉よ」

「ああ」

「君がいつてしまったら、いよいよ二人だけになってしまっただね。三人でもきつかったのに」

「へ敬信愛へは本当によく働いてくれた。……あ、もちろん諸君が働いていないというわけではないぞ」

「判ってるよ。これはみんなで成し遂げるべき仕事だ。それに後に残されれば残されるほど、仕事は重くなっていく」

「その通りだ。へ進取究明へ。いちおう最後の一人になる君が完遂できるような割り当てにはしてあるが、正直仕事はかなりきついものになる」

「大丈夫。まかしといて」

「確認しておくが……」

「どうした？へ自律自治へ？」

「もうアンチ・タキノハラは一蹴したんだよね？」

「ああ。彼らには一足先に滝の原と一つになってもらった。これからは無差別に生徒を選出する。もっとも、半分以上は既に選んであるが」

「そうか……。抜け目無いな」

「あ、そうだ。ねえへ自律自治へ。図書委員会と鹿瀧会はどうするの？なんか勝手に動き出してるけど」

「別にほっとけばいいと思うが？鹿瀧会にはそれほどの力は無いし。まあ図書館が籠城しているのは閉口だがな、そこまでそこに人がいるというわけでもあるまい」

「ああ。その点について少し計画を変更した。へ進取究明へよ、これを見てくれ」

「なるほど……楽しそうな計画だね」

「君だからこそできる計画だ。さ、そろそろ時間だ。へ質実剛健へよ、へ自律自治へよ、へ進取究明へよ、それぞれ自分の役割を果たし、真の滝の原主義を確立して欲しい」

「ああ」「もちろんだ」「判ったよ」

「それでは、解散！」

「へ質実剛健へとへ自律自治へとへ進取究明へ」は講堂の裏口から外へ出て行った。講堂には、へ滝の原健児へだけが残された。

◆ ひょうたん池が見えてきた。ここは本校舎の東側、通信棟の北側にある、文字通りひょうたんの形をした池である。草木が生い茂っていて普段生徒が立ち寄ることはあまりない。

滝高校章を形作る10の死体がほとりに置かれていた。死体とその周りはぐっしりと水で濡れている。死体の顔には藻のようなものが張り付いているものもある。

「へ竜攘虎搏 雨を呼ぶへです」

「ひょうたん池の水をかけたってことですか」

「なんか無理やりですね」

「所詮滝高生が考えることですから」

「あ、真琴様ちょっと待ってください」

死体を見てさっさと立ち去ろうとする真琴を引き止めると、芥子は死体の近くまで下りていった。

「何か気になることでも？」

「はい……」

芥子は死体の学生服の第2ボタンを確認する。全て反対についていた。アンチ・タキノハラの証。

「やっぱり」

芥子は真琴の側に戻った。

「どうしたのですか？」

「ええ。実は……」

芥子は真琴の制服の第2ボタンを見た。

「真琴様。第2ボタンが反対についていますよ」

「え？」

真琴は自分の胸元を見た。

「やっぱり真琴様もアンチ・タキノハラなのではないですか？」

「……」

「この事件、被害者のほとんどがアンチ・タキノハラなんです。学ランの第2ボタンが反対についているのがその証です」

「ちょ、ちょっと待ってください。さっきから何を言ってるんです？アンチ・タキノハラってなんのことですか？」

「……もしかして、知らないんですか？アンチ・タキノハラを。真琴様？」

「ええ。知りませんよ」

「じゃ、じゃあ、その第2ボタンが逆についているのはどうですか？」

「ああ、これ……」真琴は微笑むと、学生服の内側に手を差し入れ、裏ボタンを外し、第2ボタンを通常の向きにつけ直した。「うちのうさぎのアリスが最近光るものを集め

る癖をつけてしましましてね……。とられてしまったのをとり返して、つけ直したんです。が、逆につけていたようです」

「なんだ。そうだったんですか……」

「それで、アンチ・タキノハラとは？」

「僕も蟹原くんから聞いた話なんですが……」

芥子は説明した。

「それで僕は思うんですけど、この事件は集団自殺なんじゃないですかね？」

「集団自殺……？　どういう意味ですか？」

「アンチ・タキノハラは自らの血で、この滝の原高校を汚し、滝の原主義を蹂躪しようとしているのです。滝の原高校応援歌の見立てをしているのも、あれは滝の原主義を茶化しているんですよ。たいしたこと無い見立てをすることで、滝の原主義もたいしたこと無いと示そうとしているのです！」

「なるほど……。面白い説ですね」

「ありがとうございます！」

「しかし……。私には、この事件がアンチ・タキノハラとは全く逆の思想を持った、この滝高を心底愛する人による犯行のような気がしてならないのですよ」

「と言いますと？」

「普通、見立てというのは、たとえば聖書とか、山や川とか、有名な古典ミステリとか、そういう言わば「大きな物語」を見立てることで、小さなものをスケールの大きなものに見せるといふ狙いがあります。それを考えると、滝高の応援歌を見立てるのは、まさに滝の原主義を体現しようとしているということではないでしょうか？」

「なるほど。なんかすごく納得させられました」

「こんな説明で納得されても……。こんなの、単なる想像ですよ。芥子さんの説が正しいかもしれません。さあ、それでは生物室に行きましかうか？」

二人は再び仲良く手をつなぐと、校舎へと歩いていった。

◆
報恩館は奇妙に静かなざわめきが満ちていた。勉強に興じる者も少しはいるが、ほとんどの者はひそひそ話をしている。この事件についての話だろう。全部で10人ほどが、生徒会長の勧告を聞かず報恩館にとどまっていた。中央閲覧室のほうは15人ほどが真面目に勉強していて、私語は聞こえない。

蟹原ばにかは喜多宮枕の死体に近づいた。日高舌が声をかける。

「お前は？」

「俺？　蟹原。喜多宮と同じクラスの」

「へえ」

「ちょっと喜多宮くんが何を書いているのか気になっちゃって」

「あ……。ああ」

「さてさて……。めんなさいね喜多宮くん」

ばにかは喜多宮枕の書きかけの原稿を見た。そこには万年筆の乱れた筆跡で、

滝の原健児

と書かれていた。

「ダイイング・メッセージであることは間違いないんだがな……」

「君もそう思うか？　やっぱり喜多宮氏は滝の原健児によって殺されたのだ」

「でも滝の原健児は実在しないんじゃないのか？」

滝の原主義を実践する、滝の原高校の理想の生徒像として「滝の原健児」がいる。滝の原健児は校長の挨拶など、いたるところに登場するが、もちろん実在するわけじゃない。

「滝の原主義に殺された、とか？」

「わけが判らん。もっと別の意味があるのかもしれない。たとえば、俺も滝の原健児になりたかったとか」

「喜多宮氏に限ってそんなことはないでしょう……」

議論を交わす文芸部員を尻目にばにかは中央閲覧室へ向かった。カウンターでは的場都馬が一人座っていて本を熱心に読んでいる。

「よう都馬」

「お、ばにかちゃん。いたの？」

「ああ。でさ、ちょっと頼みがあるんだが……。そのパソコンを使わせてくれないか？」

ばにかはカウンターに置かれたパソコンを指差す。本の貸し出しのために使用されるパソコンだ。

「どうして？」

「それに名簿が入っているだろ？　それを確認したい。確認するだけだ。それで何かしようというわけじゃない」

「名簿？　別にかまわないが……。変なこととはしないでよ」

ばにかはカウンター内に入り、都真の隣に座ると、パソコンを操作し始めた。図書館

カウンターのパソコンには、貸し出しカードを忘れた人に本を貸すための、教師を含む全ての滝高内の人間の名簿が入っている。もともと、年度が変わる度に更新されるのだが。

ばにかは「滝の原健児」の手がかりを探す。そのままの名前は載っていないけれども、たとえば滝の原健児をもじった人名などが見つかるかもしれない。

◆
「肉の弾」があった。幸いと言っていだろうか、肉は人間の肉ではなく、生物室で飼われていた魚や亀などの動物の肉だった。

机が並び生物室に橋を架けるように死体が並び、滝高の校章となっていた。
「熱球の音 肉の弾」……

肉塊が死体の中心にぽつんと置かれていた。動物たちの肉塊。

「芥子さん……。初めて私は犯人が憎くて憎くてたまらなくなりました」

「真琴様……」

「絶対に、絶対にこんな最低のことをした犯人を捕まえて、殺します」

「殺すって……」

「当然です。生き物の命をこんな風にもてあそばなんて、その罪は死に値します。協力してくれませんか？ 芥子さん」

「……もちろんです。真琴様」

真琴の眼は憎しみで妖しく輝いている。

◆
生徒会室の横を横切る人影に気づいた岸芳樹が廊下に出ると、岡隆夫が歩いていた。芳樹は隆夫と面識が無く、名前すら知らなかったが、それでも声をかけようと近寄った。

「ちょっと……」

隆夫が振り向いた。

「あ、いえ、なんでもありません」

芳樹はすぐ退散した。隆夫の顔は熊でも睨み殺せるくらいのもので、い形相をしていたからだ。

「なんなんだあれ……？」

「どうした岸？」

生徒会室に戻った芳樹に野波ナノが声をかける。

「なんか柔道部っぽいやつが外歩いてたから声かけようとしたんだけど、そしたらもの

すごく睨まれちゃって」

「なんだそれ怖いな。もしかしたらこの事件の犯人じゃね？」

「え。まじかよ」

「おっしやおいかけようぜ」

「いやいややめとこうぜ。変に関わらない方がいい」

「ま、そうだな。俺たちは俺たちの役割を果たそう。しかしそれにしても……。会長遅くね？」

◆
次の「戦いまさ」に「たけなわよ」の見立てがどこで行われるのか、芥子と真琴は探し回った。タイムリミットは刻々と近づいていく。

あの10の死体が一瞬で生まれるはずは無いのだ。チャイムまでにその現場を押さえられれば……。しかし、無常にもチャイムは鳴る。

11時30分

「あああ息をつく二人。」

「見つかりませんでしたね……」

「ええ……」

真琴の肩にスズメがとまる。真琴の顔色が変わる。

「どうしました？ 真琴様」

「第2グラウンドでした」

「第2グラウンド……！」

「完全な盲点でしたね。……行きましょうか」

「あ、でもあと10分したらまたチャイムが鳴ってしまいますよ」

「次は（一角崩れ また崩れ）」

「また嫌な予感が……」

「でももはや全く予想が付きません……。10分待つて、場所を確かめてから第2グラウンドへ行きましょうか」

「そうしますか」

二人は疲れていたのだ。今、彼らがいるのは2年棟の真下。駐輪場の横である。チャイムがうわんうわんと反響した。

11時40分

轟音がチャイムの余韻を消し去る。

二人の目の前にある、1年棟の、一角、1年7組があるあたりが爆破された。

思わずへたり込む芥子の腕を引っ張る。

「危ない芥子さん！こも崩れるかもしれない。へ一角崩れ また崩れですよ！」

二人は1年棟のほうへ走った。幸いその後の爆発はなかった。

1年7組とその下の3組の生徒だろうと思われるたくさんの死体が転がっていた。見るも無残な有様だった。滝高の校章があるのかもしれないが、そんなもの判らない。

普段なら第2グラウンドへ行くためにはいったん門の外に出て立体交差になっているところを通らなければならないわけだが、外は荒野が広がっているため、線路を直接横断した。

二人の口数は少ない。あんな爆発を起こすような危険な奴に勝てるはずが無い……という無力感に全身を包まれていたからだ。

第2グラウンドには果たして死体が並んでいた。校章の形に並ぶ死体。死体を確かめたところ、アンチ・タキノハラの証を持つものは無かった。そしてその傍らには、岡隆夫の死体が、大の字に、仰向けに、胸に深々とナイフを突き立てられ、まるで飛沢佐備斗の死体と同じように転がっていた。

「飛沢佐備斗。岡隆夫。二人に共通すること……」

「この二人が、犯人なんでしょうか？」

「それはまだ判りません。でもこの二人に何か特別な意味があることは確実です」

「二人とも運動部ですよ？飛沢くんはサッカー。岡くんは柔道。どちらも部の中心人物ですよ」

「はい。まあタイプは違いますが。飛沢くんはみんなを慕い、みんなから慕われるタイプ。岡くんは一人で寡黙に取り組むタイプ……。あ！」

「どうしました？」

「殺されるタイピングが重要なのでは？飛沢くんはへ勇みて向こう 常勝軍へ、岡くんはへ戦いまさに たけなわよで殺された。これはどちらも歌の切れ目にあたる部分です。歌は全部で4連ある。それぞれ最後に一人特別に殺される人が決まっている……。滝高で4といえば、4つの生徒指標だ。「和敬信愛」「質実剛健」「自律自治」「進取究明」。さっき言った飛沢くんとか岡くんのタイプは、それぞれ「和敬信愛」と「質実剛健」を表していると思いませんか？」

「……！」

「となると、この事件はやはりその生徒指標にちなんだ4人が起こしているのですよ。そして、歌の区切れごとに一人ずつ自殺していく。これなら、あの職員室での状況も説明つきます。やはり職員室の事件は飛沢くんが起こしたのです」

「なるほど……。となると次の事件は「自律自治」の人が起こすということですか」

「「自律自治」と「進取究明」の二人で手分けしてやるのでしょうか」

「いったい誰が……？」

「「進取究明」はともかく「自律自治」は判りますよ」

「えー誰ですか？」

「そんなの、徳川岳人生徒会長に決まってるじゃないですか」

◆

校舎内は仮面をつけた者たちが歩き回っていて不気味だった。もちろん彼らは鹿瀧会で、徳川岳人を探し回っているのである。しかし彼の姿は見えない。

「X」の仮面の裏で男がにやりと笑っていた。彼こそが件の徳川岳人である。彼は極秘に鹿瀧会仮面を手に入れていたのだ。

仮面に紛れて彼は行動を起こす。

◆

真琴と芥子が校舎に戻ったところには本来4時間目であるこの時間は終わりに近づいていた。

「場所の規則性が判れば待ち伏せもできるんですけどね」

「しかし、規則性なんてありませんよね……。見立てに使える場所を選んでいるとしたか」

「次はへ敵の陣営 色めけばです。どこだろう？」

ここで時間切れ。チャイムが鳴る。

12時30分

二人は美術室へと向かった。もはや定番となってしまう流れである。校舎の中には仮面をつけた異形の集団が溢れかえっていた。「B」の仮面をつけた者が二人の近く来て問うた。

「徳川岳人を知らないか？」

「さあ……？ 私たちも彼を探しているのですよ。あなた方は？」

しかし「B」は何も言わず言ってしまった。

「なんだあいつ。失礼な奴だな」

「なんとも不気味な集団ですね。滝高にこんな組織があったんですか」

「外出禁止令が出るのに……」

「今思うと、あれも自分が犯行をしやすくするために出したのかもしれないね」

美術室は机が脇に押しやられ、死体が並んでいた。死体には色とりどりのペンキがぶちまけられ、極彩色の校章となっていた。

「色めけば」ということですか……」

二人はなんだかすごく脱力していた。

通常ならこれから昼休みだ。空腹も覚えているので二人は教室に戻ることにした。

教室に戻ると、二人を好奇の視線が射抜いた。

「帰ってきたんだ」

幹康が言う。

「なあお前ら。まさか犯人じゃねえよな」

「もちろん違いますよ。私たちは探偵役です」

「探偵……」

「この事件の全貌もだんだん判ってきました。もしかしたら解決できるかもしれません」

「本当か……？俺たち、死なないで済むのか？」

「ええ。おそらくは。この部屋から絶対に出ないようにすれば、少なくとも身の安全は守れるはずですよ」

「そ、そうか……。なんか人がいつの間にか消えていくから、怖くて怖くて」

「そのようですね……」

クラスの生徒は半分ほどしかない。

「確認しますね……」

真琴は教壇に立つと、座席表と照らし合わせた。

「私たちは今のところ全ての殺害現場を見えています。今いない人のうちのほとんどは死体となっているのを確認しています」

クラスに残っていた者が悲鳴を上げた。

「私たちがその存在を確認してないのは、蟹原くん、金谷くん、喜多宮くん、野波くん、鯖爪くんくらいですかね」

「よく判らん連中が残ったな。野波は生徒会だろうが」

真琴は席に着いた。芥子も隣に座る。

「さあ。お弁当をいただきますようか」

「わあい。真琴様。今日も腕によりをかけてお弁当作ってきましたよ」

芥子は鞆から2つお弁当箱を取り出した。二人の間には、惨劇を忘れるほどの甘い空気が漂う。

◆ 「腹減ったな……」

報恩館に閉じ込もっている文芸部4人組はそろって呟いた。

「弁当持ってくりゃよかったな」的場氏に頼んでも教室に戻らせてくれないさそうだよな」

「よう」

蟹原が近づいてきて言った。

「さっき名簿を調べたんだが、滝の原健児、またはそれに似た名前の生徒、職員はいなかった」

「そうか……。それにしても腹が減った」

「腹？我慢だ我慢」

「そんなあ」

◆

なんとなく疾風迅雷躍りこむは外でありそうだということ、弁当を食へ終えた真琴と芥子は外をうろついていた。第1グラウンドの端を歩く。校庭に死体がある風景というのなかなかどうして嫌なものだ。

「もうすぐチャイム鳴りますね」

その時、がたん、ごん、というおなじみの電車の音が聞こえてくる。

「まさかー」

二人が線路脇まで駆け寄っていく中、線路を電車が通ってくる。市外から来る滝高生のほとんどが使用する日光線の電車である。電車はゆっくりと停車した。駅でもない、滝高の敷地内である。停車と同時にチャイムが鳴った。

13時10分

「きたかー。きたかー」

間延びしたアナウンスと共に、扉が開かれる。社内には死体が並んでいた。無理やり押し込まれているため、ひしゃげた校章になっている。

歩み寄ろうとする芥子をとめる真琴。

「待つてください。次の事件の場所が判ったかもしれません。3連の終わり。区切りとなる部分です。次のへ剽悍決死のわが勇士で、「自律自治」の化身たる、まあ私が推測するところの徳川岳人くんが殺されるわけですが、飛沢くんのことを思い出してください。「和敬信愛」の化身たる彼が殺されたのはどこか。そう、和敬寮です」

「じゃあ。次は自律館で起こる可能性が高いということですか？」

「急ぎましょう間に合うかどうか……」

二人は駆け出した。しかし5時間目が始まるチャイムはすぐに鳴ってしまう。

13時15分

自律館は体育館の来たに立つ柔道場のことだ。果たして、中には校章の形の死体と、生徒会長徳川岳人の死体が畳を赤く染めていた。死体の周りにはひょうたんが並んでいた。まるで死者を慰める埴輪のように。

「思えば、第2グラウンドも「質実剛健」にあてますよね」

「ええ。「質実剛健」と「進取究明」はその名を冠した建物が無いから、近いところを選んだということなのでしょう」

「すると、最後のへ帰らんかなや いざやいざでも、「進取究明」にちなんだ場所で事件が起こるということですか」

「はい……。そこで賭けをしてみたいと思うんですが……どうでしょう？」

◆

14時05分

1年棟と2年棟の間の空中庭園に滝高校章が生まれた。

14時15分

正門を入ってすぐのロータリーに滝高校章が生まれた。

◆

金谷中からのメールを受け取った場都馬は、図書館入り口の鍵を開けた。

「やばり来たな金谷。お前が来ないなんておかしいと思ってたよ」

「最初は素直に教室で勉強してたんだけどさ、うるさくて。やっぱ図書館が一番落ち着いて勉強できる」

中が図書館に入り、都馬が鍵を閉めようとしたとき、

「僕もいれてくれない？」

と芥子がやってきて言った。

「あら？白樺さんじゃん」

「ようこそ図書館へ。いつも一緒にいるあの美少年はいないの？」

芥子と真琴はよく放課後を図書館で一緒に過ごしていた。

「うん。ちよとね」

全員が入った後、都馬は鍵を閉めた。

◆

「なんか防火扉の方が騒がしいんだけど」

という金谷中の声を聞いている場都馬が向かうと、確かに向こう側から防火扉を叩く者がある。図書館と中央廊下を結ぶ通路の防火扉だ。都馬は多少心配そうな面持ちで扉を見ていた。この扉が破られるはずはない。しかし……。

ごうん。ごうん。ごうん！轟音が扉をへこませていく。そして――

中央廊下側から、勝鬨の声が上がった。

都馬がはっと気づいたときには、扉が破られ、大量の滝高生の群れが的場都馬を押しつぶしていく。彼らはそのまま奥の視聴覚室へと殺到していく。そしてチャイムが鳴った。

15時05分

静かになってから、芥子が恐る恐る近寄ってみると、的場都馬は無残に踏み潰され、ぼろぼろになって死んでいた。視聴覚室には、10の死体による校章の他は、あんなにいっぱいいた滝高生たちは影も形も見えなくなっていた。窓から逃げたのだろうか？

芥子は真琴に電話をした。しかし、10分ほど前には出たのに、今は待てど待てど出ない。

不安に駆られた芥子は図書館を飛び出した。追い立てるようにチャイムが鳴る。

15時15分

◆

真琴の賭けは次のようなものだった。

「進取究明」の舞台としての有力な候補は2つある。一つは図書館内の自習室。もう一つは本校舎管理棟2階の進路閲覧室。どちらかに絞るのは難しい。そこで二手に分かれてそれぞれに張り付くことにする。上手くいけば、犯人を現行犯で捕まえられる

るかもしれない。

琴真琴は賭けに、ある意味では勝ち、ある意味では負けたのだった。

白樺芥子が進路閲覧室で見たのは、滝高の校章と、その横にうつ伏せになっている琴真琴の肢体だった。真琴の背にはナイフが突き刺さり、血が流れ出ている。

芥子はその場で吐いた。お昼をすっかり廊下に出してしまった。それから真琴のもとにふらふらと近寄った。

何故、真琴が殺されなければならぬのか……？

真琴の右手の指先はリノリウムの床に触れていた。血で文字を書いていた。

もっいちど

何かもう一度なのか。芥子には判った。応援歌は、最後だけ繰り返しがあるのだ。

へ帰らんかなや いざやいざ 帰らんかなや いざやいざ 真琴は。へ進取究明へがもう一度死ぬための身代わりとして殺されたのだ。

「真琴様。必ず戻って参ります」

白樺芥子の眼には決意がこもっていた。

◆

自習室では金谷中が一人立っていた。

「やあ。待っていたよ。たった今死体を並べ終わったところだ。まだチャイムが鳴るのは先だけとね」

「金谷くん。君が真琴様を殺したんだね」

「その通りだ。でも殺したという言い方は心外だね」

「なんだって？」

「琴真琴は自分の命をこの滝の原高校に捧げることに成功したんだ。ま、僕がお手伝いしたんだけどさ。この学校で死んで滝の原高校の血となり肉となる。これこそ、究極の滝の原主義だと思わないかい？」

「言ってる意味が……」

「判らないか。そりゃ残念。でも僕を殺すことはできるだろ？」

「え？」

「そこにナイフがあるだろ」中は芥子の足元を指差した。「それで僕を殺してくれ。それで僕の役割は終了するんだ」

「……」

「殺したいほど僕を憎んでるだろ？じゃあ殺せばいい。それで僕はやっと滝高と一つになれる」

「……嫌だ」

「なんで？……ああ僕が死んでから誰が自分を滝高と一つにしてくれるのか心配なんだね？それは大丈夫。僕が死んだ後、すぐに滝の原健児がやってきて生き残った生徒を全員殺していくから」

「なんだって……？」

「もともと逃げ場なんて無いんだよ。みんな死んで、みんな滝高と一つになるんだ。ああ、なんて素晴らしいき滝の原主義」

「……狂ってる」

「さあ早く僕を殺してくれよ。一瞬で終わる。さあ早く」

「…………」

「芥子くんは殺せないようだな。やっぱり」

芥子が振り返ると、そこには滝の原健児が立っていた。全ての滝高生の顔を平均したような顔。坊主頭。背は低く、がっしりとしている。

「ちよと早い、もう始めてしまおう」

滝の原健児が腕を一振りすると金谷中の心臓は止まる。芥子のほうを向いて、

「さあ、真の滝の原主義の始まりだ」

何が滝の原主義だ。僕は滝の原健児の首を手刀で刎ねる。にちりりりと健児の首が飛ぶ。

僕は報恩館を誰もいないようにすると、そこに白樺芥子と生き返らせた琴真琴を入れる。ここで好きなだけ愛を交わせばいい。僕はなんだかんだでこの二人のキャラが好きなのだ。他の連中はどうしようか？まあどうにだってできる。何故なら僕はこの物語の執筆者だからだ。生かすも殺すも思いのまま。喜多宮枕も滝の原健児も関係ない。この世界を創ったのは僕だ。僕の名を覚えておくがいい。その名は、夏炉かなた。

〈作者コメント〉

Twitter やってます。follow してくと、楽しいかも。

@karo_kanata

そして世界が減じるまでは

小金井ささら

三日前、一匹の猫が死んだ。
昨日、二軒の家が焼けた。

朝、教室で一人の人間が死んでいた。
それは酷い死に様だった。

床一面に広がる血の海。天井から逆さ吊りにされた首。縦にスライスされ一枚一枚壁に貼り付けられた胴体。
二本の足は机に踏まれ、腕はその上で助けを求めるように天へと伸びる。
どこからどう見ても、誰かが殺意を持って殺したことは明らかだった。
僕の斜め後ろにいた人間が吐いた。そのまま、保健室へと運ばれていった。

数人の教師が来て、野次馬生徒達を退けた。それに従わない連中は、強制連行された。
程なくして、緊急全校集会が開かれた。

始めに持ち物検査が行われた。それはプライバシーなど知ったことかと言わんばかりの暴挙だった。鞆の中身は全て引張り出され、それどころか筆箱や財布の中身さえぶちまけられて、凶器となり得るものはおろか、外部との通信手段となりうるものまでも残すことなく見つけ出され、例外なく全て没収された。

二校時から通常日課で授業をすること、担任の指示に従って行動すること、今日あったことを他人に言っはならないこと、そして従わない生徒には強制指導が待っていること。こんなことを集会の最後に校長は言っは、集会は終わった。

いつのまにか完璧に片付けられた教室で授業が進む。朝起こったことなんて初めから無かったかのよう、平

然と。

それは不気味な平穏だった。脅されて怯えながら平静を保とうとしている生徒達。指導というのは名ばかりで、実際は何時間にも及ぶ武力制裁を受けた末に、他言無用の洗脳をされてようやく解放されるということとは誰もが知っていることであつた。警察が来る気配はない。学校は事件を隠そうと必死なようだ。

最初の授業が終わったことをチャイムが示したと同時に、どこからか悲鳴が聞こえてきた。生徒達が野次馬となつて駆け出す。僕は歩いてその流れについていった。

いつもの教室からだいたい離れたところにある教室。この辺りの教室は、今はほとんど使われていなかったはず。その入り口に、人だかりができている。僕は遠くから中の様子を確認した。

教室の中央に、人間の死体があつた。

首はもぎ取られ、朝死んだ人間と同様に天井に吊り下げられている。首のない体には、それを覆い隠すかのよう

に、体中隙間なく画鋏が突き刺さっていた。教師が来て人ごみが消えてくると、その人混みの中に生徒が倒れているのが確認できた。どうやら、悲鳴の主はこの生徒らしい。そう僕は思った。

朝の騒ぎで担任が出席を取り忘れていたことに気づいたので、思い切って三時間目をサボり僕はこっそりと職員室を覗いた。

職員室は何時になく騒がしかった。こうすべき、いやそれは駄目だ、と議論が続く。

僕は、職員に見つからないうちに立ち去ることにして、自分の教室の方向に向かった。教室の近くまで来ると、さすがに教室に入るわけにもいかないから、とりあえずトイレに隠れた。

三時間目も終わりにさしかかった頃、どこからか――声の方向からしておそらく僕のクラス――もはや悲鳴とも呼べない叫び声が校舎に響いた。

思わず耳を塞いだ、それでもうるさいほどの大声。場所と、授業中ということを考えれば、クラス全員分の声なのだろう。

生徒たちがまた懲りずに人混みを形成していたから、その混乱に乗じてトイレから抜け出し、ついでに教室へ

向かうと、教室中の生徒が床に転がって苦しんでいた。彼らの肉体は全身が焼けたように腫れ上がり、床には多量の薬品が撒かれていた。天井は崩れ落ち、元の形を保ってはいなかった。天井から液体が滴る。――そうか。天井の上に薬品が仕込んであったのか。程なくして、彼らは全員死んだ。

昼休みになると、生徒たちが犯人捜しを始めた。彼らの説の多くは客観性に乏しく、憶測でものを言っているに過ぎなかった。そもそも、こんな連中だ。犯人を見つけることではなく犯人役を押し付けあって遊んでるだけだろう。犯人を見つける気はないように思えた。

そんな生徒達とは裏腹に、僕は犯人に心当たりがあった。彼は僕の友人だった。彼は僕を親友だと言ったが、僕が彼をそんなように思ったことはなかった。ただ、確かに彼は僕の数少ない友人ではあった。

そして今日死んだ人間達は、例外なく――僕にいじめをしていた人間だった。僕はいじめを受けていた。今日の死者たちは教師どもに悟られないようにしつつ、僕を痛めつけてきた。暴力よりも、むしろ物への攻撃や言葉による精神的な攻撃が主だった。僕は様々な大人たちに何度も相談したが、誰一人として信じてくれはしなかった。

彼は屋上が好きだった。だからこんな時は屋上にいるだろうと思い、校舎の屋上に向かった。屋上への扉は閉ざされていた。窓から確認しても、屋上に彼を見つけることはできなかった。

校舎に戻って、その中をしらみつぶしに探す。昼休みが終わると、教師に見つからないように隠れて、次の休み時間を待った。そして、休み時間になるとまた搜索を再開した。

最後の休み時間、僕はようやく彼を見つけた。彼は二人目の死者がいた教室にいた。彼は窓際に一人たたずんでいた。

僕は彼のもとに行き、お前か、と尋ねる。そうだ、と彼は答え、続ける。俺だ、と。彼はさらに続ける。自白と断罪を。彼もいじめを受けていた。その内容も、僕とほとんど同じだった。だけどそれを僕は知らなかった。彼は、必死にこのことを隠していたのだった。だが、徐々に激しさを増す攻撃に、彼は忍耐の限界を感じ、今回の犯行を決意した。そんな言葉のあと、彼は――お前が傷つくところを見ていたくなかった、と小さな声でつぶやき、自白を終えた。

最後に彼はこう言った。もういいから、すべてを消し去るよ、と。そのとき一斉に、数多くの爆発音が聞こえた。

燃え盛る炎。崩れゆく校舎。逃げ惑う生徒達。そんな中、僕と彼はただ、教室から外を眺めるだけだった。終業のチャイムが鳴った。今までで一番の大爆発が起き、校舎は、倒壊した。重たい校舎の中で、僕は、静かに目を閉じた。

終

あとがき

…し、死ねる…。

あ、どうもこんにちは。もしくはこんばんは。小金井ささらと申します。今これを書いているときがどんな状況なのかを説明しますと、宇高祭の前々日があと二十分で終わろうとしているときで、それなのにまだやらなきゃいけないことが山積みのまま残っている、そんな状況です。

えっと…：今回も短編一本です。二本の予定だったのですが、時間が（以下略）

私は多数の文化部に所属しています、なので去年の宇高祭は予定を控えめにして様子を見ていたのですが、予想に反して暇すぎたので、今年は予定を増やしてみたら増えすぎたよ！といったところですよ。何を増やしたかと言いますと、まずギャルゲーの制作企画を立ち上げました。Project・Greenってやつです。この宇高祭で体験版が出ます。それと、ミス宇高に出場します。はい、出ます。

で、そしたらやるのが山積みになります（以下略）

ちなみに私は来年の宇高祭までは活動をしようと思っているので、来年の文芸部誌にも参加できたらいいなと思ってます。あ、日付変わった。

あと、ホームページ作ります。アドレスは<http://koganeisasara.mitarashidango.com/>を予定しています。取得済みです。できるだけ早く作るのでもしよろしければ訪ねていただけると幸いです。

それでは、この冊子作成に関わった全ての方に、そしてこれを読んでくださった皆様に感謝をしつつ。

二〇一〇年〇九月〇四日

小金井ささら

奥付

文芸部誌「宇高書房」PDF版

2010年9月5日 初版 発行
2011年9月13日 PDF版 発行

著者 宇都宮高校文芸部員

発行者 宇都宮高校文芸部

印刷・製本 宇都宮高校文芸部

〒320-0846

栃木県宇都宮市滝の原3丁目5番70号

MaiTo utakawriters@gmail.com

Twitter @utkwriters

HomePage <http://utkwriters.iza-yoi.net/>
Weblog <http://utkwriters.sugo-roku.com/>